The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	チベット文字で書かれたウィグル文仏教教理問答(P.t.1292)の研究
Author(s)	森安, 孝夫
Citation	大阪大学文学部紀要. 1985, 25, p. 1-86
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/11979
rights	本文データはCiNiiから複製したものである
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

チベット文字で書かれたウィグル文仏教教理問答 (P. t. 1292) の研究

森 安 孝 夫

はじめに
第一部 テキスト
1. 解題
2. テキストと和訳
3. 語彙索引
第二部 歴史学的研究
1. 年代
2. 敦煌仏教と六道
3. 西ウィグル仏教との関係
4. 古代チュルク人の使用した諸文字
5. 仏教聖典文字としてのチベット文字
6. P.t.1292 文書の性格
7. 西ウィグル仏教の小乗的要素
8. 西ウィグル仏教と漢人仏教
おわりに
参考文献目録
略号表

はじめに

1921年の *Journal Asiatique* 誌上に，ポール＝ペリオ Paul Pelliot がパリのアジア協会 Société Asiatique に於て「チベット文字で書かれたウィグル文仏教教理問答」と題する発表を行なったことを報ずる，わずか17行の短い記事がある[1]。それによると，この仏教教理問答の書かれた敦煌出土の一文書は10世紀のものであり，且つそこに使用されたウィグル語のチベット文字による表記法（とくに前舌母音の表わし方）は，従来知られていたブラーフミー Brāhmī 文字によるものと同じであり，さらにそれは13世紀の元朝において創作されたパスパ 'Phags-pa 文字の表記法とも基本的に一致するという。ペリオのこの考えは，同じく

1) Pelliot 1921, pp. 135－136 ; Sinor 1939a, pp. 385－386.

彼がアジア協会で1927年に行なった「パスパ文字の起源」についての報告に至っても全く変わっていない[2]。

さて，1921年にペリオが初めて学界に紹介したチベット文字ウィグル語の仏教教理問答とは，現在パリ国立図書館東洋写本部 Bibliothèque Nationale, Département des Manuscrits Orientaux に 'Pelliot tibétain 1292' の番号をもって保管されている一文書である。本文書は一般に公開されており，数年前にその美麗な写真も出版された[3]。文字と言語の組み合せをみただけで，本文書が数万点に及ぶ敦煌文書全体の中でもとりわけ珍しいものであることは誰の眼にも明らかであり，ウィグル・敦煌・チベットさらには当時の中央アジア諸民族全般の歴史・言語・宗教など様々の方面に光を投げかける貴重な史料であることも，十分に予想される通りである。それゆえにこそ，本文書の発見将来者でもあるペリオ自身，早くからこれに注目し，研究を続けてきた。そしてその一端が，先のアジア協会での発表として披露されたのである。かくの如く貴重この上ないものではあるが，余りにも錯綜した性格を持つ本文書の解読とその歴史的背景の研究は，ペリオのような天才をもってはじめて成し得る所である。世界の東洋学界は，ペリオの詳細な研究が一大論文となって結実する日を鶴首して待ち望んでいたに違いない。しかしその期待も空しく，1945年ペリオは東洋学の頂点に立ったまま急逝した。彼の未発表原稿や研究用覚え書・ノート類の一切は，同年，未亡人の手からギメ美術館 Musée Guimet に移管された[4]。

ペリオ将来敦煌出土チベット文献の目録はラルー女史の努力によって1939年より公刊され始めたが，P. t. 1292 を著録する目録第3冊[5]が出版されたのはようやく1961年のことであった。しかしそれでも，その時から数えて既に二十余年の歳月が流れている。これほどの重要史料であり，且つその閲覧は一般研究者にも許されているのであるから，その研究報告の一つや二つは既に発表されていても不思議はない。にもかかわらず我々は今日に至るまで，そういうものの出されたことを聞かない[6]。

1980年，私は全くの僥倖から，ギメ美術館に保管されているペリオの遺稿を調査する機会に恵まれ，その中から P. t. 1292 に関するノート（遺稿 No. 288）を見つけ出すことが出来

---

2) Pelliot 1927, p. 372. ただし厳密には，先に10世紀といっていたのが，この時は「おそらく10世紀」といっている。

3) Spanien & Imaeda 1979, pl. 608.

4) cf. *Paul Pelliot*, publié par la Société Asiatique, Paris 1946, p. 78 ; 森安 1980 b, p. 69.

5) Lalou 1961, p. 3.

6) 'Comité d'édition des documents de la Mission Pelliot' が *JA* 1946－1947, p. 204 に掲載した告知文によると，本文書の研究は A. Topchibachy 氏に依託されたというが，その後の消息は不明である。同氏がいかなる経歴の人かも分からない。一方，1979年秋にパリで開催された "Manuscrits et inscriptions de Haute Asie du Ve au XIe siècle." と題するペリオ生誕百年記念コロック Colloque internationale の Table ronde の席上，ハミルトン氏は本文書にも言及したが，やはり 'encore inédit' として紹介した。また各国から集まったその時の参加者の間からも何ら新しい情報は得られなかった。cf. Hamilton 1981, p. 15.

た[7]。しかしそこにあったのは P. t. 1292 のチベット文字のローマ字転写と，それに対応するウィグル語を推定復原したもの，そして本人以外には分かりにくいメモだけであった。しかも肝心のウィグル語を推定する部分には，かなり空白があった。私が最も興味を持つ歴史学的方面の覚え書のようなものは，残念ながら何一つ発見されなかった。しかしこのペリオのノートを見たことは，それ以前から私と高田時雄氏との間で計画のあった[8]本文書の研究を一挙に具体化する大きな契機となった。というのは，研究が進んだ後で，ペリオの完成した遺稿が出てくる懸念がなくなったからである。

以上のようなわけで，本研究は，とくに第一部に於てペリオのノートがおおいに役立っている以外は独自の研究であり，責任もすべて筆者にある。ペリオのやり残したことのほんの一部でも埋め合わせることが出来たなら，それだけで望外の幸せであるが，それよりもむしろ，今後本研究を批判する形で様々の意見が世界中の中央アジア史家・美術史家・アルタイ語学者・シナ＝チベット語学者・仏教学者たちから出てくることを心から期待する。もしそうなれば，それこそ，我々がペリオに対して負った責任を真の意味で果たしたことになろう。

本稿ははじめテキストに対する詳しい語註と完全な語彙索引を付する予定であったが，諸般の事情により，今は第一部として，テキストと和訳と簡単な語彙索引だけを提示し，語註と完全な語彙索引は次稿にまわすこととした。テキストは上段にチベット文字の機械的なローマ字転写(transliteration)を小文字 small letters で，下段に上と対応する仏教ウィグル語標準形（いわゆる *y* 方言 *y*-dialect）のローマ字転写を大文字 CAPITAL LETTERS で示すにとどめ，理論的再建形（transcription）の提示はこれまた次稿において行なうことにする。

なおアンカラのタラット＝テキン T. Tekin 氏には1981年秋に来日された際に本稿のテキスト部分の原稿を御覧いただき，数ケ所の訂正をすることが出来た。ここに特記して感謝の意にかえたい。

---

7) cf. 森安 1980 b, pp. 69－71.
8) cf. Spanien & Imaeda 1979, p. 32 ; 森安 1980 b, p. 67.

第一部　テ　キ　ス　ト

1. 解　　題
2. テキストと和訳
3. 語　彙　索　引

1.　解　　題

'Pelliot tibétain 1292' の分類番号をもってパリ国立図書館に所蔵される本文書は，ペリオが敦煌千仏洞中の蔵経洞より将来したものである。使用された紙は縦（本来は紙幅）が42～43 cm，横（本来は紙の長さ）が 29.5～30 cm（縦横とも正確な数値は出せない）の中手の一枚紙である。色はグレーとベージュの中間的な色（chamois α～beige clair）で，光に透かすと粗い漉き目（vergeures）の見える中質の紙である。繊維クズはほとんど残っていない。既に発表されている写真でも分かるように[9]，右端は破損しているが，その破損の仕方からみて，本文書が下端のラインを中心軸とする巻き物の形で保存されていたことは明らかである。チベット文字は敦煌文書によく見られるややくずれた書体であり，所々に通常とは逆向きのキク（gi-gu, i 音記号）がみられる。全部で44行あり，それが上端から下端までの間に，無理に詰めた所や不必要に空けた所もなく，整然と収まっている。裏面は全くの空白である。内容は，一読して分かるように，仏教のごく初歩を説くための教理問答である。

2.　テキストと和訳

チベット文字転写表

ka	kha	ga	nga
ca	cha	ja	nya
ta	tha	da	na
pa	pha	ba	ma
tsa	tsha	dza	va
zha	za	'a	ya
ra	la	sha	sa
ha	"a		

* ཡ は "ya と表記する。

** ཨ ('a) が前・後接字の位置にある時は ' で，基字の下にある時は ─ で

9) Spanien & Imaeda 1979, pl. 608. 本稿に折り込みとして付した図版はこれよりの転載である。

表わす。 例：ཨོད = būd

ウィグル文字転写表

′	Y	W	β	P	C	D	X	K
L	M	N	R	S	Š	T	Z	

▨ = テキストの欠けている所 = missing parts

〔 〕= 欠けているテキストを補った所 = letters supplied by the editor

italic = 抹消されている所 = letters crossed out in the manuscript

＋ = 行間に追加されているもの = interlinear complements

( ) = 和訳の際に意味を補った所

1 ৬ / / na mo būd / na mo *si* ′drim / na mo sing / na mo yug kun nur
N′MW PWT N′MW DRM N′MW S′NK N′MW YWKWNWR
南無 仏， 南無 法， 南無 僧． 我等は 敬礼し奉らん，

bis pur kān lār k〔o〕d t〔i〕ng nga / na m〔o〕 yu〔g kun nur bis〕
PYZ PWRX′N L′R XWTYNK′ N′MW YWKWNWR PYZ
諸々の仏 様 に． 我等は 敬 礼 し 奉らん，

2 lōm kod ting nga // na mo yug kun nur bīs ″a reg *go*ub rag ″ar hrīn lar
NWM XWTYNK′ N′MW YWKWNWR PYZ ″RYX XWβR′X ′RX′NT L′R
仏法 様 に． 我等は 敬 礼 し 奉 ら ん， 清浄 僧 伽

kod ting nga / ′bo′ *s*zing sar ″i cin ′da′ / dyor do〔g mag〕
XWTYNK′ PW S′NKS′R ′YCYND′ TWYRT TWXM′X
殿 に． この 輪 廻 の 中 ， 四 生 や

3 bēs yol ta / ga mag dyin lāg ″og lan ne / ″u kus dur lyug ″am ′ngag
PYŠ YWL T′ X′M′X TYNLX ′WXL′NY ′WKWŠ TWYRLWK ″MK′K
五 道 に於て， 全ての 衆 生 は 多くの 種類の 苦しみを

″am ngan nur lār / ga′ yol dyor dog ma〔g dyeb〕
″MK′NWR L′R X′YW ′WL TWYRT TWXM′X TYP
味わっている．「四生とは何か？」 と

4 de sar / ″eng yyil ki yu*r* mur hā da dog mag / ″i ki ti khri shi da
TYS′R ′NK ′YLKY YWMWRTX′ D′ TWXM′X ′YKYNTY KYŠY D′
いえば， まず 第一に 卵 生 ， 第二に 胎

dog mag / ″yus cun ″yol ta zhi da dog mag / dyor tun chu ▨
TWXM′X ′WYCWNC ′WYL T′ ŠY D′ TWXM′X TWYRTWNC ▨
生 ， 第三に 湿 生 ， 第 四 に ……

5 gal gīn dog mag / 'bo' "a ru dyor dog mag // ga yol bēs yol dyeb
K'LKYN TWXM'X PW 'RWR TWYRT TWXM'X X'YW 'WL PYŠ YWL TYP
化 生，これらが 四 生 で あ る ．「五 道 と は 何 か？」 と

de sar / "yang yil ki dang ri yer re / "i kin +ti khi shi ["a]
TYS'R 'NK 'YLKY TNKRY YYRY 'YKYNTY KYŠY
いえば， まず 第一に 天 国 ， 第二に 人間

6 zhon ne / "yus cun da mo yer re / dyor tun "as chi yag / 'bes shin
"ZWNY 'WYCWNC T'MW YYRY TWYRTWNC "C Y'K PYŠYNC
界 ， 第三に 地 獄 ， 第四に 餓 鬼(道)， 第五に

yil kē "a zhon ne / 'bo' "a ru 'bes yol / 'bo' [dyor]
YYLXY "ZWNY PW 'RWR PYŠ YWL PW TWYRT
畜生 界 ，これらが 五道である ．「この 四

7 dog mag 'bēs yol ta / gang lī dil lgyan ne tyag / "a' gā' dya gī
TWXM'X PYŠ YWL T' X'NKLY TYLK'NY T'K "X' TNKYL'
生 や 五 道 にて， 車 輪 のように 上がったり下がったり

lya' / dyag gzin dur da ci / kyim 'ol tyeb de s[ar "yang yil]
T'KZYNDWRD'CY KYM 'WL TYP TYS'R 'NK 'YLKY
しながら 流転させるものは 何 か？」 と いえば， まず 第一に

8 ki "as ▨ "a lyim mir go ngol / "yi kin ti 'bi' lig gsis go ngol / "yus cun
"Z "LMYR KWNKWL 'YKYNTY PYLYKSYZ KWNKWL 'WYCWNC
貪 欲 な 心 ， 第二に 痴 愚 の 心 ， 第三に

"yob ka go [ngol] ▨ [nis]
'WYPK' KWNKWL ..... NYZ-
憤怒(瞋恚)の心（である）. ..... 「煩

9 svan ne da / gyed ta yin tyeb de sar / "yo trō "on chig shra bud / "al ti
β'NY D' KYT'YYN TYP TYS'R 'WYTRW 'WN CXŠ'PT "LTY
悩 より 逃れん.」 と いうのなら， それには 十 戒 や 六

pa ra mid / "is shin "is sla m[i]s ga [rag gā yol "on]
P'R'MYT 'YŠYN 'YŠL'MYŠ K'R'K X'YW 'WL 'WN
波羅蜜 の行(ぎょう)を 修め ねばならない。「何であるか，十

10 chrig shra bud dyeb de sar / "ye nen "yus dyor lug / di lin dyor /
CXŠ'PT TYP TYS'R YYNYN 'WYC TWYRLWK TYLYN TWYRT
戒 と は？」 と いえば， 身による 三 種 ， 舌(口)による 四つ ，

gong lyun "yus / gā māg "on bō lur // "yen ta ke "yus dyo[r lug]
KWNKLWN 'WYC X'M'X 'WN PWLWR YYN T'KY 'WYC TWYRLWK
意による 三つ ，あわせて 十 である ． 身に係わる 三 種とは

11 "an tag 'ol / "yang yil ke / "yo lud "yu lyur ma sa / "yi kin ti "og ri "og
"NT'X 'WL 'NK 'YLKY 'WYLWT 'WYLWRM'S' 'YKYNTY 'WXRY
以下の 通り： まず 第一に 殺 生 す べ か ら ず， 第二に 偸 盗 す

rla ma sa / "yus cun "ye vin yul tus zing [nga]
'WXRYL'M'S' 'WYCWNC 'βYN YWTWZYNK'
べ か ら ず ， 第三に よその 妻のところへ

12 ⸗bar ma sa / dil ta ke dyor "an 'dag 'ol / "a gzug "ye gil zab zus
P'RM'S' TYL T'KY TWYRT "NT'X 'WL 'ZWK 'YKYD S'β SWYZ-
行くべからず. 舌(口)に係わる 四つとは 以下の 通り： 虚 偽の 言葉 を 口

la ma sa / jā shur ma sa / "ye'i rig zar sāg zab z[us]
L'M'S' C'ŠWRM'S' 'YRYK S'RSYX S'β SWYZ-
にすべからず，中傷すべからず， 激しく 粗野な 言葉を 口に

13 la ma sa / "a skan cu la ma sa ‖ gong ngol dag ke "yus "an 'dag "ol /
L'M'S' "ZX'NCWL'M'S' KWNKWL T'KY 'WYC "NT'X 'WL
すべからず， 綺語すべからず . 意 に 係わる 三つとは 以下の 通り：

"yob ka "yos bus sun ma sa / "as "al mir gong ngol [dur]
'WYPK' 'WYZ PWZ SWNM'S' "Z "LMYR KWNKWL TWR-
怒りや 憎しみを発すべからず， 貪 欲 な 心を 起こ

14 gur ma sar / tyer *zi* "a zag lom kā tus ma sar / 'bo "on chig shra būd
XWRM'S'R T'RS "Z'X NWM X' TWYŠM'S'R PW 'WN CXŠ'PT
すべからず ， 邪 悪な教法 に 陥るべからず. 以上の 十 戒 を

"a rag thud*n* sa / "ol khi shi "us stūn / do gzhid da[ng]
"RYX TWTS' 'WL KYŠY 'WYSTWN TWZYT TNKRY
完全に 守れば ， その 人は 上なる 兜率 天

15 ri yer rin ta dog gār ‖ gyen dog mag "yol mag ta "o zar gor tu lur ‖
YYRYNT' TWX'R KYN TWXM'X 'WYLM'K T' 'WZ'R XWRTWLWR
の 地 に 生まれん. 以後は 生 死(＝輪廻転生) より 免れ 救われん .

gā yol "al ti pa ra mid dyeb de sar / "yang yil ke
X'YW 'WL "LTY P'R'MYT TYP TYS'R 'NK 'YLKY
「六 波 羅 蜜 と は 何 か ？」 と いえば， まず 第一に

16 bu shi pa ra mid / "i kin ti chig shra būd pa ra mid / "yus cun ze rin māg
PWŠY P'R'MYT 'YKYNTY CXŠ'PT P'R'MYT 'WYCWNC S'RYNM'K
布施 波羅蜜 ， 第二に 持戒 波羅蜜， 第三に 忍(にん) 辱(にく)

pa ra mid / dyor tun gā tyag lan mag pa ra mid ['bēs]
P'R'MYT TWYRTWNC X'TYXL'NM'X P'R'MYT PYŠ-
波羅蜜 ， 第 四 に 精 進 波 羅 蜜， 第五

17 shin 'dyan za kin pa ra mid / "al tin byil gā byi lig pa ra mid / 'bo "a ru
YNC DY'N S'XYNC P'R'MYT "LTYNC PYLK' PYLYK P'R'MYT PW 'RWR
に 禅 定 波羅蜜 , 第六に 智 慧 波羅蜜 , 以上が 六

"al ti pa ra mid / kyim ku
"LTY P'R'MYT KYM ……
波 羅 蜜 で あ る. …… (かつて) ……

18 būr han lar / 'bo "is shig "is slyab / de men 'og / dyang nga shi sis /
PWRX'N L'R PW 'YŠYK 'YŠL'P TYMYN 'WK T'NK'ŠYSYZ
御仏 たちは これらの 行を 修めた まさにその時に, 比類なき

pu han *ba* kod ting nga dyeg di lār / "yang yil k〔e〕 bu shi 〔pa ra〕
PWRX'N XWTYNK' T'KDY L'R 'NK 'YLKY PWŠY P'R'-
仏 果(=菩提)に 到達したのだ. 最 初の 布施 波羅蜜

19 mid / "i ki dyor lug bō lur / "*a* 'byir din lāg bu shi / "i kin ti
MYT 'YKY TWYRLWK PWLWR PYR TYNLX PWŠY 'YKYNTY
には 二 種 あ る . その一は 生命ある 布施 で , 第二は

dyin sis bu shi / dyin lāg bu shi "an tag 'ol / bō dye seb gū l〔in〕
TYNSYZ PWŠY TYNLX PWŠY "NT'X 'WL PW TYZYP XWLYN
生命なき 布施である. 生命ある 布施とは 以下の通り : これを 列挙すると , 奴 を

20 gung ngin / "a+d *na* tin "ad gīr rin / go yin yil ke sin / "a 'bāg yul tus
KWYNKYN "TYN "DXYRYN XWYN YYLXYSYN "PYX YWTWZ-
婢 を , 馬 を 種馬 を , 羊 の 群 れ を , 穏やかな 妻

sin / ying skya gir kin nin / gān tu "yed tu zing nga dyag gi
YN YYNCK' XYRXYNYN K'NTW 'T'WYZYNK' T'KY
を , 優美な 妾 婦 を, 己れの 身体まで をも

21 "id da la yur / "ya zir ka mas / din sis bu shi "an dag 'ol / bō dye sīb
'YD'L'YWR 'SYRK'M'Z TYNSYZ PWŠY "NT'X 'WL PW TYZYP
喜捨して 惜しまない . 生命のない 布施とは 以下の 通り : これを 列挙

"al ltun gu mus / cad ci kās / "a gē ba' rim / "eb 'ba
"LTWN KWYMWŠ …… X'Š "XY P'RYM 'β P'RX
すると, 金 銀 , …… 玉 , 宝 物 , 家と家財 ,

22 ba lyag "u glyus / bar ca bu shi byer rur / 'ba'i yag ji gā'i yag / "a drir
P'LYX 'WLWŠ P'RC' PWŠY PYRWR P'YYX CYX'YYX "DYR-
城市 や 国土 , 全てを 布施として 与える. 富める者を(と) 貧しき者を 区別し

mas / dus go lyum byer rur // gāl lti dyeng ri dyeng ri sī / 〔sha kyi〕
M'Z TWŠ KWYRWM PYRWR X'LTY TNKRY TNKRYSY Š'KY-
ない. 等しい 眼差しを 与える . 例えば 天神中の天神たる 釈迦

23 mun pur kān / dmying 'di 'dyim glāg / 'bā's shing dbyis kā le 'byēr di /
MWN PWRX'N MYNK DYDYMLYX P'ŠYN PYCX'LY PYRDY
牟尼 仏 は 千(回), ディディム(冠)をかぶった 頭を, 切るために 与えた.

za krīs "on shāg gā rag ke+n "vō'i gā le 'byēr di / dye men 'og bu shī
S'KYZ 'WN ……PYRDY TYMYN 'WK PWŠY
(また)八十の……を……(する)ために 与えた. するとその時まさしく 布施

24 pa ra mid "an ta dol ti // "i kin ti chig shra būd pa ra mid "an tag 'ol /
P'R'MYT "NT' TWLTY 'YKYNTY CXŠ'PT P'R'MYT "NT'X 'WL
波羅蜜が そこに 満ちた. 第二の 持 戒 波羅蜜 は 以下の 通り:

pu han lār / yer rtun cu / yer sub ta bār 'ar sar / pur han lār
PWRX'N L'R YYRTYNCW YYR SWβ T' P'R 'RS'R PWRX'N L'R
御仏 たちが 現 世 ・ 地 上 に おられるなら, 御仏 たち

25 ning / "on du man / chig shra būd yar lyag gīn / 'bāg thud tar / "yed tu
NYNK 'WN TWYM'N CXŠ'PT YRLXYN P'X TWT'R 'T'WY-
の 十 万 の 持戒 の 教勅 を 堅く 守り, 身体

zin "id da la yur / chig shra būd dam gā' se zi mas / 'bi[r]
ZYN 'YD'L'YWR CXŠ'PT T'MX'SY SYM'Z PYR-
を 投げ捨て, 持 戒 の 印(いん) を 破らない. またたとえ

26 'yog pur han lār yog 'ar sar / "a rje dyan dar du ru sin thud tar /
WK PWRX'N L'R YWX 'RS'R "RZY DYND'R TWYRWSYN TWT'R
(現世に) 御仏 たちが おられ なくとも, 神 聖なる 法 を 守 る.

dag da "a rag da' / zu gūd yab pa'r gāg ke / ye yu "on chig shra [būd]
T'X D' "RYX D' SWYKWT Y'PWRX'XY Y'YW 'WN CXŠ'PT
山 や 森林 で 樹 々 の 葉 を 食べ, 十 戒 を

27 zi mas // "yus cus ze rin māg pa ra mid "an 'dāg 'ol +tur / "us "a gō
SYM'Z 'WYCWNC S'RYNM'K P'R'MYT "NT'X TWR 'WYC "XW
破らない. 第三の 忍 辱 波羅蜜 は 以下 の 通りである: 三 毒の

nis svan ne se / thu kāl "e rib / "ye sis ya bīs khi shi ning / "yed
NYZβ'NYSY TWYK'L 'YRYP 'YSYZ Y'βYZ KYŠYNYNK 'T-
煩 悩 を 完全に 断ち, 邪 悪 な 人 間 の 行

28 tig yun tug / tu da' +"a yag zab / ding la yur zyē rin nur / "yod tro "yob
YK …… "YYX S'β TYNKL'YWR S'RYNWR 'WYTRW
為 …… 悪しき 言葉を 聴 容 ・ 勘忍する. 以後は

ka go ngol dur gūr mas / zye rin māg pa ra mid "an ta būd ti //
'WYPK' KWNKWL TWRXWRM'Z S'RYNM'K P'R'MYT "NT' PWYTTY
怒り の 心 を 起こさない. 忍 辱 波羅蜜 は その時 成就した.

29 gāl lti gā l*ie* "ad glāg "el lig / khi shan te pa le / "ad glāg / "ar rje
X'LTY K'LY "TLX 'YLYK KŠ'NTYP'LY "TLX "RZY
例えば Kali(歌利) という名の 王 が Kṣāntipāla という名の 聖

dyen 'da' rag / "el lig gīn / "a dāg kin / bur nin gol lkag
DYND'RYX 'LYKYN "D'XYN PWRNYN XWLX'X-
法師(仙人)を(の) 手を (と) 足を (と) 鼻を (と) 耳

30 kin / bar ca byis ti / gyās ti / "ol 'dyan dar "od tro / "ob ka go ngol
YN P'RC' PYCTY K'STY 'WL DYND'R 'WYTRW 'WYPK' KWNKWL
を 全部 断ち切ったが , その 法師 は それでも 怒り の 心 を

dur gūr ma ti // dyor tun gā tyag lan mag pa ra mid "an 'dag 'ol / bhō
TWRXWRM'TY TWYRTWNC X'TYXL'NM'X P'R'MYT "NT'X 'WL ……
起こさなかった . 第四の 精 進 波羅蜜 は 以下の 通り : ……

……
……

31 'bo' bēs pa ra mid "is shing / "u gza' ti gā tyag lan nur / "u zug sus
PW PYŠ P'R'MYT 'YŠYNK' 'WZ'TY X'TYXL'NWR 'WYZWKSWZ
これら 五つの 波羅蜜 の行に 長い間 精 進 す る . たゆむことなく

gā tyag lan nur / gāl lti 'byir "el le han "og lye*n* bār 'ar di / "a rag
X'TYXL'NWR X'LTY PYR 'YLYK X'N 'WXLY P'R 'RDY "RYX
精進する . 例えば 一人の 王 子 が い た . 森

32 da' / ti shi "ad glyag pur han da' / ya rog yun drub gor di /
D' TYŠY "TLX PWRX'N D' Y'RWX 'WYNTWRWP KWYRTY
にいる Tiṣya(底沙) という名の 仏 から 光が のぼって 見えた .

'byir "a dāg +kin yer gā dab ka le *le* "u nin ti / teg 'byir
PYR "D'XYN YYR K' T'PX'LY 'WYNYNTY T'K PYR
片 足 で 地面 に (Tiṣya 仏を)礼拝するために 立った . ただ 一本の

"a dag kin dur rub / ye ti
"D'XYN TWRWP YYTY
足で 立ち続けて, 七

33 kun / ye ti tun / "ol pūr han nag / "*u*og di / yus kal ba / "e mngag
KWYN YYTY TWYN 'WL PWRX'NYX 'WYKDY YWZ K'LP 'MK'K
日 七 晩 その 仏 を 称揚した . 百 劫 の 苦 行 を

"em ngan mis ta / do kos kal ba / "ag sug "er di /
'MK'NMYŠT' TWXWZ K'LP 'KSWK 'RDY
修めんとしていたのに, (なんと) 九 劫 も 減少 した. (それがわずか)

ye ti kun da thug ka
YYTY KWYN T′ TWYK′-
七 日 で 済ん

34 di ‖ bēs shin ′dan za kin pa ra mid / ″an ′dag ′ol / ″u gzun dur ka ro /
DY PYŠYNC DY′N S′XYNC P′R′MYT ″NT′X ′WL ′WZWN TWRX′RW
だ. 第五の 禅 定 波羅蜜 は 以下 の 通り： 長い間 ずっと

′bo′ gong ngol lug / ″er rlig yid ma sa / yor yur dur rur ″ar ////////
PW KWNKWLWK ′RKLYK YYTM′S′ YWRYYWR TWRWR ……
この 心 を 堅固に 失わないならば，いつまでもやってゆけよう．……

35 ″o lur yad tur / ″o gūr da / ′bēs gā cag / ″e′i yin bar mas / ″al ti mis /
…… ′WXWR T′ PYŠ X′CYX ′YYYN P′RM′Z ″LTMYŠ
…… 時に及んでも， 五感(根) の 欲するままには 行動しない．六 十

″ar rtog ke / dyor dur lug / ′dyan za kin cag / bar ca n〔e is〕
″RTWXY TWYRT TWYRLWK DY′N S′XYNCYX P′RC′ NY ′YŠ-
余 四 種 の 禅 定 を そのすべて を 行(ぎょう)

36 sla tir ‖ ″al ltin byil gā byi lig pa ra mid ″an dag ′ol / byil ga byi lig
L′TYR ″LTYNC PYLK′ PYLYK P′R′MYT ″NT′X ′WL PYLK′ PYLYK
ぜしめる. 第六 の 智 慧 波羅蜜 は 以下の 通り： 智 慧

″ar sar / ″as stag ke dus dag ′ol / na ″i cun ″al lti pa ra
′RS′R ″Š T′KY TWZ T′K ′WL N′ ′WYCWN ″LTY P′R′-
とは 食物 の中の 塩のようなものである.「何 故 に 六 波羅

37 mid ″is shin ″is sla yur lar deb de sar / ″in ca / byil mis ″og mis ga rag
MYT ′YŠYN ′YŠL′YWR L′R TYP TYS′R ′YNC′ PYLMYŠ ′WXMYŠ K′R′K
蜜の 行 を 修めるのか？」 と いえば，次のように 知り 理解 すべきで

′ol / ″al lti dur lug / nis svan ne +lā rag / ″a rid hā le / ″*a*
′WL ″LTY TWYRLWK NYZβ′NY L′RYX ″RYTX′LY
ある. 六 種 の 煩 悩 を 浄 化 し

38 gud sus gil ga le / ″is sla yur lār / gā yol ″al lti dyeb de sar / ″as
KWYCSWZ XYLX′LY ′YŠL′YWR L′R X′YW ′WL ″LTY TYP TYS′R ″Z
無力に するために 修めるのである.「その六つとは何か？」と いえば， 貪

″a lim mir go ngol lug / bu shi gu cin da gusd sus gi lur lar /
″LMYR KWNKWLWK PWŠY KWYCYND′ KWYCSWZ XYLWR L′R
欲 の 心 を 布施 の 力 で 無 力 に す る .

39 ze zig go ngol lug / gā tyag lan mag gud cin da′ / ″al ngad dur lār /
SYZYK KWNKWLWK X′TYXL′NM′X KWYCYND′ ″LXYTWR L′R
猜疑 の 心 を 精 進 の 力 で は ら す .

gu ban go ngol lug / ze rin māg gud cin da′ gud sus gūi lur
KWYβ′NC KWNKWLWK S′RYNM′K KWYCYND′ KWYCSWZ XYLWR
驕慢の心を 忍辱の力で 無力にする

40 lar / tyar gong ngol lug / ′dyan za kin cin / ′byi lig gsis go ngol lug /
L′R T′RS KWNKWLWK DY′N S′XYNCYN PYLYKSYZ KWNKWLWK
. 邪悪な心を 禅定で, 無知の心を

byil gā byi lig gīn // ′bo ″al lti pa ra mid ″is shin ″is
PYLK′ PYLYKYN PW ″LTY P′R′MYT ′YŠYN ′YŠ-
智慧で. 以上の六 波羅蜜の行を修め

41 sla sa / gōb kā thu kal lig bō lur / bu shi gud cin da′ / ″ed tus ″u za
L′S′ XWPX′ TWYK′LLYK PWLWR PWŠY KWYCYND′ ′T′WYZ ′WYZ′
れば, 全てに 完全となる. 布施の力で 自分自身に対して

″er rlig bō lur / chig shra bud gud cin da′ / ″us yab lag yo[l]
′RKLYK PWLWR CXŠ′PT KWYCYND′ ′WYC Y′βL′X YWL
強くなる. 持戒の力で 三悪道

42 kā dus smas / zye rin māg gud cin da′ / yer rtun cu yer sub ″u za / myun
X′ TWYŠM′Z S′RYNM′K KWYCYND′ YYRTYNCW YYR SWβ ′WYZ′ MWYN
に陥らない. 忍辱の力で 現世・地上の 罪

gā dag ″u zya gong le dyab pra mas / bas sin ″in go tur rur /
X′D′X ′WYZ′ KWNKLY T′PR′M′Z P′ŠYN …… TWRWR
過に 心は わずらわされない. 頭を …… 保つ.

43 ′dyan za kin gu cin da′ / nis svan ne lar rag bas sin dur mas / byil ga
DY′N S′XYNC KWYCYND′ NYZβ′NY L′RYX P′SYNDWRM′Z PYLK′
禅定の力で 煩悩を(自分に)打ち克たせない. 智

byi lig gu cin da′ / lom dyo zyi dur gōg / tar ″og kar / gur
PYLYK KWYCYND′ NWM TWYZY TWYRK-WK T′RK ′WX′R XWR-
慧の力で 法性(=真理)をしっかり すぐに理解する. 救

44 rtol *log* go din lgig / yas mas / ″a lko ″og kar / / na mo bud /
TWLXW TYNLXYX Y′ZM′Z ″LXW ′WX′R N′MW PWT
済さるべき 衆生を 見過ごさない. 全てを理解する. 南無 仏,

na mo sing / na mo ′drim / na mo sing //
N′MW DRM N′MW S′NK
南無 法, 南無 僧.

3. 語 彙 索 引 GLOSSARY

″ (**a**-, ′**ä**-)

″PYX 20 calm, mild, gentle. (cf. *UW*, p. 36)

″C 6 hungry. *″C Y′K* = (the realm of) hungry spirits.

″D′X 29, 32 leg, foot.

″DYR- 22 to separate, to discriminate.

″DXYR 20 stallion.

″X- 7 to ascend, to rise, to climb.

″XY 21 treasure; silk brocade.

″XW 27 poison.

″LXYT- 39 Caus. of *″LX-* (to destroy). (cf. *ED*, p. 135)

″LXW 44 all.

″LMYR 8, 13, 38 *″Z ″LMYR* (Hend.) = overwhelming desire, avarice, greed.

″LTY 9, 15, 17, 36, 37, 38, 40 six.

″LTYNC 17, 36 sixth; sixthly.

″LTWN 21 gold.

″LTMYŠ 35 sixty.

″MK′K 3 (cf. ′MK′K) pain, suffering, agony.

″MK′N- 3 (cf. ′MK′N-) to suffer pain.

″NT′ 24, 28 then; there.

″NT′X 11, 12, 13, 19, 21, 24, 27, 30, 34, 36 like that, thus; as follows.

″RYX 2 pure, clean, clear. 14 clearly, completely. 26, 31 wood, forest, coppice.

″RYT- 37 to clean, to purify.

″RTWX 35 additional, an extra amount, more.

″RZY 26, 29 a saint, a sage; sacred.

″Š 36 food.

″T 20 horse.

″TLX 29, 32 named.

″YYX 28 evil, bad.

″Z 8, 13, 38 (cf. ″LMYR)

″Z′X 14 astray, false.

″ZWN 5-6, 6 (from Sogd., cf. n. 31 & n. 42) living being; the state of existence, the form of life.

″ZX′NCWL′- 13 to flatter, to say nice things, to engage in idle talk.

′ (**ä-, ạ-, é-**)

′β 21 dwelling, house.

′βYN 11 other, strange, not one's own. (otherwise unattested) (cf. TTT. IV, pp. 438, 447)

′KSWK 33 shortened, decreased.

′LYK 29 hand, forearm.

′MK′K 33 (cf. ″MK′K)

′MK′N- 33 (cf. ″MK′N-)

′NK 4, 5, 7, 11, 15, 18 (cf. ′YLKY)

′R- to be.

′RWR 5, 6, 17 is, are.

′RDY 31, 33 was, were.

′RS′R 24, 26 if it is. 36 as for.

′RX′NT 2 =Skt. *arhat*. an enlightened & saintly man; the ideal-saint in Hīnayāna. (cf. *UW*, pp. 178–180)

′RKLYK 34 strongly, firmly. 41 possessing power, possessing free-will, mighty, strong.

′SYRK′- 21 to regret, to grudge.

′T′WYZ 20, 25, 41 a live body.

′TYK 27-28 act, action, deed.

′ZWK 12 false, lying; a lie.

′Y (**ï-, i-**)

′YC the inside, the interior.

′YCYND′ 2 in the ……

′YD′L′- 21, 25 to give up, to renounce, to abandon.

'YKY 19 two.

'YKYD 12 false, lying; a lie.

'YKYNTY 4, 5, 8, 11, 16, 19, 24 second; secondly.

'YLYK 29, 31 having a realm; king, sovereign.

'YLKY 4, 5, 7-8, 11, 15, 18 first; firstly. *'NK 'YLKY* = first of all.

'YNC' 37 thus; as follows.

'YR- 27 to crack, to fissure, to cleave. (cf. Hamilton 1975, p. 8)

'YRYK 12 hard, tough, violent.

'YSYZ 27 evil, bad.

'YŠ 9, 18, 31, 37, 40 work, labour; deed, behaviour; religious austerities.

'YŠL'- 9, 18, 37, 38, 40-41 to work, to do; to practice religious austerities.

'YŠL'T- 35-36 Caus. of *'YŠL'-*.

'YYYN 35 according as, according to.

'W (o-, u-, ọ- ụ-)

'WX- 37, 44 to understand.

'WXWR 35 time, occasion, chance, opportunity.

'WXLY 31 male child, son.

'WXL'N 3 offsprings, children.

'WXRY 11 thief.

'WXRYL'- 11 to thieve, to steal.

'WK 18, 23 enclitic particle (cf. *ED*, p. 76).

'WKWŠ 3 many.

'WL 3, 5, 7, 9, 11, 12, 13, 14, 15, 19, 21, 24, 30, 33, 34, 36, 37, 38 that (as opposed to *this*), it; is, are (as copula).

'WLWŠ 22 country, land, realm.

'WN 9, 10, 14, 23, 25, 26 ten.

'WZ- 15 to escape, to surpass.

'WZ'TY 31 for a long time.

'WZWN 34 long.

'WY (ö-, ü-)

'WYPK' 8, 13, 28, 30 anger, rage.

'WYC 10, 13, 27, 41 three.

'WYCWN 36 for, because of, for the sake of.

'WYCWNC 4, 6, 8, 11, 16, 27 third; thirdly.

'WYK- 33 to praise, to extol; to raise, to hold up.

'WYL 4 damp, moist. (cf. TWXM'X)

'WYLWR- 11 to kill.

'WYLWT 11 killing, murder, the taking of life.

'WYLM'K 15 death. (cf. TWXM'X)

'WYNYN- 32 Refl. of *'WYN-* (to rise, to stand up, to go up).

'WYNTWR- 32 Caus. of *'WYN-* (to rise, to stand up, to go up).

'WYSTWN 14 above, upper.

'WYTRW 9, 28, 30 thereupon; thereafter; therefore.

'WYZ 13 *'WYZ PWZ* (Hend.) = hatred.

'WYZ' 41, 42 upon, on; by.

'WYZWKSWZ 31 uninterruptedly, continuously.

P (b-, p-)

P'X 25 tight (as tied with band). (otherwise unattested)

P'LYX 22 town, city.

P'R 24, 31 *P'R 'R-* = there is, there are, to exist, to be present.

P'R- 12, 35 to go, to go away; to conduct oneself, to behave.

P'R'MYT =Skt. *pāramitā.* (cf. Soothill, p. 267a)

"LTY P'R'MYT 9, 15, 17, 36, 40 the six *pāramitā*s.

PWŠY P'R'MYT 16, 18-19, 23-24 =Skt. *dāna.* charity, almsgiving, liberality.

CXŠ'PT P'R'MYT 16, 24 =Skt. *śīla.* observing precepts, keeping the commandments.

S'RYNM'K P'R'MYT 16, 27, 28 =Skt. *kṣānti.* patience.

X'TYXL'NM'X P'R'MYT 16, 30 =Skt. *vīrya.* devotion, diligence.

DY'N S'XYNC P'R'MYT 17, 34 =Skt. *dhyāna.* contemplation, meditation.

PYLK' PYLYK P'R'MYT 17, 36 =Skt. *prajñā.* wisdom, intelligence.

PYŠ P'R'MYT 31

P'RYM 21 property, wealth.

P'RC' 22, 30, 35 all.

P'RX 21 movable property, household goods.

P'SYNDWR- 43 Caus. of *P'SYN-* (to be oppressed).

P'Š 23, 42 head.

P'Y 22 rich; a rich man.

PYC- 23, 30 to cut.

PYL- 37 to know.

PYLYK 17, 36, 40, 43 knowledge, consciousness. *PYLK' PYLYK* = knowledge and discernment, wisdom. (cf. P'R'MYT)

PYLYKSYZ 8, 40 ignorant; ignorance.

PYLK' 17, 36, 40, 43 a wise man; wise, sage. (cf. PYLYK)

PYR 19, 31, 32 one.

PYR- 22, 23 to give.

PYRWK 25-26 if, even if. (cf. *ED*, p. 362)

PYŠ 3, 5, 6, 7, 31, 35 five.

PYŠYNC 6, 16-17, 34 fifth; fifthly.

PYZ 1, 2 we.

PW 2, 5, 6, 14, 17, 18, 19, 21, 31, 34, 40 this.

PWL- 10, 19, 41 to become; to be.

PWR(W)N 29 nose.

PWRX'N 1, 18, 23, 24, 26, 32, 33 god, deva; Buddha.

PWŠY 16, 18, 19, 21, 22, 23, 38, 41 (from Chin., cf. n. 31) charity, offering, alms. (cf. P'R'MYT)

PWT 1, 44 =Skt. *Buddha.* Buddha.

PWYT- 28 to become complete, to be realized.

PWZ 13 (cf. 'WYZ)

C (č-)

C'ŠWR- 12 to slander, to speak ill of.

CYX'Y 22 poor; a poor man.

CXŠ'PT 16, 24, 25, 41 (from Sogd., cf. n. 31) =Skt. *śikṣāpada* or *śīla*. (cf. P'R'MYT)

'WN CXŠ'PT 9, 9-10, 14, 26 the ten prohibitions, the ten precepts, the ten commandments. (for example, cf. Soothill, p. 50)

D (d-, ḍ-)

DY'N 17, 34, 35, 40, 43 =Skt. *dhyāna* or *samādhi*. (cf. P'R'MYT)

DYDYMLYX 23 having a diadem. (DYDYM<Sogd. *δyδym*<Greek *diádēma*).

DYND'R 26, 29, 30 (<Sogd. *δynδ'r*) pious; a pious man, a man of religion, monk, priest.

DRM 1, 44 =Skt. *dharma*. the sacred law, the Buddha law.

X (q-)

X'CYX (here in a special meaning) an organ.

PYŠ X'CYX 35 the five sense-organs (eyes, ears, nose, tongue and body).

X'D'X 42 (cf. MWYN)

X'LTY 22, 29, 31 how, as; for example.

X'M'X 3, 10 all; in all.

X'N 31 (<*qaγan*) ruler, king. (cf. *ED*, pp. 611, 630)

X'NKLY 7 wagon, vehicle, cart.

X'Š 21 jade.

X'TYXL'N- 31 to exert oneself, to devote oneself, to try hard.

X'TYXL'NM'X 16, 30, 39 exerting oneself, devotion. (cf. P'R'MYT)

X'YW 3, 5, 9, 15, 38 what? which?

XYL- 38, 39 to do, to make.

XYRXYN 20 mistress, paramour.

XWβR'X 2 crowd, gathering; a monastic community.

XWP 41 completely, thoroughly; all.

XWL 19 a male slave.

XWLX'X 29 ear.

XWRTWL- 15, 43-44 to be saved, to be relieved.

XWT the favour of heaven, charism, good fortune; soul, life; majesty.

XWTYNK' 1, 2 to the majesty of, to.

PWRX'N XWTY(NK') 18 =Skt. *bodhi.* (to) the blessed state of being a Buddha, (to) the perfect wisdom.

XWYN 20 sheep.

K (k-)

K'LP 33 =Skt. *kalpa.* aeon.

K'LY 29 =Skt. *Kali.* (cf. Soothill, pp. 314–315)

K'LKYN 5 (cf. TWXM'X)

K'NTW 20 self, own.

K'R'K 9, 37 (*K'RK'K*) necessary; have need to, ought to, must (as auxiliary verb).

K'S- 30 to cut, to cut off.

KYM 7, 17 who? what?

KYN 15 after (of time), behind (of place).

KYŠY 4, 5, 14, 27 man, mankind, human being. (cf. TWXM'X)

KYT- 9 to go away, to run away, to escape.

KWNKWL 8, 10, 13, 28, 30, 34, 38, 39, 40 mind, thought, heart, spirit.

KWYC strength, force, power.

KWYCYND' 38, 39, 41, 42, 43 by force of, because of.

KWYCSWZ 38, 39 powerless, weak.

KWYβ'NC 39 arrogance, pride, self-respect.

KWYMWŠ 21 silver.

KWYN 33 sun; day.

KWYNK 20 a female slave.

KWYR- 32 to see.

KWYRWM 22 an act of seeing, a way of looking, a look.

KŠ'NTYP'LY 29 =Skt. *Kṣāntipāla* or *Kṣānti-ṛṣi*. (cf. Soothill, pp. 237b, 484a)

M (m-)

MYNK 23 thousand.

MWYN defect.

MWYN X'D'X 42 vices, sins and faults.

N (n-)

N' 36 what?

N'MW 1, 2, 44 =Skt. *namo*. submitting oneself to, paying homage to. (cf. Soothill, p. 298)

NYZβ'NY 8-9, 27, 37, 43 (from Sogd., cf. n. 31) =Skt. *kleśa*. worldly passions, temptations of the passions which disturb and distress the mind.

NWM 2, 14, 43 (from Sogd., cf. n. 31) =Skt. *dharma*. the sacred law, doctrine. (cf. *ED*, p. 777)

S (s-)

S'β 12, 28 speech, words.

S'XYNC 17, 34, 35, 40, 43 thought, thinking. (cf. P'R'MYT)

S'KYZ 23 eight.

S'NK 1, 44 =Skt. *saṃgha*. assembly, community; a Buddhistic society, all the monks. (cf. Soothill, p. 420)

S'NKS'R 2 (from Sogd., cf. n. 31) =Skt. *saṃsāra*. the wheel of transmigration, the never-ending cycle of reincarnation.

S'RYN- 28 to be patient, to pardon, to forgive.

S'RYNM'K 16, 27, 28, 39, 42 patience, pardon, forbearance. (cf. P'R'MYT)

S'RSYX 12 harsh, hard, rough, coarse.

SY- 25, 26 to break.

SYZYK 39 doubt, suspicion.

SWβ 24, 42 water. (cf. YYR)

SWN- 13 to stretch out, to present, to give off.

SWYKWT 26 tree.

SWYZL'- 12, 12-13 to speak, to say.

Š (š-)

Š'KYMWN 22-23 (from Sogd., cf. n. 31) =Skt. *Śākyamuni.* Gautama Buddha.

ŠY 4 =Chin. 濕 (*GSR* 692*a śiəp*). damp, moist; moisure. (cf. TWXM'X)

T (t-)

T'X 26 mountain.

T'K 7, 36 like, as. 32 only.

T'K- 18 to reach.

T'KY 10, 12, 13, 36 existing in, belonging to, concerning. 20 up to, as far as, until; even.

T'KZYNDWR- 7 Caus. of *T'KZYN-* (to revolve, to rotate).

T'MW. 6 (from Sogd., cf. n. 31) hell.

T'MX' 25 mark, brand, seal.

T'NK'ŠYSYZ 18 unparalleled, unsurpassed.

T'P- 32 to serve, to worship.

T'PR'- 42 to move, to stir, to shake.

T'RK 43 quickly, very soon.

T'RS 14, 40 false, hostile, awkward.

TY- to say.

TYP TY- 3-4, 5, 7, 9, 10, 15, 37, 38 to say that ……

TYL 10, 12 tongue; language.

TYLK'N 7 wheel, disc.

TYMYN 18, 23 justly, exactly, at that time.

TYNKL'- 28 to listen; to grant.

TYNLX 3, 44 a living creature, a sentient being; human being. 19 living, animate.

TYNSYZ 19, 21 inanimate.

TYŠY 32 =Skt. *Tiṣya.* (cf. 織田『佛教大辭典』p. 1239)

TYZ- 19, 21 to arrange (things) in a row; to enumerate.

TWX- 15 to be born.

TWXWZ 33 nine.

TWXM'X birth, rebirth.

TWXM'X 'WYLM'K 15 births and deaths = Skt. *saṃsāra.* (cf. S'NKS'R) (cf. Röhrborn 1976, pp. 94–96)

TWYRT TWXM'X 2, 3, 5, 6-7 =Skt. *caturyoni.* the four forms of birth. (cf. Soothill, p. 178b)

KYŠY-D' TWXM'X 4 =Skt. *jarāyuja.* birth from the womb.

YWMWRTX'-D' TWXM'X 4 =Skt. *aṇḍaja.* birth from an egg.

'WYL-T' ŠY-D' TWXM'X 4 =Skt. *saṃsvedaja.* birth from moisture.

K'LKYN TWXM'X 5 =Skt. *upapāduka.* metamorphosis.

TWL- 24 to be filled, to be full.

TWR 27 (<*TWRWR*) is (as copula). (cf. *ED*, pp. 529–530)

TWR- 32, 34, 42 to stand, to stand still; to continue to do something (as auxiliary verb).

TWRX'RW 34 continuously, uninterruptedly.

TWRXWR- 13-14, 28, 30 to raise, to rouse, to excite.

TWŠ 22 equal.

TWT- 14, 25, 26 to hold, to keep, to observe.

TWYK'- 33 to come to an end, to finish.

TWYK'L 27 complete, entire; completely, entirely.

TWYK'LLYK 41 perfect.

TWYM'N 25 ten thousand.

TWYN 33 night.

TWYRW 26 unwritten law, traditional law.

TWYRK-WK 43 strongly, vigorously.

TWYRLWK 3, 10, 19, 35, 37 sort, kind.

TWYRT 2, 3, 4, 6, 10, 12, 35 four.

TWYRTWNC 4, 6, 16, 30 fourth; fourthly.

TWYŠ- 14, 42 to settle down; to fall, to fall into, to descend into.

*another reading: TWŠ- to meet.

TWYZ 43 root, basis, origin, element.

TWZ 36 salt.

TWZYT 14 =Skt. *Tuṣita.* (cf. Soothill, p. 343a)

TNKYL- 7 to descend, to go down; to fall. (cf. *BTT* IX, Analytischer Index)

TNKRY 5, 14-15, 22 the physical sky; heaven, god.

Y (y-)

Y'- 26 to eat.

Y'βYZ 27 morally bad.

Y'βL'X 41 evil, bad.

Y'PWRX'X 26 leaf (of a tree).

Y'K 6 =Skt. *yakṣa.* demon, devil. (cf. Soothill, p. 253b; *ED*, p. 910)

Y'RWX 32 light, gleam, shining.

Y'Z- 44 to make an omission, to miss.

YYLXY 6 beast, animal. 20 livestock; flock. (cf. *ED*, pp. 925–926)

YYN 10 the (human) body.

YYNCK' 20 slim, thin; delicate, fine, elegant.

YYR 5, 6, 15 ground, soil, land.

YYR SWβ 24, 42 land and water, territory, earth.

YYRTYNCW 24, 42 the world, this world.

YYT- 34 to get lost; to lose, to spoil.

YYTY 32, 33 seven.

YWX 26 *YWX 'R-* = there is not, to be absent (as opposed to *P'R 'R-*).

YWKWN- 1, 2 to bow, to do obeisance to, to pay homage to; to worship.

YWL 3, 5, 6, 7, 41 road, way.

YWMWRTX' 4 egg. (cf. TWXM'X)

YWRY- 34 to walk; to go on, to get through.

YWTWZ 11, 20 wife, housewife.

YWZ 33 hundred.

YRLX 25 a command from a superior to an inferior; commandment.

第二部　歴史学的研究

1. 年　　代
2. 敦煌仏教と六道
3. 西ウィグル仏教との関係
4. 古代チュルク人の使用した諸文字
5. 仏教聖典文字としてのチベット文字
6. P.t.1292 文書の性格
7. 西ウィグル仏教の小乗的要素
8. 西ウィグル仏教と漢人仏教

1. 年　　代

P.t.1292 は敦煌蔵経洞（敦煌文物研究所編号第17窟）よりの出土品であるから，まずその年代下限は，いわゆる敦煌文書全体の下限でもある11世紀前半[10]とみられる。だが実際には，筆者が別稿で注意を喚起したように[11]，敦煌文書の中にはモンゴル期〜元代すなわち13－14世紀にまで下るものがかなりあるのである。とくにペリオ将来のチベット文書とウィグル文書にその可能性が高いので，我々は P.t.1292 の年代決定には十分に用心してかからねばならない。しかし，それでもなお，蔵経洞出土文書と元代窟（ペリオ編号第181・182窟）出土文書の両方の将来者であるペリオ自身が，この P.t.1292 は10世紀のものであると報告しているのであるから[12]，これはやはり本来の蔵経洞より出土したものとみなしたい。紙質，紙の規格，そして字体のいずれをとっても，他の蔵経洞出土文書と比較して，何らおかしい点は見当たらない。それどころか，逆向きのキク（i 音記号）がかなり頻繁に使われていることや，同じ規格の紙が，明らかに10世紀頃のチベット文書（例えば P.t.849, P.t.1284）や漢文文書（P.2704, P.2812, P.3238, P.3440, P.3453, P.3727, P.4960, P.5032, その他多数）にみられることは，むしろ積極的に本文書が元代窟ではなく蔵経洞よりの出土品であることを裏付ける。

以上のように，本文書の下限は11世紀前半と決定されるが，では上限はいつか。チベット文字が使用されていることからして，これが吐蕃支配期（8世紀末〜9世紀中葉）以降のものであることには，まず問題がない。紙の質及び規格もこの見方を支持する[13]。おおよそでいえば9世紀前半以降ということになろう。さらに注意すべきは，本文書の古代チュルク

10）蔵経洞の封閉は11世紀初頭に行なわれたというのが従来の多数意見であるが，もう少し下る可能性があるので，11世紀前半といっておく方が無難である。　cf. 馬世長　1978, pp. 28－30.
11）森安　1985, 第一章および〔追記〕。
12）Pelliot　1921, p. 135.
13）Fujieda　1966, pp. 16－32；藤枝　1972；Drège　1981, pp. 330－338, 356.

（ウィグル）語に，仮定・条件・希求などを表わす活用語尾として -S′（-sa/-sä）が，その本来の形 -S′R（-sar/-sär）と共に使われていること，及び「必要」を表わす動詞・助動詞 K′RK′K（kärgäk）のかわりにその短縮形 K′R′K（käräk）が使われていることである。この二点は，本文書が古代チュルク語文献の最古層たる7世紀末～9世紀に属するものではなく，むしろそれ以後のものであることを示す[14]。

結局，本文書の年代は10－11世紀前半ということになるが，もちろんこれは，西ウィグル王国や甘州ウィグル王国の成立する時代でもある9世紀後半の可能性を厳密に排除するものではない。また10世紀ないし11世紀前半といっても，敦煌文書全体の比率からいって10世紀である可能性の方がはるかに高い。よって我々には「10世紀前後」という言い方で本文書の年代を表わすのが最も適当のように思われる。ペリオがはじめ「10世紀」といい，のち「おそらく10世紀」と言ったのも[15]，要するに我々と同じことをイメージしていたからではなかろうか。

2.　敦煌仏教と六道

では10世紀前後の敦煌において，このような初歩的な仏教教理問答が何故に古代チュルク（ウィグル）語で，しかも当時のチュルク人になじみの深かったルーン（突厥）文字でもソグド文字でもウィグル（新ソグド）文字でもなく，わざわざ縁の薄いチベット文字を使って書写されたのであろうか。敦煌は当時の内陸アジアにおける仏教の一大センターであり，その担い手も主として漢人であった。とすると，チュルク族の間へも仏教を弘めようと意図した漢人が，なんらかの手段でこの教理問答を漢文からチュルク語に翻訳し，その際，当時の敦煌の漢人にはもっとも親しまれていた表音文字であるチベット文字を使用したのであろうか。敦煌からは，P.t.1292 よりはずっと程度が高いが，やはり六波羅蜜などの内容を問答形式で教える漢文の仏教文書（例えば P.2871, S.1488, etc.）が見つかっているので，そのような推定も成り立たなくはない。しかし，本文書の2行目から7行目にかけて説かれているのが，敦煌仏教社会にきわめて強固に根付いていた六道輪廻（りんね）ではなく，いささか特殊な五道輪廻であることが，この推定を決定的に排除する。

未だ解脱（げだつ）しえない衆生（しゅじょう）が輪廻する五道（五趣）とは，天道・人間道・畜生道・餓鬼（がき）道・地獄道であり，これに阿修羅（アシュラ）道を加えたものが六道（六趣）である。原始仏教時代にはむしろ五道だけが説かれていたようであるが[16]，部派仏教（いわゆる小乗仏教）時代になると六道

14）同じくこの二つの特徴を持つ蔵経洞出土のウィグル仏典 P.3509「善悪二王子経」をハミルトン氏は10世紀，さらに進んで10世紀後半に書かれたものと推定している（Hamilton 1971, pp.4, 90, 92, 149）。

15）Pelliot 1921, p.135；Pelliot 1927, p.372.

16）cf. 中村 1970, pp.81－84；平川 1974, p.80.

があらわれ[17]，西紀1世紀頃の大乗仏教の興起とともに，それが伝播・普及した地域，とくに中国や日本（そして恐らくチベット・モンゴリア・朝鮮など）では六道が主流となっていった。もちろん大乗仏教自身も部派仏教を踏まえて成立したものであり，その教理の中に多くの小乗的な要素を含み，中国・朝鮮・日本などで編纂された大蔵経の中に大量の小乗系経典が含まれることは論を俟たない。また，一般に大乗経典といわれるものの中に六道ではなく五道とあっても，何ら異とするに足りない[18]。しかし，今我々のみている P.t.1292 は，仏教の初心者に仏教の「いろは」を教えるため[19]の教理問答である。もし教え手の背景にある仏教が普段に六道を説くものであったなら，故意に阿修羅道を除いて五道だけを教える筈はなかろう。これは明らかに，本文書を生み出したのが，六道ではなく五道を強く意識していた仏教社会であることを物語るものである。

翻って10世紀前後ないしそれ以前の敦煌仏教界をみるに，そこでは六道が普遍的であった。そのことは，当時の一般信徒（俗人）と密着した仏教文書や絵画をみれば歴然としている。まず北朝～唐初に関しては，敦煌出土仏典の奥書（コロフォン）き（その多くは願文）が，それを如実に示してくれる。今ここに挙げるのは，たまたま筆者が寓目した実例のリストである。

出典略号一覧表（詳細は文献目録を参照）

BPTH＝*Bannières et peintures de Touen-houang* …….

G.＝ジャイルズ番号：Giles, *Descriptive Catalogue of the Chinese Manuscripts* …….

ThB＝Stein, *The Thousand Buddhas.*

17）木村&高楠　1935, p.311；平川　1974, p.232.

18）cf. 壬生　1983。

19）五道・六道が仏教を初めて学ぶ者にとっては最も基礎的な知識の一つであることは，中国最初の仏教教義に関するまとまった記録といわれる『魏書・釈老志』にもすでに「六道」が現われていることからも分かる。この『魏書・釈老志』も仏教の「いろは」を記述しているという点では，我々の P.t.1292 と性格を同じくしている。今もっとも関連の深い部分を，塚本善隆氏の訳文を借りて引用しておく。

「故に，その始めに〔仏教徒として〕心を修めるには，仏・法・僧（三宝）に帰依するのである。之を三帰という。〔論語に孔子がいわれた〕君子がおそれはばかる三畏（畏天命，畏大人，畏聖人之言）と同じようなものである。また五戒がある。殺・盗・婬・妄言・飲酒を去るのである。大意は〔中国の儒教にいう〕仁・義・礼・智・信と同じであって，名が異なるのみである。〔また〕いわく，これを奉持すれば，天・人の勝処に生まれ，これを虧犯すれば餓鬼・畜生などの諸の苦しみの生に堕ちる。善悪の生処にはおよそ六道があるのである。」

（塚本　1974, pp.88－89）

同様に，玄奘が西突厥の可汗に初めて仏法を講ずる時もやはり十善や(六)波羅蜜を説いた事実も，本 P.t.1292 文書が仏教の初学者向けであるという我々の見解をより一層確かなものにしてくれよう。cf.『大慈恩寺三蔵法師伝』巻2（1983年 中華書局版，p.28）；Beal　1911, p.44；長沢　1965, p.41.　なお，六波羅蜜（ろくはらみつ）について中村　元『仏教語大辞典』(p.1463) は「大乗仏教において菩薩がニルヴァーナに至るために実践すべき六種の徳目。」というが，六波羅蜜が小乗にとっても重要であったことは，例えば，静谷　1978, p.139 などより明らかである。また織田得能『仏教大辞典』(p.1430) をみよ。

『西美』＝ウィットフィールド『西域美術』

『総目』＝『敦煌遺書総目索引』

陳＝陳祚龍『敦煌学要籥』

禿氏&小川＝禿氏&小川「十王生七経讃図巻の構造」

『敦変』＝王重民等編『敦煌変文集』（上・下）

那波＝那波利貞『唐代社会文化史研究』

『宝蔵』＝黄永武（主編）『敦煌宝蔵』

牧田＝牧田諦亮『疑経研究』

松本＝松本榮一『燉煌画の研究』

矢吹＝矢吹慶輝『鳴沙餘韻解説』

紀　年	文書番号	タイトル		出　　典
543（大統9年）	S.736	大比丘尼羯磨一巻の奥書き	六道	G.5497；『総目』；陳，p.95；『宝蔵』巻6，p.191.
576（太建8年）	P.2965	仏説生経第一の奥書き	六道	『総目』；陳，p.185；Dzo 1981：Plate XIII.
590（開皇10年）	大谷	大通方広懺悔滅罪荘厳成仏経の奥書き	六道	牧田，p.291.
595（開皇15年）	P.4563	救疾病経の奥書き	六道四生	牧田，p.37；陳，p.195.
597（開皇17年）	S.2527	華厳経巻第九の奥書き	三界六道	G.1623；『総目』；矢吹，第一部，p.272；陳，p.117；『宝蔵』巻20，p.492.
〃	S.6650	華厳経巻第三十の奥書き	〃	『総目』；陳，p.162；『宝蔵』巻49，p.658.
〃	P.2144	華厳経巻第三十七（三十三？）の奥書き	〃	『総目』；陳，p.171.
〃	S.1529	華厳経巻第四十九の奥書き	〃	『総目』；陳，p.104；『宝蔵』巻11，p.400.
〃	S.5762	華厳経（？）の奥書き	〃	『総目』；陳，p.157.
606（大業2年）	S.2598	大般涅槃経巻第十六の奥書き	六道四生	G.1759；『総目』；陳，p.118；『宝蔵』巻21，p.366.
608（大業4年）	S.2419	妙法蓮華経巻第三の奥書き	六道	G.2529；『総目』；矢吹，第一部，p.273；陳，p.115；『宝蔵』巻19，p.291.
〃	P.2205	大般涅槃経巻第八の奥書き	六道	『総目』；陳，p.175.
〃	P.2117	大般涅槃経巻第三十三の奥書き	〃	『総目』；陳，p.170.
648（貞観22年）	北京	解深密経巻第二の奥書き	四生六道	松本文三郎『仏典の研究』pp.124，126－127.

648 (貞観22年)	守屋	妙法蓮華経巻第五の奥書き	四生六道	陳，p. 58.

（参考）北朝時代の作である千仏洞第428窟の南壁に六道図が描かれているという。cf. 白土 1975, p. 21.

唐の盛期の様子を伝える資料がないのは残念であるが，唐末～五代～宋初すなわち9世紀後半～11世紀前半になると，再び沢山の証拠がある。まず敦煌文書中の仏教文書（絹絵銘文を含む）の例を挙げ，次いで変文・講経文に六道といっているものの例を掲げる。変文・講経文の類はほとんど9－10世紀頃のものとみられる[20]ので，年代は示さない。

紀　年	文書番号	タイトル		出　　典
869 (咸通10年)	P. 4660	敦煌名人名僧邈真讃彙集の中の一つ	六趣	
896 (乾寧3年)	S. 2113 v	唐沙州龍興寺上座沙門俗姓馬氏番号徳勝宕泉刱修功徳記	六道，六道之輪廻	『宝蔵』巻16，pp. 229－230；藤枝「千仏洞の中興」pp. 121—122；土肥『講座敦煌』2，p. 284.
920 (貞明6年)	北京，宿50	患文一巻	六道	『北京図書館蔵敦煌写経』第六帙，No. 8414
968 (乾徳6年)	烏程蔣氏旧蔵	絵観音菩薩功徳記	六道	羅福萇『沙州文録補』
10世紀前後	S. 345	大仏略懺一巻	六道，六道四生	G. 6474；『宝蔵』巻3，p. 189.
〃	S. 354	第十六巻中懺悔文	輪廻六道	G. 6465；『宝蔵』巻3，p. 222.
〃	S. 1073	受菩薩戒疏	六道四生	G. 6588；『宝蔵』巻8，p. 521.
〃	S. 1931 v	七言无常偈	六道	G. 6333；『宝蔵』巻14, p. 567; 金岡『分類目録』p. 62.
〃	S. 4474 v	廻向文	六道輪廻	G. 6448；『宝蔵』巻36, p. 279.
〃	S. 4511	願文	六道，五趣之群生	『宝蔵』巻36，pp. 398－399.
〃	S. 4654	願文	六道	G. 7222；『宝蔵』巻37, p. 249.
〃	S. 5457	誡文	六道	『宝蔵』巻42，p. 652.
〃	S. 5573	印沙仏文	六道	G. 6197；『宝蔵』巻43, p. 474.
〃	S. 5579	願文	五道	G. 6646；『宝蔵』巻43, p. 501.
〃	S. 5616	患僧文	六趣	G. 6285；『宝蔵』巻44, p. 13.
〃	S. 5633	臨壙文	六趣	G. 6647；『宝蔵』巻44, p. 66.
〃	S. 5957	邑文(社齋文)	六趣，五趣	『宝蔵』巻44, p. 603；竺沙『中国仏教社会史研究』pp. 527－528.
〃	S. 6313	願文	六道	『宝蔵』巻45，p. 226.
〃	S. 6328	転経廻向文	六道	『宝蔵』巻45，p. 238.
〃	S. 6923 v	社文	五趣	『宝蔵』巻53，p. 559.

20）cf. 金岡　1972, pp. 176－182；金岡　1981, p. 52；王重民　1984, pp. 178, 183, 206.

〃	P.2915	礼仏文	六道	
	P.2122	(擬題)維摩詰経講経文	淪(ママ)廻六道	『敦変』p.589.
	P.2133	(擬題)金剛般若波羅蜜経講経文	六道，三塗六道，六道三塗	『敦変』pp.432, 433, 438, 439.
	P.2133	(擬題)妙法蓮華経講経文	六道，六道三塗	『敦変』pp.511, 512.
	P.2292	(擬題)維摩詰経講経文	六道，四生六道，六道三塗	『敦変』pp.593, 604, 617.
	P.2305	(擬題)妙法蓮華経講経文	六道	『敦変』p.494.
	P.2418	父母恩重経講経文	六道，三塗六道	『敦変』pp.677, 687.
		＊ただし p.687 の例では「三塗六道，五趣四生」と対句になっている。		
	P.2931	(擬題)仏説阿弥陀経講経文	六道	『敦変』p.455.
	P.3048	金剛醜女縁起	六道輪廻	那波，p.424.
	P.3093	(擬題)仏説観弥勒菩薩上生兜率天経講経文	六道	『敦変』p.647.
	P.4690	金光明最勝王一鋪	六趣	那波，p.433.
	S.3491＋P.3051	頻婆娑羅王后宮綵女功徳意供養塔生天因縁変	六趣	『敦変』p.768.
	S.4511	金剛醜女因縁一本	六道輪廻	『敦変』p.787；『宝蔵』巻36, p.399.
	S.4571	(擬題)維摩詰経講経文	六道	『敦変』p.538；『宝蔵』巻36, p.585.
	S.6551	(擬題)仏説阿弥陀経講経文	輪廻六道	『敦変』p.461；『宝蔵』巻48, p.362.
	北京，成96	(擬題)目蓮変文	輪廻六道	『敦変』p.756.
	レニングラード，Φ101	維摩詰経変文・維摩碎金	六道，四生六道	Меньшиков 1963, Plate, *ll.* 68, 81, 98.

仏教的大衆文学ともいうべき変文・講経文の全てが全て六道といっているわけではなく，例えば，上掲の P.2418 のほか，P.2999「太子成道経一巻」や雲24「八相変」などでは五道（五趣）といっている(cf.『敦変』pp.293, 332)。しかし，それらの五道には，阿修羅道を除く本来の意の五道ではなく，天道に登り得ずに「堕落」した者の趣くべき，従って救済の対象となるべきものとしての五道（五趣）の意――もちろんこれは仏教本来の用法としては誤っているが――で使われている場合がある。変文以外でみれば前出の S.5957（社斎文）の「五趣」（同一文中に「六趣」もあり），S.4511（願文）の「五趣之群生」（同一文中に「六道」もあり），後出の地蔵菩薩図（No.1）の銘文中の「五趣」（図には「六道」を描く）の場合

は疑いもなくそのような例である。つまりその背後にあるのはやはり六道の観念である。こうした点をも考慮に入れるならば，全体の割合としては圧倒的に六道の方が多くなり，敦煌仏教は広く一般信者に対しては六道を説いていたと考えて何ら異存はあるまい。このことをさらに決定づけるのは，蔵経洞出土の地蔵図や十王経図巻，あるいはその両者の結び付いた地蔵十王図の類である。筆者のみた限りでは，これらは全て六道を描き出しており，五道を描いたものはただの一つもない。これらの絵画類も，例外を除けば[21]，やはり10世紀前後のものとみなされている。とくに以下の一覧表の冒頭の二つは，それぞれ建隆四年（963年）と太平興国八年（983年）の銘があって，その製作年代ははっきりしている。

	タイトル	六道の配置	出典
No. 1	絹本著色被帽地蔵菩薩（スタイン将来）	天 人 畜 阿 地 餓	松本，附図一〇六，b；同，図像篇，p. 373；*ThB*, Pl. XXV left & Text, pp. 37－38 (Ch. lviii. 003); Stein, *Serindia*, Pl. LXVII right；『宝蔵』巻37，美471号；『西美』2，図版 22 & Figs. 25－27，本文 pp. 322－323.
	＊銘文中には「五趣」とある。		
No. 2	絹本著色地蔵十王図（ペリオ将来）	天 人 畜 阿 餓 地	松本，附図一〇八；同，図像篇，p. 375 ff.；*BPTH*, No. 116, Pl., p. 78 & Catalogue, p. 241 (MG. 17662).
No. 3	麻本著色被帽地蔵菩薩（ペリオ将来）	阿 天 餓 人 地 畜	*BPTH*, No. 120, Pl., p. 81 & Catalogue, p. 255 (EO. 3580); Bussagli, *La peinture de l'Asie Centrale*, p. 117.
No. 4	絹本著色被帽地蔵菩薩（ペリオ将来）	人 天 阿 畜 餓 地	松本，附図一〇七，a；同，図像篇，pp. 373－374；*BPTH*, No. 113, Pl., p. 75 & Catalogue, p. 235 (MG. 17664).
No. 5	絹本著色地蔵十王図（ペリオ将来）	餓 天 畜 人 地 阿	*BPTH*, No. 115, Pl., p. 77 & Catalogue, p. 239 (MG. 17795).

21）とくに No. 5 に対する疑念については，森安　1985，第一章を参照。ただしその註12で述べたように，例外とみる必要はないかもしれない。

No. 6	紙本淡彩十王経図巻残巻（スタイン将来）	阿 天 人 畜 餓 地 ＊「阿」と「天」の順序は松本の解説による。	Stein, *Serindia*, Pl. XCIII; 松本，附図一一六，a；同，図像篇，pp. 402--403；禿氏＆小川，p. 296；『宝蔵』巻44，美547号；『西美』2，図版63，本文 p. 344.
No. 7	紙本淡彩十王経図巻（旧山中商会，現長尾美術館所蔵）	天 阿 人 畜 餓 地	松本，附図一一八，a；同，図像篇，pp. 405－406；禿氏＆小川，B本，pp. 285, 295.
No. 8	紙本十王経図巻（スタイン将来 S. 3961）	仏道 人 畜 蛇道 餓 地 ＊「仏道」と「蛇道」は特殊だが，そのように文字が添えられている。	禿氏＆小川，C本，pp. 285, 295；『宝蔵』巻32，p. 575；『西美』2，図版64。
No. 9	地蔵図	阿　成仏道 人　畜 餓　地 ＊『宝蔵』の写真は不鮮明だが，「成仏道」と読み取れる。	『宝蔵』巻38，美484号。

また謝稚柳氏は楡林窟第9窟に関して，「外洞（盛唐・宋）……洞口，宋人画地蔵菩薩六道輪廻，残毀」という記述を残している[22]。

22）謝稚柳　1955, p. 452.

3.　西ウィグル仏教との関係

前節でみたように，P.t.1292 を生み出したのが敦煌の漢人仏教社会でないとすれば，これは敦煌に来ていた異国の仏教徒が作ったか，あるいはどこかよそで作られて敦煌へもたらされたか，のいずれかということになる。後者の場合は勿論，前者の場合でもその本拠地には五道を説く仏教が広く行なわれていたはずである。また，P.t.1292 はチュルク語で書かれているのであるから，教理問答の教え手（または作成者）か習い手（読み手）の少なくとも一方はチュルク人でなければならない[23]。10世紀前後の時代において，敦煌と密接な関係にある敦煌以外の地で，仏教徒ないしはこれから仏教徒になり得るチュルク人がおり，且つ五道を説く仏教が栄えていた所といえば，それはもう西ウィグル王国以外に考えられない。以下にその根拠を縷述しよう。

チュルク族に於ける仏教の起源については，まだまだ不明の点が多い。なるほどモンゴリアでは，漢文史料やソグド語のブグト碑文によって証明された通り[24]，突厥第一可汗国時代（552－630年）に仏教が尊信されたことはあった。しかしそれは他鉢可汗前後における一時的風潮にすぎず，またその時の仏教が突厥本来の宗教たるシャーマニズムに取って替わるという程のものでもなかった。モンゴリアのチュルク族（東突厥・鉄勒・ウィグルなど）の間に7世紀以降も引き続き仏教が崇拝されていた痕跡はほぼ皆無に近い。ヨーロッパや中国の学者の中には，突厥第一可汗国に於ける仏教信仰を非常に根深いものとみたり，突厥第一可汗国時代のウィグル族の間や突厥第二可汗国，そしてさらにマニ教改宗以前の東ウィグル可汗国に於て仏教が行なわれていたとする者があるが[25]，その根拠は余りに薄弱である。以上については護　雅夫氏の一連の論考に詳しいので[26]，ここでは贅言を費やさない。

一方，天山地方に於けるチュルク仏教の起源も，詳しいことは何一つ分かっていない。しかし天山地方は古くから仏教が非常に盛んであったところで，この地方と密接な関係（対等の交易関係や支配・被支配の関係，さらにはここを住地とするなど種々あり）をもったチュルク人（とくに西突厥や突騎施（チュルギッシュ）・抜悉密（バシミル）・葛邏禄（カルルク）など）の中から徐々に仏教に帰依する者が増えていったであろうことは十分に推測される[27]。また，8世紀末以降は東ウィグル可汗国の勢力が東部天山地方に及び，その地方の間接支配（徴税など）のためにモンゴリアからかなりの数のウィグル人が派遣されてきていたと思われるから[28]，本国ではマニ教が栄えていたとはい

23）そのいずれでもない場合，すなわちチュルク語が仏教世界の「伝道用語」もしくは「公用語」として使用されたというような状況はまず想定できない。

24）Kljaštornyj & Livšic　1972, pp. 69－102；護　1972, pp. 77－86；Bazin　1975, pp. 41－45.

25）最近のものでは，例えば次のものを参照：Bazin　1975, pp. 41－43；Marazzi　1979, n. 6；耿世民　1980 b, pp. 76－78；耿世民　1983, pp. 30－34；孟凡人　1982, p. 58.

26）護氏の批判の対象となった文献の目録は護氏の諸論文に引用されているので，ここでは列挙しない。　cf. 護　1974；護　1976 a, pp. 15－20；護 1976 b, 第7章；護　1977。

27）cf. 羽田　1948, pp. 111, 147－149；羽田　1958 e；Asmussen　1965, p. 148. ただし私は羽田説に全面的に賛成しているわけではない。

え，この地方の住民の根強い仏教信仰とハイ＝レベルの仏教文化に圧倒されて，仏教に改宗するウィグル人が現われたと考えても，少しもおかしくはない[29]。けれども，この地方に確固たるチュルク人仏教社会が形成されるのは，やはりウィグルの西遷（840年代）以降，大量のウィグル人がここに定着するようになってから（即ち西ウィグル王国の成立以後）と考えるべきであろう[30]。

ウィグルないしそれに先行するパミール以東（とくに東部天山地方）のチュルク族に初めて仏教を伝えたのはソグド人や漢人であったに違いないが[31]，彼らが本格的に仏教化してい

28）cf. 森安　1979, pp. 210－220；Moriyasu　1981.

29）cf. 佐口　1973, pp. 2－5；孟凡人　1982, p. 58.

30）パミール以西（及び以南）すなわち西トルキスタンでは，チュルク族が仏教に帰依するのはかなり早くからであった（cf. Gabain　1954 a, pp. 166－167；リトビンスキー　1972, pp. 1049－1048）。しかしそれが天山（とくに東部）地方のチュルク族の仏教徒化に直接の影響を与えたかというと，何らそれを支持する証拠はなく，答は否定的にならざるをえない。

31）これは歴史学的な情勢判断からだけでなく，チュルク語に定着した仏教用語のうち，俗人や非仏教徒も含め広く人口に膾炙（かいしゃ）したと思われるごく基礎的なものが，多く漢語やソグド語からの借用語であるという事実からも，そういえる。cf. Gabain　1954 a, pp. 166, 167－168；Gabain　1977, p. 59；Gabain 1983, p. 194；Asmussen　1965, pp. 144－147.

漢語からの借用の例：

- bušï「布施」<Chin. 布（*GSR* 102*j puo*）＋施（*GSR* 4*l' śię*）
- linxua「蓮華」<Chin. 蓮（*AD* 551 *(lien)*）＋華（*GSR* 44*a γwa*）
- šabi「沙弥，見習僧」<Chin. 沙（*GSR* 16*a ṣa*）＋彌（*GSR* 359*m mjię:*）
- titsi「弟子」<Chin. 弟（*GSR* 591*a d'iei*）＋子（*GSR* 964*a tsi:*）
- tavčaŋ「道場，仏寺」<Chin. 道（*GSR* 1048*a d'âu:*）＋場（*GSR* 720*x d̂'i̯ang*）
- toyïn「僧」<Chin. 道（*GSR* 1048*a d'âu:*）＋人（*GSR* 388*a ńźi̯ěn*）. cf. Gabain　1954a, p. 166.
- tsuy「罪」<Chin. 罪（*GSR* 513*a dz'uâi:*）

☆burxan「仏，仏陀」と bursaŋ「仏僧集団」についてはこれを漢語と関係づける学者は多いが，強い反対意見もあるので，このリストに含めるのは差し控える。

ソグド語からの借用の例：

- ažun「世間」<Sogd. *''jwn/''ž⁽ʾ⁾wn*
- äzrua「梵天」<Sogd. *'zrw'*
- čxšapt「持戒」<Sogd. *cxš'pδ*
- nizvanï「煩悩，情欲」<Sogd. *nyzβ'nyy*
- nom「法，教義，経典」<Sogd. *nwm*
- noš「甘露，ネクター」<Sogd. *nwš*
- saŋsar「輪廻」<Sogd. *snks'r*
- šakimun「釈迦牟尼」<Sogd. *š'kymwn*
- šïmnu「悪魔」<Sogd. *šmnw*
- tamu「地獄」<Sogd. *tmw*（accusative）
- upasanč「優婆夷，清信女」<Sogd. *⁽ʾ⁾wp's'nch*
- upasi「優婆塞，清信士」<Sogd. *⁽ʾ⁾wp's'y*
- vrxar「僧院，ヴィハーラ」<Sogd. *βrx'r*
- xormuzta「帝釈天」<Sogd. *xwrmzt'*

ただしこれらのソグド語ないしソグド語形からの借用語には，先ずマニ教あるいはキリスト教（ネストル教）の用語として入ったものも多いと思う（cf. 羽田　1931, pp. 172－175；羽田　1948, pp. 151－152；Benveniste　1964, pp. 85－87, 90；庄垣内　1978, p. 106；庄垣内　1980 b, p. 278；Tongerloo　1982, pp. 270－273）。例えば čxšapt（CXŠ'PT）などはその好例である。サンスクリットの śikṣāpada に対応するソグド語には *škš'pt* と *cxš'pδ* とがあるが，前者は仏教ソグド語であり，後者はマニ教ソグド語である。チュルク＝ウィグル語の čxšapt がいずれに由来するかは一

く段階で最も大きな影響を与えたのはいわゆるトカラ人[32]であった。そのことはウィグル語に入ったインド来源の仏教語彙の多くがトカラ語経由のものであったという言語学的研究から明らかになってきた[33]。漢人は中・後期のウィグル仏教には多大の貢献をなしたが，初期にはまだそれ程強く関与していなかったようである。しかし，もし従来の多くの歴史学者が考えてきたように，西ウィグル王国の中心が初めからトゥルファン（高昌）地方にあったのなら，これは辻褄があわない。なぜなら，東部天山地方の中でもここは既に漢代から漢兵が屯田を営み，次々に本土から漢人が移民し，早くも5世紀には漢人系の高昌王国が成立[34]，これを唐が滅ぼした（640年）後も，唐の西域経営の一大拠点となり，ほぼ完全に漢人中心の世界となっていたからである。仏教史家の研究は，この漢人仏教がおおむね大乗系であったことを認めている[35]。従ってここでも五道輪廻ではなく六道輪廻を一般に説いていたに違いないと思われるが，実際それは出土文書や碑文からわずかながら確かめられる[36]。西ウィグル王国の中心が最初からトゥルファン地方にあったのなら，その仏教は六道を説くもので

目瞭然である。さらにシムス＝ウィリアムス氏によれば，「Skt. *śikṣāpada*＞マニ教パルチア語 *cxš'byd*＞マニ教ソグド語 *cxš'pδ*」であるという（cf. Sims-Williams 1983, pp. 133, 137, 141）。尚，この項のソグド語形に関しては吉田　豊氏の校閲を経たので，記して感謝する。

32）クチャ（亀茲）～カラシャール（焉耆）～トゥルファン（高昌）地方にいた印欧系の民族をトカラ人 Tokharian，その言語をトカラ語とよぶ呼称は，厳密には正しくないが，その便利さゆえに学界での市民権を失なっていないので，本稿でもそれに従う。cf. 井ノ口　1961, pp. 319－320.

33）Gabain 1961, pp. 16, 70（ガバイン 1965, p. 31 & 1970, p. 39）；庄垣内 1978（とくに重要）；庄垣内 1980 b, pp. 278－280；Moerloose 1980, pp. 61－62, 75；Gabain 1983, pp. 185, 194.

34）沮渠氏・闕氏・張氏・馬氏・麴氏と続く漢人系（沮渠氏のみ準漢人系）高昌王国の歴史については研究がはなはだ多いが，ここでは最新の論文を一つだけ挙げておく：白須　1978－1981。もちろん漢人王国といっても土着のトカラ人の存在は無視できない（cf. 馮承鈞　1967, p. 44）。

35）cf. 羽溪　1914, pp. 402－414；小笠原　1966 a；小笠原＆小田　1980, pp. 85－102；金岡　1975, pp. 147－149.

36）例えば「寧朔将軍麴斌造寺碑」の碑陽（延昌十五年乙未歳＝A. D. 575 年）には「六道之境」とあり，碑陰（碑陽より古い）には「六趣」とみえる（cf. 黄文弼　1954, pp. 51－53，折り込みの録文，図版五四～五七，図59）。また，ベルリンにあるル＝コック将来トゥルファン文書中の一つ『仏説仁王般若波羅蜜経』のコロフォン（延昌卅一年辛亥歳＝A. D. 591 年）には「六道四生」とあり（cf. 大谷　1936, pp. 26－27），同じく『金光明経巻第三』のコロフォン（延昌卅七年丁巳歳＝A. D. 597 年）には「六趣」とある（出口常順氏のノート「ル＝コック将来西域出土古写経目録」1933 年，No. 75＝*BTT* VI, Abb. 28）。筆者は目下のところ残念ながらトゥルファン文書を精査する便をもたないが，トゥルファン出土漢文文書の中には，まだまだ六道をいう例があると信ずる。一方，高昌王国時代の随葬衣物疏には「逕（ただチニわたレリ）　渉（ヲ）　五道」と定式化した語句が常に「五道大神」とセットになって現われるが，この五道とは，本文29－30頁に述べたのと同じく天道を除いた五道であって，本来の五道とは別物であろう（cf. 白須　1983, pp. 74, 88－93）。因みにいえば，第2節で六道の実例として紹介した紙本十王経図巻の本文には，十王の一人として「五道大神」が現われる。即ち「六道」と「五道大神」とは並存し得るもので，矛盾し相対立する概念ではない。このことからも「五道大神」とは中国在来の神格の一つで，その「五道」とは仏教の「五道（五趣）」とは元来は別のものであったと考えるが，いかがであろうか。小田義久氏は従来の通説に反して，「五道大神」の起源を道教よりむしろ仏教に求め，説一切有部などで「五道」を説くことをいい，「六道に比して五道の方は中国における五行思想などと習行して理解されやすいため，民衆の中により密着して滲透していったものと考える」（小田　1976, p. 24）と述べているが，私はこの考えには従えない。もし氏のいう所が正しいなら，敦煌仏教ならびに中国仏教一般に六道より五道が普及したはずであるが，事実は全くその逆である。

あり，且つウィグル語に借用された仏教用語の大部分が漢語でなければなるまい。

私は既に別稿においてこれまでの定説を覆(くつがえ)し，西ウィグル王国の最初期の中心地はトゥルファン地方ではなく焉耆（カラシャール）地方であったことを論証した[37]。またウィンター氏は，仏教色の濃い西域北道のトカラ人分布地帯（クチャ〜カラシャール〜トゥルファン地方）の中でも，彼らの宗教的（即ち仏教の）中心地はショルチュク Šorčuq ないしその周辺であったことを示唆している[38]。ショルチュクはカラシャール南方の仏教遺跡であり，焉耆文化圏に属していたことはいうまでもない。このようにトカラ仏教の中心地であった焉耆地方に西ウィグルは最初の政治的中心を置いたのである。そしてそのトカラ人の間では，六道よりも古い五道という概念をずっと保ち続けてきた小乗系の有部[39]（本稿では説一切有部と根本説一切有部を厳密には区別しない）が優勢であったのである[40]。

以上によって我々は，西ウィグル王国の初期にはまず五道を説く仏教が流布したと推定する根拠は十分と考えるが，これはさらに10世紀前後の西ウィグル国人自身の残したウィグル語の碑文や棒杭文書に「五道（béš ažun, béš yol）」とある[41]のをみることによって，全く疑いの余地がなくなる[42]。

37）森安　1977, pp. 112−123.

38）Winter　1963, p. 244. さらにショルチュクからはチュルク〜ウィグル語の称号（qatun, bäg, qara čor など）を含むコロフォンをもつトカラA語の仏典が出土している（cf. art. cit., p. 242）。

39）cf. 木村&高楠　1935, p. 311；頼富　1978, p. 12.

40）このことは法顕（5世紀）・玄奘（7世紀）・慧超（8世紀）らの旅行記からつとに知られていたが，さらに原地の仏教寺院の壁画や原地出土のトカラ語仏典の研究によって一層明確になった。これに関する参考文献は厖大なので，今は参照に便利なもの あるいは基本的なものだけを掲げる。cf. Beal　1869；長沢　1971；Beal　1884；水谷 1971；Fuchs　1938；定方　1971。井上（百済）　1972, pp. 59−61；井ノ口　1958, p. 180；井ノ口　1961, p. 342；井ノ口　1975, 第四節；井ノ口&百済　1974, pp. 21−23；上野（照）　1962, p. 217；金岡　1975, 第四〜五節；熊谷　1962, 第六〜八章；羽溪　1914, 第五〜六章；羽溪　1942, pp. 300, 304−305, 309−312；宮治　1982, pp. 123−127；Asmussen　1965, p. 142；Sieg & Siegling　1921, pp. xi−xii.　ただしこれらの主な研究においても，トゥルファン地方では大乗仏教が優勢であったと説かれているが，それはトゥルファンの漢人仏教についていっていることであって，トゥルファンでは少数派であったトカラ人の仏教については知るところが少ない。しかしそれでもトゥルファン出土のサンスクリット仏典（これは漢人よりもトカラ人が主に使用したものである）には小乗系のものが圧倒的に多いといわれる（cf. 井ノロ　1975, pp. 230−231）。

41）①トヨク碑文（Tudum Šäli 碑文），*l.* 24：“tört t[illegible] béš ažunluγ”（cf. 黄文弼　1954, 図版一一〇，図99；耿世民　1981 a, p. 80）．本碑文をテキン氏は8世紀後半のものとみるが（Tekin 1976a），これは全くの誤解である。耿氏はより適切に10−12世紀とするが，おそらく10世紀頃としてよかろう。因みに上に引用した一句に対する耿氏の訳は誤りであり，また“täŋrim”の解釈に関し私の説を批判しているのも的はずれである（cf. 耿世民　1981a, pp. 81, 83）。②（第三）棒杭文書，*l.* 26：“tört toγum béš yol ičintäki”（cf. Müller　1915, p. 24）。この棒杭文書の年代もかつては東ウィグル可汗国時代と考えられていたが，今では西ウィグル王国時代のものとする点で諸家の見方は一致している。私はさらに進んでこれを1019年（または959年）とみる説を提唱した。cf. 安部　1955, pp. 367−368；森安　1974, p. 38；Bazin　1974, pp. 321−326；森安　1980a, pp. 334−335, 337−338.　③（第四）棒杭文書：“tört toγum béš ažun tïnlγ”（cf.『新疆出土文物』北京　1975, 図199左。尚，本書ではこれを元代としているが，ウィグル文字の書体が私のいわゆる「半楷書体」（cf. 森安　1985, p. 16）であるところから，これまたやはり西ウィグル時代の10−11世紀頃のものとみなすべきである。

一方，9世紀末から10世紀初頭までには，クチャ～カラシャール～トゥルファンの旧トカラ地方は全て西ウィグル王国領となり，また王国の中心は遅くとも10世紀前半にはビシュバリク（北庭）～トゥルファン地方に移っていた。そしてこの西ウィグル王国と敦煌地方（沙州帰義軍節度使政権）との結び付きは益々深くなっていった。そのことは[43]，当時東西貿易がかなり順調であったという状況証拠からも推し量られるが，一次史料たる敦煌文書の中には，両地の間にラクダと人（即ちキャラヴァン）が往復したことを示す漢文文書数通[44]や両者間の貿易を示唆するウィグル文書数通[45]，西ウィグルの使者が敦煌千仏洞に参詣したことを示すウィグル文書[46]，そしてさらに西ウィグル国のトップ＝クラスの仏僧から敦煌のやはり高位の仏僧に宛てられた書簡[47]まで実在する。また10世紀後半～11世紀前半には，西ウィグル王国の勢力が敦煌地方に強く及んだ可能性が大きいこと，これまた既に別稿に論じた通りである[48]。

42）ところで五道・五趣・六道・六趣の「道・趣」をウィグル語では ažun または yol のいずれかで表わしている。ažun はソグド語の ″žwn/″jwn「生，誕生；存在；生物」からの借用語であり，yol は具体的な「(ルートとしての）道，路」を表わす純粋の古代チュルク語である。一方，「道・趣」にあたるもとのサンスクリット語 gati の本義は「行くこと・行き方」であり，抽象的な「みち」にあたる「過程，方法」や「あり方，存在の状態」などの意味はそこから派生したものである。またトカラ語の対応語 cmol (Tokh. A), camel (Tokh. B) も「出生，誕生」にかかわる語義を持つもので (cf. Krause & Thomas 1964, pp. 101, 114＝päñ-cmolwāṣi, pp. 192, 211＝piś-cmelaṣṣe; Poucha 1955, p. 170)，「(ルートとしての）道，路」の意はない。それ故，Uig. yol が Chin.「道」を単純に直訳したものであることはまず間違いない。しかるに Uig. ažun の方は Sogd. ″žwn よりの借用とはいえ，'béš ažun' と熟した概念までもが Sogd. 'pnc ″žwn' から導入されたものかどうかは速断できない。Tokh. A 'päñ-cmol-' や Tokh. B 'piś-cmel-' からの翻訳とも考えられるし，Skt. 'pañca gati' からの翻訳とも考えられるからである。その際 ažun なる語を使ったのは，この語がもっと以前からソグド人によって古代チュルク人の間に伝えられ，既にウィグル人たちにとって自家薬籠中のものとなっていたと考えれば，矛盾はない。しかし，事実は恐らく，8世紀後半以降ソグド人マニ教徒の絶大な影響を蒙ったウィグル人の間に，まずマニ教の概念用語として Sogd. 'pnc ″žwn' が伝えられ，これが Uig. で 'béš ažun' と意音訳されて流布し，後，トカラ仏教と密接な関係を生じた時点でこのマニ教の 'béš ažun' がそのまま仏教の 'päñ-cmol-' や 'piś-cmel-' の定訳として使用されるに至ったのではなかろうか。これを 'béš yol' とも訳すようになるのは，10世紀に漢人仏教と深くかかわるようになってから（第8節参照）のことにちがいない。（もちろん 'béš yol' という訳語が成立してからも，'béš ažun' が使われなくなったわけではない。cf. 後註148)。初期の西ウィグル仏教が六道ではなく五道を採った背景には，本文で述べたようなことだけでなく，ウィグル人が仏教以前に親しんでいたマニ教の影響が存在することも十分考えられる。マニ教が六道ではなく五道（五趣）といっていたことは，敦煌出土の漢文マニ経典に「輪廻五趣」とあり，トゥルファン出土のウィグル文マニ教賛美歌中に 'béš ažun' とあることからほぼ疑いなかろう (cf. Chavannes & Pelliot 1911 pp. 533－534, 613; Bang & Gabain 1930a, pp. 184, 188)。

43）このことは別稿で論証する予定であるので，今は概略だけを述べておく。

44）例えば，cf. Gernet 1966, pp. 46, 48, 49.

45）46）Pelliot ouigour 4, 12; Pelliot chinois 2988v., 3134v. など。これらについてはハミルトン氏が詳しく紹介する予定であるが，それまでは，cf. 森安 1985，第二章。

47）Pelliot chinois 3672 Bis. 差出人の称号は「賞紫金印検校廿二城胡漢僧尼事内供奉骨都禄沓密施鳴瓦伊難支都統大徳」である。廿二城はトゥルファン地方の代名詞であり，胡漢僧の胡は主にトカラ人をさすと思われる。「骨都禄沓密施鳴瓦伊難支」は Uig. 'qutluγ tapmïš ögä ïnanč' の音写である。

48）森安 1980 a, pp. 331－335.

ここで P.t.1292 のテキストをもう一度振り返ってみると，内容は初歩的だが用語はよく整い，しかもその用語がトゥルファン出土のウィグル語諸仏典とよく一致することに気が付く。例えば冒頭と末尾の三帰依文「南無仏・南無法・南無僧」や，*ll.*1−2 の "N'MW YWKWNWR PYZ …… XWTYNK' (namo yükünür biz …… qutïŋa)" という表現は，ここに実例を引用する必要がないほど至る所にみられる。また六波羅蜜のそれぞれの訳語や "TWYRT TWXM'X (tört toγmaq)"「四生」(*ll.*2, 3, 5), "TYNLX 'WXL'NY (tïnlγ oγlanï)"「衆生」(*l.*3), "'WYC Y'βL'X YWL (üč yavlaq yol)"「三悪道」(*l.*41) なども同様で，これらはいわば仏教ウィグル語の定訳である。また，使用されているインド来源語彙 (P'R'MYT, KŠ'NTYP'LY, DY'N など) の語尾形式もトゥルファンのものと矛盾はみられない[49]。個々の用語や表現の一致だけでは，敦煌出土の P.t.1292 とトゥルファン出土のウィグル仏典とが同じ仏教社会から出て来たことをいうに不充分というなら，Bang & Gabain, Türkische Turfan-Texte, IV (*SPAW* 1930) 及び Hazai, "Fragmente eines uigurischen Blockdruck-Faltbuches" (*AOF* 3) をみていただきたい[50]。繁雑になるので細かい指摘は避けるが，前者ではとくにAの *ll.*20, 47, 68−74 を，後者では *ll.*1−18, 38−40, 49, 57−62 をみるだけで，これら二つのトゥルファン文書と P.t.1292 との間に深いつながりがあることは容易に諒解されよう。

以上を総合して我々は P.t.1292 を10世紀前後の西ウィグルの仏教文書であると決定し得る。ただし「解題」および第1節でみたような紙の質・規格その他の諸条件からして，これが東部天山地方の西ウィグル本国内で作られた可能性は少なく，恐らく敦煌にやって来た西ウィグル人（多分仏僧）——ここにいう西ウィグル仏僧とは，ウィグル語を話し，ウィグル仏教を身につけた人の意であり，人種的にはチュルク人・トカラ人・漢人・ソグド人・チベット人その他のいずれであってもよい——がそこで作成したものか，あるいは西ウィグル王国からもたらされた原本を敦煌で書写し直したものかのどちらかであろう[51]。

4.　古代チュルク人の使用した諸文字

P.t.1292 文書に示される仏教教理問答の教え手は西ウィグル人であることが判明したが，それではこの習い手は誰か。習い手としてはチュルク人と非チュルク人とが考えられる。まず非チュルク人と仮定した場合であるが，10世紀前後の敦煌ないしその周辺にいた非チュルク人といえば，漢人・チベット（吐蕃）人・コータン（于闐）人・嗢末人・アシャ（吐谷渾）人・ソグド人・チュングル (Čuŋul) 人が主なものである[52]。しかし当時すでに仏教の長い

49) 以上の点につき，さらに細かくは次稿にまわしたテキスト註を参照せねばならない。また，とくにインド来源語彙の語尾形式の問題については，cf. 庄垣内　1978; Moerloose 1980.

50) 後者は元代の版本であるが，もとの訳は10世紀末〜11世紀初頭にシンコ＝シェリ都統によってなされたものである。このことについては本稿第8節をみよ。

51) この点については第6節のおわりにもう一度言及する。

伝統と高い水準を有していた漢人・チベット人・コータン人がなにもわざわざ西ウィグル人から，それもウィグル語で仏教の初歩を学ぶ必要はないし，歴史的必然性もない。嗢末・アシャの両者なら，吐蕃王朝との強いつながりからみて[53]，当然チベット語・チベット仏教に親しんでいたはずである。ソグド人とチュングル人についてはその仏教史がよく分からないのでなんともいえないが，少なくともソグド人に教えるなら，チベット文字を使わずに，元来はソグド人から習ったウィグル文字を使用したであろう。ではチュルク人の場合であるが，当時の敦煌およびその周辺にいたチュルク人といえば，西ウィグル人を除くとまず甘州ウィグル人[54]，そして抜野固（バヤルク）・同羅（トングラ）・僕骨（ブク）・思結・黄頭（サリク）ウィグル人など[55]が考えられる。

敦煌ないしその周辺にいたチュルク人たちが，チュルク人の中では最初に仏教王国を形成しつつあった西ウィグル王国からやって来た仏僧に仏教を習うというのは極めて自然である。用語のウィグル語は，少なくともパミール以東の全てのチュルク族にとっては何の抵抗もなかったはずである。

しかし，その際なぜチベット文字が使われたのか。この点はどうしても説明が要求される。教え手たる西ウィグル人にとってはチベット文字よりソグド文字・ウィグル文字（元来はソグド文字）・ルーン文字（チュルク＝ルーン文字，いわゆる突厥文字，かつての東ウィグル可汗国時代に頻用）・ブラーフミー文字（トカラ人より習得）の方がはるかに馴染みが深かったはずである。にもかかわらず敢えてチベット文字を使用したのには，それなりの理由がなければならない。そこで習い手とこれらの文字との関係を考えてみよう。

当時敦煌と密接な関係にあったチュルク人，すなわち地域をやや広くみて河西回廊全域から西域南道（とくにタリム盆地東南辺）一帯にいたチュルク人の多くは，もともとは東ウィグル可汗国の構成員であり，9世紀中葉の同可汗国の瓦壊後に漠北より移動してきた者たちである。彼らが既に漠北時代からルーン文字を知っていたことは疑いないが，移動後もルーン文字を使用することはままあった。敦煌やミーラーン Mīrān から出土したルーン文字文書[56]がこれを証明している。しかし如何せんルーン文字は音節文字の系列に属し，且つ一字一音ではなかったので，チュルク語を写すに適しているとはいいがたく，もっと便利な他の文字に取って替わられる運命にあった。またブラーフミー文字は彼らにとって全く縁遠い

52）この関係文献目録は厖大なので，もっとも参照に便利なものを一つだけ掲げる：梅村　1980。ただし梅村氏はコータン人を挙げていない。しかし敦煌にコータン人が居住していたことは，敦煌出土のコータン文・漢文・チベット文の諸文書が示しており，周知の事実である。

53）cf. 藤枝　1941－1943（二），pp. 47－50；蘇&蕭　1981, pp. 338－339.

54）cf. 森安　1980 a, pp. 309－330.

55）cf. Bailey　1968, pp. 61－67, 107－114；Hamilton　1977a, pp. 361－364, 370－375；Hamilton 1977b, pp. 516－517；森安　1980 a, pp. 303－304, 327, 335－336.

56）Thomsen　1912；Hamilton　1975；Hamilton & Bazin　1972；Bazin　1974, pp. 292－296 &c. ただしこれらのルーン文字文書を8世紀ないし9世紀前半のものとみなすトムセン説（Thomsen 1912, pp. 185, 195－196）には何の根拠もない。ハミルトン・バザン両氏の10世紀前後とする考えの方が正しい。

存在である。では彼らとウィグル文字及びそれに先行するソグド文字との関係はどうか。

そもそも古代チュルク族の間でいわゆるウィグル文字が使われ出したのはいつの頃からか。ウィグル文字がウィグル人（狭義の回鶻人）の発明にかかるものでもなければ，ウィグル人が最初に使い始めたものでもないことは，いまさら喋々するまでもない。突厥第一可汗国時代以来，内陸アジアのチュルク族世界には沢山のソグド人が商人・使節・政治顧問・職人などとして入り込み，ソグド字・ソグド語はチュルク世界にも広く通用するようになった[57]。しかしソグド人とチュルク人との接触が密になればなる程，いずれの側にもチュルク語を書きとる必要が出てきたであろう。当時チュルク人はまだ固有の文字を持っていないのであるから，その際使用（借用）される文字はソグド字以外にありえない[58]。ここに新ソグド文字（いわゆるウィグル文字）の芽生える土壌は醸成される。突厥第一可汗国が東西に分裂し，そして衰退した後，西突厥の後継者として勢力を盛り返した突騎施（チュルギツシュ）でも，そのコインの銘文から証明される通り，ソグド文字・ソグド語は公用されていた[59]。しかしこの突騎施やそれと同時代の突厥第二可汗国，ないし晩くとも次のカルルクや東ウィグル可汗国の時代までには，チュルク語を書写したいわゆるウィグル文字(新ソグド文字，ソグド＝ウィグル文字)[60]は既に成立していたようである。なぜなら，その出土状況，碑文の内容などからみて8世紀（もしくはそれ以前）のものとみられる西モンゴリア発見，古代チュルク語のウランゴム（カラ＝ウス）碑文[61]に使われている文字は，語頭のｓの形，語頭や語中におけるｍの形，

57）とくに突厥第一可汗国ではソグド語は公用語の位置さえ占めるに至った。cf. Bazin 1975, pp. 39－41；護 1976a, p. 24；護 1976b, pp. 214－217.

58）その極めて早い時期の例として，トゥルファン盆地の5世紀の墓から出土した木牌を挙げてもよかろう。木牌の一つには，表に漢字で「代人」，裏にソグド文字で‘kiši’（チュルク語で「人」または「妻」の意）と朱書されていた。また別の木牌にはソグド文字で‘tairin’（Chin. 代人）と書かれていたという。これらはトゥルファン盆地における漢人・ソグド人・チュルク人の接触を物語る絶好の史料となる。チュルク語で‘kiši’と書かれた方の木牌は5世紀末のものらしいから，これにかかわるチュルク人とはおそらく高車族のことであろう。cf. 庫尔班・外力 1981, pp. 63－64；池田 1982, p. 83.

59）ラドロフ・羽田氏等はコイン銘文をウィグル文字・チュルク語とみなしたが，これはソグド文字・ソグド語とするスミルノヴァ・護氏等の考えの方が正しい。従って，羽田氏がラドロフの考えを受け，この突騎施のコインを根拠に，「所謂回鶻文字は回鶻人の始めて用いたものでなく，彼等より以前既に突騎施が之を用いたものである」というのは，推論の仕方としては正しくない。しかし，突騎施時代のソグド文字が，ラドロフや羽田氏が間違うほどウィグル文字に近づいていたことは注意すべきである。cf. 羽田 1958a, pp. 24－30；羽田 1958e, pp. 501, 508；護 1975, p. 323；護 1976b, p. 196；梅村 1983, pp. 145－146.

60）ソグド文字草書体とウィグル文字との外見上の区別は，むずかしいというよりむしろ不可能という方が真実に近い。最も一般的な判断の規準としては，ソグド語を写しているものはソグド文字，チュルク＝ウィグル語を写しているものはウィグル文字ということになろう。しかしソグド語が書かれているのではあるが，明らかにウィグル文字という方が良いような場合もある。元来ソグド文字草書体から派生したウィグル文字であるが，時代が進むと（とくに西ウィグル王国時代になると），逆にソグド文字の方がウィグル文字の影響を受けてウィグル文字化し，両者は益々区別しにくくなっていったと思われる。それゆえソグド語もウィグル語も両方写すものとして「新ソグド文字」あるいは「ソグド＝ウィグル文字」の呼称の方が「ウィグル文字」より適している。この方が文字の発生・発達を考えても理にかなっている。ただ学界も含めて広くウィグル文字の呼称が流布してしまっているので，私もこれに従う。cf. 羽田 1958a, p. 32；Clauson 1962, pp. 100－101.

lを明示するためrに付加されたフックの存在とその形，さらに全体的な印象からして，ウィグル文字といっても決しておかしくないからである（ただしd字はソグド文字に近い）。また前註59に指摘したように，突騎施コインのソグド文字は限りなくウィグル文字に近いものであった。正(まさ)しく古くはピグレフスキー氏が，また新しくはシムス＝ウィリアムス氏が指摘したように[62]，ウィグル文字は決してソグド文字をもとに一時に「発明」[63]されたり，上から「制定」されたりしたものではなく，ソグド人とチュルク人との不断の接触の中でチュルク語を写すためにソグド文字が「自然発生的」に使われた結果なのである。そしてその結果は，先ずかつての西突厥の勢力範囲であり且つソグド人の人口密度の高かったセミレチエや天山地方を中心に，そして次第に東方へとチュルク語を書写するために普及していったものと思われる。しかしながら，東突厥を再興した突厥第二可汗国（682－744年）では，反ソグド・反中国の民族主義が台頭したため[64]，ソグド文字を模範としながらもこれを大きく変えた新しい国字たるチュルク＝ルーン文字を創作・制定した[65]。突厥第二可汗国に替わった東ウィグル可汗国（744－840年）でもこれを踏襲し，公式の重要な碑文（シネ＝ウス碑文，タリアト碑文，カラ＝バルガッスン碑文など）のチュルク語はすべてルーン文字で記された。しかしこの東ウィグル時代には再びソグド人の活動が活発となり，とくにウィグル人がソグド人を介してマニ教に改宗してからは一層めざましく，その活躍の場は政治・経済（とくに絹貿易の仲介）・宗教（マニ教）・文化など広い範囲に及んだ。当然ソグド人とウィグル人との接触・交渉・通信の手段として，あるいはまたマニ教の経典用としてソグド＝ウィグル文字はかなり日常的に使用されていたであろう。

以上，ウィグル文字使用の始まりと普及に関する私の考えの概略を述べたが，ここでとくに問題としたいのは，ウィグル（国の構成員）は西遷以前に既にウィグル文字を知っていたという点である[66]。とすれば，10世紀前後に河西回廊～西域南道一帯にいたチュルク諸族も必然的にウィグル文字を知っていたことになる。

このように考えてくると，P.t.1292 に説かれた教理問答の教え手たる西ウィグル人が敦煌を中心とする河西～南道一帯にいたチュルク人に教えるのに，ルーン文字やブラーフミー

61）Rinčen 1959, p. 290 & pl. I；Щербак 1961；Кляшторный 1961；Кляшторный 1963；Гумилев 1963；卡哈尔・巴拉提 1982。

62）Pigoulewsky 1938, pp. 40－41；Sims-Williams 1981, p. 359.

63）cf. Clauson 1962, pp. 106－107；Clauson 1963, pp. 140－142. ただしここに示されたクローソンのウィグル文字の起源についての考え方は我々にも大いに参考になったものであり，忘れるべきではない。

64）Bazin 1975, pp. 38－39；護 1976a, pp. 1－9, 20, 27－28；護 1976b, pp. 242－253.

65）Bazin 1975, p. 43；護 1976a, pp. 27－28；護 1976b, pp. 234－241；護 1978, pp. 11－12. ただし護氏自身はルーン文字成立が突厥第二可汗国以前である可能性を否定していない。

66）この考えは羽田亨氏の有名な論文の主旨（羽田 1958a, pp. 4－14, 32）に真っ向から反対するものであるから，当然もっと詳しい説明をすべきところであるが，それは他の機会に譲る。ただし口頭発表は，1977年11月に早稲田大学で開かれた内陸アジア史学会で既に行なっている。

文字は使えないとしても，ウィグル文字（ソグド文字はもう問題にしなくてよかろう）は十分に使える状況にあったことになる。即ち習い手の側にウィグル文字を拒否する理由は見当たらないのである。にもかかわらず，教え手の西ウィグル人たちにはまだ不慣れで，且つまたウィグル語を写すにはウィグル文字よりずっと不向きなチベット文字を使用したのは，習い手の側にウィグル文字よりもチベット文字をよしとする積極的理由があり，教え手がそれを配慮したからではなかろうか。実際，当時の河西～南道一帯では，ウライ氏が明らかにしたように，チベット語が国際語として使われていた[67]。これは8世紀末から9世紀中葉に及んだこの地域の吐蕃支配の名残りである。またチベット文字は漢字に比べて極めて簡単なため，吐蕃の支配を蒙った河西～西域南道では漢語を話す漢人の間にさえ普及し，漢文の仏典や文学，さらには掛算の九九などまでチベット文字で音写することが広く行なわれた[68]。それゆえ9世紀後半以降この地域に集団として住みつくようになったチュルク人は，他の先住諸民族と交渉を持つ中で，自然にチベット語・チベット文字に親しむようになっていたに違いない[69]。遺憾ながらこのことはウィグル文字を排除する積極的理由とはなりえないが，少なくともここにチベット字使用の理由の一端を認めても，それほど不当ではなかろう。

しかし，実は，P.t.1292 と同じようなチベット文字表記のウィグル語仏教文書が，西ウィグル王国の仏教の一大中心地であったトゥルファン地方からもいくつか発見されているのである[70]。もちろん，同じようとはいっても，その表記のシステムは P.t.1292 よりもトゥ

67）Thomas & Konow 1929, pp. 123－130；Uray 1981.

68）その実例は高田時雄氏がパリの Ecoles des Hautes Etudes en Sciences Sociales に提出した第三コース博士論文 *Documents chinois en écriture tibétaine découverts à Dunhuang pour servir de matériaux à l'histoire phonétique du chinois*, (Paris 1979, 313p.) に詳しいが，これは未公刊なので，ここに主なもののタイトルを列挙する。

千字文（P.t.1046＝P.c.3419），天地八陽神呪経（P.t.1258），南天竺国菩提達磨禅師観門（P.t.1228），道安法師念仏讃（P.t.1253），般若波羅蜜多心経（P.t.448），法華経普門品（P.t.1239），金剛経（India Office Library, C129），大乗中宗見解（IOL., C130），阿弥陀経（IOL., C130）

このうちのいくつかについては既にテキストが公刊されている。cf. 羽田 1958d；Thomas & Clauson 1926；Thomas & Clauson 1927；Thomas & Miyamoto & Clauson 1929；宮本 1929。さらに高田氏は博士論文に含めなかった文学や俗文書の実例を別に公刊している。cf. 高田 1981；高田 1983。

以上のような漢文のチベット文字音写本（「千字文」のような音註本も含む）の使用について，従来はチベット人の方にウェイトを置いて考える傾向が強かったが，高田氏はむしろ漢人の為のものとみなすべきであるとしている（cf.羽田 1958d, p. 398；藤枝 1961, pp. 259－263；梅村 1980, pp. 207－208；高田 1981, n. 1 & n. 8；高田 1983）。私も高田氏の意見に賛成である。吐蕃支配期以後の852年にさえ，漢人が自分の名をチベット文字で記した印鑑を使用していたという事実を，この際再認識していただきたい（cf. 森安 1980 b, p. 64）。

69）一例として，cf. 森安 1980b, pp. 65－66.

70）Gabain 1950, p. 19；Ligeti 1961, pp. 210－212；Clauson 1962, pp. 96－100；Gabain 1964b, p. 187. この外にもフランケは "einen alttürkischen Text in tibetischer Schrift (T. II T. 17 Tuyoq)" のあることを紹介しているが，その内容には言及していない。ただしその文書のもう一方の面（おそらく表（おもて））は漢文の法華経だというから，これも多分仏教関係のものだろう。ところでフランケはこの文書を8世紀のものとみているが，その根拠は，①逆向きのキク（i 音記号）の存

ルファン出土のものの方が進んでいるから[71]，両者を全く同列に論ずるわけにはいかない。それでも，西ウィグル本国でチベット文字表記が使用されたことがあるという事実は，P.t. 1292 の性格を探ろうとする我々に大きな発想の転換を要求する。すなわち，これまで主として習い手側の事情の中にチベット文字使用を最良とする理由を見つけ出そうとしてきたが，実は教え手たる西ウィグル国人自身の側に，チベット文字を使用する積極的理由があったのではないか。

5. 仏教聖典文字としてのチベット文字

現在までに知られている中央アジア～河西出土のイスラム化以前の古代チュルク語文献に使用された文字は，ルーン文字・ソグド文字・マニ文字・シリア文字（とくにネストル体ないしエストランゲロ体）・ウィグル文字（新ソグド文字，ソグド＝ウィグル文字）・チベット文字・ブラーフミー文字・漢字・モンゴル文字など多種多様にわたる。このうちルーン文字は8－9世紀前半が最盛期で，10世紀には廃れる傾向にあり，モンゴル文字は13世紀以降に限定される。また漢字は人名や称号を表わした特殊な例が知られるのみである[72]。そこでその他の文字資料をみてみると，ウィグル文字は官文書・暦・医書・占い・文学・俗文書・マニ教文書・仏教文書・キリスト教文書など，ありとあらゆる方面に使われている。一方，マニ文字はマニ教文書のみ，シリア文字はキリスト教文書のみ，ソグド文字とチベット文字は仏教文書のみ，そしてブラーフミー文字は主として仏教文書に使われる[73]。マニ教と仏教と

在，②分綴記号が点一つではなく，コロンのような二点であること，③r字の字形，の三つだけである。しかしこれらの特徴は，モンゴル時代にまで下げることは出来ないが，少なくとも10世紀までは降り得るものである。歴史的にみても，8世紀のトゥルファン地方に於てチベット文字でチュルク語が書かれるような情勢が生まれていたとは思えない。従来多くの学者に信じられていた，8世紀末～9世紀中葉にトゥルファン地方は吐蕃（チベット）の支配下にあったという説は，既に筆者によって論破されている。因みに言う。チュルク語にチベット語からの借用語が入るのも，チュルク仏教にチベット仏教の影響が現われるのも，ともに後代のモンゴル期になってからのことであり，10世紀以前にはそのような形跡は全くみられない。レニングラード版のウィグル文『金光明経』第一巻にチベット語から翻訳されたというコロフォンをもつ「四天王讃」は，決してシンコ＝シェリ都統（10世紀末～11世紀初頭に活躍。本稿第8節参照）自身の訳ではなく，後世（おそらく元代）の付加である。cf. Francke 1924, pp. 5－6；森安 1979；森安 1977, pp. 116－120；Moriyasu 1981；Gabain 1970, p. 119；Hamilton, compte-rendu de *BTT* VII, *Turcica* IX/2-X, 1978, p. 248；庄垣内 1980b, pp. 261－262, 274；護 1962, pp. 67－70；Tekin 1971, p. 13.

71) P.t. 1292 では前舌母音であることを明示するために付される y(Y)（ヨグド）字はほとんどの場合第一音節にしか現われないのに対し，トゥルファン文書では第二音節以下にも繰り返し現われ，正確を期している。また子音に関しても，P.t. 1292 では前舌系の k/g (K) と後舌系の q/γ (X) とを区別していないが，トゥルファン文書では後舌系の q/γ を表わすために r 字を付して区別しているのが目立つ。明らかにトゥルファン文書の方が，後のパスパ文字にみられる「一字一音・一音一字」主義の原則に近付いている（即ち進歩している）。cf. Ligeti 1961, pp. 210－211；Clauson 1962, pp. 97－100；Clauson 1959, p. 301. ただし長母音の表示はトゥルファン文書にはないらしいので，この点は P.t. 1292 の方が優っている。

72) Franke 1978；Gabain 1976b.

73) cf. Gabain 1961, pp. 65－68（ガバイン 1970, pp. 36－37）；Gabain 1964a, pp. 3－5；Gabain 1964b, pp. 179－187；Gabain 1973b, pp. 167－168；Gabain 1974b, p. 33；Gabain 1976a,

キリスト教といえば，イスラム化以前のアジアのチュルク族の間に流布した創唱宗教の全てである。そこで今度は，これら三宗教の側から考えると，マニ教徒は他と共通のウィグル文字の外に独自の聖典文字[74]としてマニ文字を持ち，キリスト教徒は他と共通のウィグル文字の外に独自の聖典文字としてシリア文字を有していた。これに対して仏教徒には，他と共通のウィグル文字の外，ソグド文字・チベット文字・ブラーフミー文字の三つがあったことになる。これらの三つを，マニ教徒のマニ文字，キリスト教徒のシリア文字との単純な比較からいきなり仏教聖典文字であったと断定するのは，あまりに忽卒との譏りを免れまい。とくにソグド文字は本来ウィグル文字の基礎になったものだし，またこれまで発見された僅かのソグド文字チュルク語文書こそ仏教関係のものばかりであったが，ソグド文字ソグド語文書となれば仏教のものだけでなくマニ教のものもキリスト教のものもあるのである[75]。因みにマニ文字の場合は，チュルク語はもちろんソグド語・パルチア語・中期ペルシア語・クチャ（トカラB）語の文書すべてマニ教関係のものばかりであるし[76]，シリア文字の場合も，チュルク語・ソグド語・シリア語のいずれをとってもやはりキリスト教徒の文書ばかりである[77]。それゆえソグド文字を仏教専門の聖典文字に選んだとはちょっと考えられない[78]。残るはチベット文字とブラーフミー文字の二つであるが，私はこの両者とも仏教聖典文字としての扱いを受けたとみて差し支えないと思う。

ブラーフミー文字は東部天山地方ではトカラ人が使用していた文字であり，上述したようにチュルク人はこのトカラ人から仏教の多くを学んだのであるから，チュルク人とブラーフミー文字との関わりは遅くとも8世紀，ウィグル人とそれとの関わりも少なくとも9世紀までは溯るであろう。それゆえこの時代に属するブラーフミー文字チュルク語文書があっても不思議ではない。しかし今日まで残されたブラーフミー文字チュルク語文書（TTT. VIII＝Gabain 1954b 収録の15点と他1点）[79]の大部分は，これよりずっと時代が下るとみるの

---

p. 69 ; Clauson 1962, pp. 67－119 ; Clauson 1963, pp. 140－142.

74) 本稿ではこの用語を広義に解していただきたい。即ちある特定の教徒だけが使い，他の教徒は使わない文字というほどの意味で，狭義の経典専用の意ではない。少しニュアンスは違うが，クローソンの 'a missionary alphabet' (Clauson 1962, p. 106) という用語と意図する所はほとんど同じである。

75) cf. Dresden 1983 ; 熊本 1984, pp. 50－56; etc.

76) cf. Le Coq 1912－1922 ; Bang & Gabain 1930a ; Zieme 1975 ; Boyce 1960 ; Gabain & Winter 1958 ; 熊本 1984, pp. 67－69 ; etc.

77) cf. Zieme 1974 ; Müller 1913 ; Müller & Lentz 1934 ; Sundermann 1974－1981 ; 熊本 1984, p. 53 ; Sachau 1905 ; Müller 1904, p. 107 ; etc.

78) ガバイン女史の報告によれば，ソグド文字チュルク語仏典には 'anïγ'「悪い」が使われている (Gabain 1976a, pp. 73, 76)。現在の研究段階では，チュルク語仏典のうちウィグル文字で書かれたものの大部分とブラーフミー文字で書かれたもののすべては 'ayïγ' を使っており，'anïγ' を使うのは少数の比較的早い時期の成立（翻訳）と目されるウィグル文字仏典にほぼ限られるといわれているから，このソグド文字チュルク語仏典も時代的に古いものだろう。因みに我々のテキストでは "a-yag (*l.* 28) である。

79) Gabain 1954b, **A～I, K～P** ; Maue & Röhrborn 1976.

が，現在の学界の主流である。すなわち TTT. VIII に収録された15点をガバイン女史は字体と紙質によって分類し，**E**だけは9世紀ころのもので，あとはみな11－13世紀ころのものとみなし，バザン氏は**L**と**P**の内容（暦）を詳細に検討してこれら二つを13世紀のもの（**P**は具体的に1277－1278年）と決定した[80]。一方，言語学的立場から8－14世紀の古代チュルク語文献をⅠ－Ⅳのグループに編年したエルダル氏は，**A**～**H**, **K**, **N** を第Ⅲグループに，そして **I**, **L**, **M** を第Ⅳグループ（ほぼ元代に相当）に入れている[81]。またハミルトン氏も15点全部を13世紀前後のものとみているようである[82]。

このトゥルファン出土のブラーフミー文字チュルク語文書（以後は単に Tur. Br. と略称）の表記法の特徴は次の通りである[83]。

Tur. Br.

①前舌母音は後舌母音にｙ字を付加することによって示される。

②そしてその表示は全音節に及ぶ。

③広いｅ（即ちä）と狭いｅ（即ちé）の区別がある。

④ｉとïの区別はない。

⑤長母音の表記がある。

⑥ｋとｇは区別され，ｑとγも区別される。

⑦ｋとｑは区別され，ｇとγは区別されない。（ただし①②の特徴があるゆえに，単語の中ではｇとγはすぐに区別できる。）

これに対し，もっと以前から存在し，Tur. Br. の構造上の模範となったと思われるウィグル文字チュルク語（Uig. と略称）の表記法の特徴は以下の通り。

Uig.

①前舌母音は後舌母音にｙ字を付加することによって示される。

②ただしその表示は第一音節に限られる。

③広いｅと狭いｅの区別はない。狭いｅ（即ちé)はしばしばｉで写される。

④ｉとïの区別はない。

⑤長母音の表記はない。

⑥ｋとｇは区別されず，ｑとγも区別されない。

⑦ｋとｑは区別され，ｇとγも区別される。

一方，すでにみたように，我々の P. t. 1292 は10世紀前後のものであった。また，前註71

80) Gabain 1964a, p. 5; Bazin 1974, pp. 444－472.

81) Erdal 1979, pp. 171, 174.

82) Hamilton, compte-rendu de K. Röhrborn, *Uigurisches Wörterbuch 1*, *Turcica* IX/2-X, 1978, p. 249.

83) cf. Clauson 1962, pp. 93－96; Gabain 1964a, pp. 7－10; Gabain 1964b, pp. 186－187; Gabain 1974b, pp. 34－39.

でも述べたが，下の箇条書きを比較すれば一層はっきりするように，トゥルファン出土のチベット文字チュルク語文書（Tur. Tib. と略称）の表記法の方が P. t. 1292 よりも進歩しており，Tur. Br. の表記法にほぼ近づいている。今，上と同じように，P. t. 1292 と Tur. Tib. の表記法の特徴を列記する[84]。

P. t. 1292

①前舌母音は後舌母音に y 字を付加することによって示される。

②ただしその表示は，例外を除けば，第一音節にほぼ限られる。

③広い e と狭い e を区別しようという意図がみられる。

④ i と ï の区別少しあり。

⑤長母音の表記あり。

⑥ k と g は区別されず，q と γ も区別されない。

⑦ k と q は区別されず，g と γ も区別されない。

Tur. Tib.

①前舌母音は後舌母音に y 字を付加することによって示される。

②その表示は，まだ不完全とはいえ，第二音節以下に及ぶ。

③広い e と狭い e を区別しようという意図がみられる。

④ i と ï の区別かなりあり。

⑤長母音の表記少しあり。

⑥ k と g は区別されず，q と γ も区別されない。

⑦ k と q は区別され，g と γ も区別される。

クローソンは何の疑いもなく Tur. Tib. の表記法は Tur. Br. を基として作られたと言っているが[85]，それはいささか早計であろう。なぜなら，やはり Tur. Br. の表記法に基づいて出来たとペリオが看破した[86]パスパ文字の「一字一音・一音一字」主義[87]を理想形として考えると，なるほど Tur. Tib. は④においては Tur. Br. より進歩しているが，あとの②③⑤⑥では逆に劣っているからである。Tur. Tib. の資料は僅かしか発表されていないためこれ以上検討の仕様がないが，Tur. Tib. に直接先行すると思われる P. t. 1292 を持ち出せば，これらチベット字表記法と Tur. Br. の表記法との先後関係は一層はっきりする。Tur. Br. の表記法は Uig. のそれを模範にしたとアプリオリに考えられてきたが，私のみるところでは，むしろ P. t. 1292 の方こそが Uig. の表記法に直接基づいているのではないか。というのは，P. t. 1292 の①②は明らかに Uig. の①②にじかにつながるものであるし，ま

84) ただし Tur. Tib. の資料はクローソンとリゲティが発表した僅かの例しかない。Clauson 1962, pp. 97−100 ; Ligeti 1961, pp. 210−212.

85) Clauson 1962, p. 92.

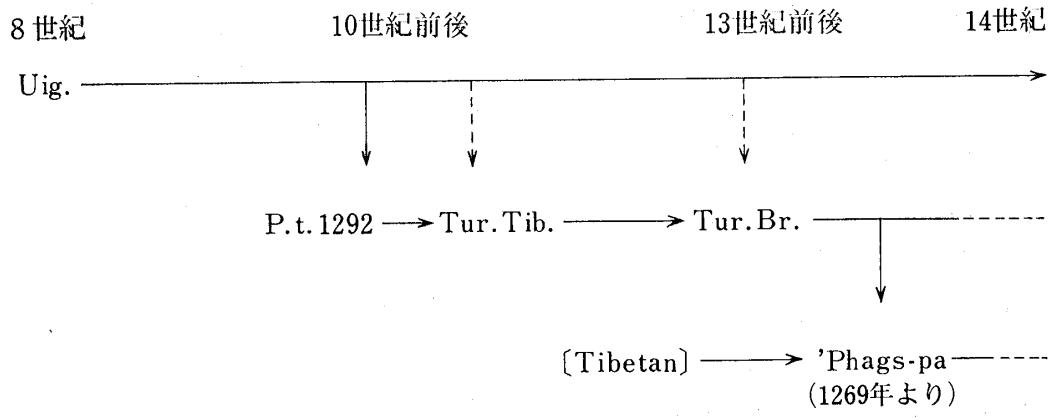
86) Pelliot 1913, p. 453 ; Pelliot 1921 ; Pelliot 1927.

87) Clauson 1959, p. 301.

た前舌語 könül (KWYNKWL)・üküš ('WYKWŠ)・yüz (YYWZ) を Uig. ではしばしば y(Y) を落として kǫnul (KWNKWL)・u̧küš ('WKWŠ)・yu̧z (YWZ) と書くが，それと同じ表記法が P.t.1292 でもとられているからである(cf. *ll.* 8, 13, 28, 30, 34, 38, 39, 40 の go-ngol, gong-ngol; *l.* 3 の "u-kus; *l.* 33 の yus)。因みにこれらの語は Tur. Br. では正確に kyo-ngyo-l°, kyo-ngyu-l̲, kyu-ngyu-l° (以上については cf. TTT. VIII, **A**28, 33, **B**15, **E**47, **K**11, **N**6), uyu-kyu-ṣ, uyu-kyu-ś°, °yu-kyu-ś° (以上については cf. TTT. VIII, **A**18, 29, **G**6, **L**35), yyu-z, yyu-z° (以上については cf. TTT. VIII, **G**69, **H**7) と書かれ，前舌母音表示のための y 字が落ちることは決してない。

以上縷説して来た所を総合すると，我々の P.t.1292 文書は次のような位置にあるとまず推定される。これを〔推定A〕とする。

〔推定A〕



もしこれが正しいとするならば，我々は Tur. Tib. を，西ウィグル王国時代になって飛躍的に増大したウィグル人仏教徒が，マニ教徒のマニ文字，キリスト教徒のシリア文字に対抗する聖典文字としてチベット文字を採用しようと試みた結果であると考えてよかろう*)。10世紀前後は西ウィグル王国が河西とくに敦煌と密接な関係をもった時代であり[88]，そこに普及していたチベット文字と接触する機会はいくらでもあった。おまけにチベット文字はごく単純な表音文字であったため，ウィグル人は容易にこれを習得することが出来たにちがいない[89]。

しかしながら，すでに第3節で述べたように，ウィグル仏教の成立に最も大きな影響を与えたのはトカラ仏教であった。当然トカラ人たちがウィグル仏教徒の師となったのである[90]。このうちトカラ人仏僧たちはトカラ語よりもむしろ仏典原語たるインド（サンスクリット）

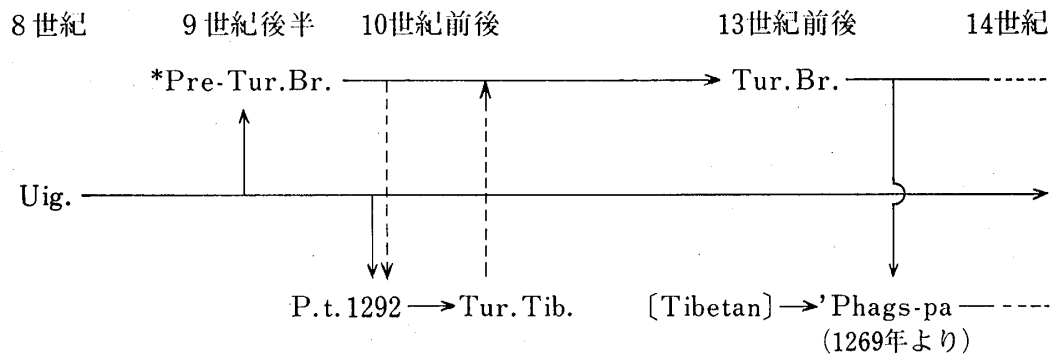
88) cf. 本稿 p.36; 森安 1980 a.　　*) cf. 本稿 p.43.

89) 先に（本稿 p.41）チベット文字はウィグル語を写すに不向きであるといい，ここではチベット文字はウィグル人にとっても易しいといっているが，この両者は全然矛盾しないことを老婆心ながら注記しておく。

90) cf. Gabain 1964a, pp. 6, 11; Moerloose 1980, p. 75; Gabain 1983, p. 185.

語で仏教を学習し研究に励んでいたのである。一方，トカラ人の一般仏教徒は主にトカラ語の仏典を読唱していた。そしてこれらトカラ人たちの使うトカラ・インド(サンスクリット)両語を写していたのが他ならぬブラーフミー文字である[91]。だとすると，西ウィグル王国の仏教徒たちが，マニ教徒やキリスト教徒に対抗して新たに採用する聖典文字がブラーフミー文字でないというのは奇妙である。そこで，現在残されている Tur. Br. の表記法ほど整ってはいないが，それに先行するまだ不完全な表記法のブラーフミー文字チュルク語文書（これを *Pre-Tur. Br. と呼ぶ）があったに相違ないと仮定する。もしこの仮定が正しいとすると，これまでの学者が歴史学的見地からアプリオリに考えてきたように，やはり *Pre-Tur. Br. の方が Tur. Tib.（そして P.t.1292）より早く成立したとみなすべきであろう。そこで先の〔推定A〕を次のように修正する。

〔推定B〕



結局私は，西ウィグル仏教徒のもとではチベット文字もブラーフミー文字も等しく仏教聖典文字としての地位を与えられた，と考える。すなわち Tur. Tib. のみならず Tur. Br. も（もちろん *Pre-Tur. Br. も）ウィグル人仏教徒の手に成るものと考えるわけである。この点，Tur. Br. の書き手（作成者）をトカラ人としたガバイン女史の考え[92]と私の考えは全く異なる。チベット文字とブラーフミー文字はおそらく10世紀前後の時代には仏教聖典文字として一種の競合関係にあったが，チベット文字表記法は完成の域に達する前に放棄され，最終的にはブラーフミー文字だけが生き残ることになった。その理由としては次のようなことが考えられる。まず，11世紀前半における西夏及びカラハン朝の台頭によって，西ウィグル王国と河西～西域南道（チベット語が国際語として使われていた地帯）との結び付きが弱

91) トカラ人がブラーフミー文字を使い，仏僧の多くがトカラ語・インド（サンスクリット）語双方の読み書きに通暁していたことは玄奘が伝える（『大唐西域記』巻一，阿耆尼国条および屈支国条；Beal 1884, Part I, pp.18－19；水谷 1971, pp.12－13）だけでなく，これら両語の仏典の出土状況と，出土仏典の内容的および外形的（とくに字体の）研究により明らかである。この点に関しても参考文献は極めて多いので，今は二つだけを挙げるにとどめる。cf. Thomas 1954, pp.681－691（とくに p.686）；井ノ口 1975（とくに pp.207, 254－255）。

92) Gabain 1964a, p.11；Gabain 1974a, p.246. ただし同女史もはじめは Tur. Br. の書き手をウィグル人と考えていた（Gabain 1961, p.68＝ガバイン 1970, p.37）。

まり，チベット文字の地位が相対的に低下したこと。他方，ブラーフミー文字の方は，ウィグル仏教のレベル＝アップに伴ない原典のインド（サンスクリット）語仏典の重要度が増したことによって，その「神聖さ」・「ありがたみ」が急激に高まった。また文字の構造上からみても，なるほどウィグル語を写すにはブラーフミー文字もチベット文字もドングリの背くらべであるが，頻繁に引用したり学習する必要の出てきたインド（サンスクリット）語を写すには，いうまでもなくブラーフミー文字の方がはるかに優れていた。またもう一つの消極的な理由としては，ウィグル仏教が遂にモンゴル時代に至るまでチベット仏教となんらの深いかかわりを持つことなく済んだということが挙げられる[93]。

6. P. t. 1292 文書の性格

さて前節で私はチベット文字がウィグル仏教徒の間で聖典文字として使われた（少なくとも使おうと試みられた）という仮説を提出した。しかしだからといって，何もそれで P. t. 1292 のチベット字使用の意味が完全に解釈できたとは思っていない。むしろ私は P. t. 1292 のチベット文字表記は，その不完全さや，同じ単語でも別様に写すという不安定さのゆえに，聖典文字としてある程度の体系付けをされる以前の段階にあるものと考えている。さらに我々のテキストは余りに口語的要素が強い。今それらのことを示すいくつかの例を挙げよう。

Ⅰ．同じ単語が別様に書かれた例：

1. ″LMYR＝″a-lyim-mir (*l.* 8), ″al-mir (*l.* 13), ″a-lim-mir (*l.* 38)
2. ″LTY＝″al-ti (*ll.* 9, 15, 17), ″al-lti (*ll.* 36, 37, 38, 40)
3. ″NT′X＝″an-tag (*ll.* 11, 19, 24), ″an-dag (*ll.* 21, 36), ″an-′dag (*ll.* 12, 13, 30, 34)
4. ″RYX＝″a-reg (*l.* 2), ″a-rag (*l.* 14)
5. ′MK′K＝″am-′ngag (*l.* 3), ″e-mngag (*l.* 33)
6. ′NK＝″eng (*l.* 4), ″yang (*ll.* 5, 11, 15, 18)
7. ′R-＝″a-r°- (*ll.* 5, 6, 17), ′ar- (*ll.* 24, 31), ″er- (*l.* 33), ″ar- (*l.* 36)
8. ′WL＝″ol (*ll.* 13, 14, 30, 33), ′ol (*ll.* 7, 11, 12, 19, 21, 24, 30, 34, 36)
9. ′WYC＝″yus (*ll.* 10, 13), ″us (*ll.* 27, 41)
10. ′WYPK′＝″yob-ka (*ll.* 8, 13, 28), ″ob-ka (*l.* 30)
11. ′WYTRW＝″yo-trō (*l.* 9), ″yod-tro (*l.* 28), ″od-tro (*l.* 30)
12. ′YLKY＝yil-ki (*l.* 5), yil-ke (*ll.* 11, 15), yyil-ki (*l.* 4)
13. DYND′R＝dyan-dar (*l.* 26), dyen-′da′-r° (*l.* 29), ′dyan-dar (*l.* 30)
14. KWYNKWL＝go-ngol (*ll.* 8, 28, 30, 38, 39, 40), gong-ngol (*ll.* 13, 34)
15. PW＝′bo′ (*ll.* 2, 5, 6, 31, 34), ′bo (*ll.* 14, 17, 18, 40), bō (*ll.* 19, 21)

93) cf. 前註70。

16. PWRX'N＝pu-han (*ll.* 18, 24), pur-kān (*ll.* 1, 23), pur-han (*ll.* 24, 26, 32), pūr-han (*l.* 33), būr-han (*l.* 18)
17. PYŠ＝bēs (*ll.* 3, 5, 31), 'bes (*l.* 6), 'bēs (*ll.* 7, 35)
18. TNKRY＝dang-ri (*l.* 5), dyeng-ri (*l.* 22)
19. TWYRLWK＝dur-lyug (*l.* 3), dur-lug (*ll.* 35, 37), dyor-lug (*ll.* 10, 19)
20. 以上の外，長母音表示の有無だけの相違の例ならいくつもみられる。

Ⅱ．微弱な発音の文字が欠落した例：

1. "LTYN*C*＝"al-tin (*l.* 17), "al-ltin (*l.* 36)
2. 'RX'N*T*＝"ar-hrīn (*l.* 2)
3. 'R*K*LYK＝"er-rlig (*ll.* 34, 41)
4. 'RW*R*＝"a-ru (*ll.* 5, 6, 17)
5. 'WYCWN*C*＝"yus-cun (*ll.* 4, 6, 8, 11, 16)
6. 'WYCW*N*C＝"yus-cus (*l.* 27)
7. 'YKY*N*TY＝"i-ki-ti (*l.* 4)
8. KWY*β*'N*C*＝gu-ban (*l.* 39)
9. PYŠYN*C*＝'bes-shin (*l.* 6), bēs-shin (*l.* 34)
10. S'XYN*C*＝za-kin (*ll.* 17, 34, 43)
11. T'R*S*＝tyer (*l.* 14), tyar (*l.* 40)
12. TWYR*T*＝dyor (*ll.* 2, 3, 5, 10, 12, 35)
13. TWYRTWN*C*＝dyor-tun (*ll.* 6, 16, 30). cf. dyor-tun-chu (*l.* 4)
14. YWMWR*T*X'＝yu-mur-hā (*l.* 4)

Ⅲ．何らかの理由で本来不要の文字が挿入された例：

1. "TLYX＝"ad-*g*lāg (*l.* 29), "ad-*g*lyag (*l.* 32)
2. 'WLWŠ＝"u-*g*lyus (*l.* 22)
3. 'WZ'TY＝"u-*g*za'-ti (*l.* 31)
4. 'WZWN＝"u-*g*zun (*l.* 34)
5. 'ZWK＝"a-*g*zug (*l.* 12)
6. MYNK＝*d*mying (*l.* 23)
7. TWZYT＝do-*g*zhid (*l.* 14)
8. YWTWZ＝yu*l*-tus (*ll.* 11, 20)

Ⅳ．その他の例外的表記（発音をより忠実に写そうとしたものと思われる）：

1. "DYRM'Z＝"a-*dr*ir-mas (*l.* 22)
2. 'RX'NT＝"ar-*hr*ī̄n (*l.* 2)

3. 'YKYD="ye-gi*l* (*l*. 12)
4. CXŠ'PT=*chr*ig-*shr*a-bud (*l*. 10), chig-*shr*a-būd (*ll*. 14, 16, 24, 25), etc.
5. KWYCSWZ=gu*d*-sus (*ll*. 38, 39)
6. NWM=*l*ōm (*l*. 2), *l*om (*ll*. 14, 43)
7. S'KYZ=za-*kr*īs (*l*. 23)
8. X'YW 'WL=ga'-yol (*l*. 3), ga-yol (*l*. 5), gā-yol (*ll*. 15, 38)

以上の実例は，本テキストが傍にウィグル文字やブラーフミー文字などで書かれた文語のテキストを置き，それを見ながら機械的にチベット文字に転写し直したものではないことを如実に物語る。これは教え手が自分の頭の中でウィグル語の発音を諳(そら)んじながら書いた一種の口語テキストとでもいうべきものであろう。西ウィグルの仏僧にとって，内容は初歩的で文章も口語の仏教テキストを，ウィグル語を写すには不便なチベット文字を使って自分自身のために書くメリットはどこにもない。例えば説教用の覚え書なら何もチベット文字である必要はなく，ウィグル文字やブラーフミー文字を使えばよいわけであるし，口語である必要もない。なのに敢えてそれをしたのは，何らかのメリットなり考えがあったからである。P. t. 1292 という仏教入門テキストは，西ウィグル仏僧が習い手たる河西〜西域南道のチュルク人たちに読ませるために作成したものであり，それゆえに易しい口語で書いたのであろう。仏教文書であるから，本国の状況を考えれば聖典文字のブラーフミー文字で書く方がよいわけであるが，習い手たちにはブラーフミー文字は全く未知のものである。彼らの間に通用していたのは，ウィグル文字を除けばルーン文字とチベット文字の二つ[94]だけである。すでに前者は廃れる傾向にあっただけでなく，歴史的にみてもこの両者のうちではチベット文字の方がはるかに仏教文字としてふさわしいから，西ウィグル仏僧はこれを聖典文字たるブラーフミーのかわりに使ったのであろう。ただし，P. t. 1292 自体は彼が書いたオリジナルであるとは限らない。なぜなら「解題」および第1節でみたように，これは当時の敦煌地方の規格にある一枚紙に余分な空白もなく極めて整然と写され，一本斜線と二本斜線による句読点もかなり注意深く使われており，改めて清書されたものであることが歴然としているからである。P. t. 1292 は教え手が手元に置いておくためのものではなく，習い手への配布用として沢山作られた手写コピーの一つ，あるはい習い手たちによって次から次へと筆写されていく段階の一つであったと考える方が，より真実に近いのではなかろうか[95]。

P. t. 1292 と同種のものは敦煌地方で他にも作られたであろう。そしてこのような敦煌地方におけるウィグル語仏教テキストのチベット文字による表記の試みは，まもなく西ウィグル本国へも伝えられたにちがいない。それに改良を加え，原則をはっきりさせた上で，チベ

94) もちろんマニ文字も知られていた可能性があるが，ここでは問題にならない。
95) テキストの冒頭と末尾のイタリック部分は，本文書の筆記者が三帰依文さえ正しくは覚えていなかったことを如実に示している。

ット文字も西ウィグル仏教における聖典文字としてブラーフミー文字と並ぶ地位を与えられたのであろう。前節で言及した Tur. Tib. はそうした過程で作られたものと考えられる。

7.　西ウィグル仏教の小乗（とくに有部）的要素

数百年続いた西ウィグル王国で，そして最後にモンゴル帝国〜元朝治下で繁栄を誇ったウィグル仏教が，ある特定の民族や宗派の仏教を継承したのではなくして，東西諸方の様々な系統の仏教の流れを汲み，それを融合・発展させた独特のものであることは，夙に指摘され，多くの人の認めるところである。しかし一方で，例えば羽溪了諦氏のように，ウィグル仏教は漢人仏教の伝統を引く大乗教である，とする考えも根強くある。その論拠は，現在まで残るウィグル仏典の多くが漢文から翻訳（または重訳）されたものであることと，トゥルファン盆地に遺された絵画に大乗教の仏・菩薩および浄土の相が夥しく描き出されていることである[96]。確かに一面ではそれは正しい。だがウィグル仏典中にはトカラ語から訳されたことの明らかな Maitrisimit などの有部系仏典が実在するし[97]，また最近では庄垣内正弘氏によって元代のウィグル仏典中に小乗部派の系統図が発見されている[98]。他方百済康義氏はウィグル仏典の断片の中から小乗的なアビダルマに関するものを精力的に見つけ出し，「筆者は，ウィグル人たちのアビダルマ論書の翻訳・研究はけっして不活発ではなかった，という印象を持っている。」と述べるに至っている[99]。これらのアビダルマ論書の多くは西ウィグル王国後期〜元代のものである。さらに百済氏の発見になる『金花抄』という『倶舎論』の註釈書の端本中には，漢字まじりのウィグル文で次のような文句が書かれていた[100]。

"説一切有部 alqu-nï bar tip sözlädäči sarva'astivaṭ ni'kay-taqï 倶舎論 košavarti šastir 巻第三十 otuzunč tägzinč"

「説一切有部，すべてを《有る》と説くところの Sarvāstivāda-Nikāya における，倶舎論，Kośavṛti-śāstra，巻第三十，第30巻」

さらに今日では，各種阿含経の存在も顕著になりつつある[101]。

また，美術史資料に眼を転じれば，ベゼクリク窟寺群の壁画の中でも最もウィグル的とい

96）羽溪　1914, p.418；羽溪　1971, pp.660−661.

97）cf. Müller & Sieg　1916；Gabain & Scheel　1957；Gabain & Hartmann　1961；Tekin　1970；Moerloose　1979, pp.241−243；Geng　1980；Tekin　1980；馮家昇　1962；庄垣内　1980b, p.260；耿世民　1981b；李経緯　1982；斯拉菲尔・玉素甫＆多魯坤・闕白尔　1983。

98）庄垣内　1976, pp.030−032.

99）百済　1978；百済　1980a；百済　1980b；Kudara　1981；百済　1982a；百済　1982b；百済　1982c. 引用は 1980a, p.941（p.47）による。もちろんアビダルマは教学の基礎として大乗教徒もこれを学んだのであるから，アビダルマの存在すなわち小乗教というわけではない。この点は注意したい。小乗といっても有部の場合は，大乗との間にそれほど截然とした区別はなかったとみる方が妥当のようである（cf. Asmussen　1965, p.144；リトビンスキー　1972, p.1069）。

100）百済　1982b, p.989（p.53）。

101）cf. 庄垣内　1980a；庄垣内　1982；Kudara & Zieme　1983.

われる多数の誓願図[102]を，そこに付されたブラーフミー文字サンスクリット語銘文と共に研究した村上真完氏は，誓願図作成の背景には小乗系の有部の伝統があると断定したし[103]，ガバイン女史の方は，同じくベゼクリクの誓願図に現われる阿羅漢のタイプを検討して，10世紀のトゥルファン仏教では小乗より大乗的傾向が強まりつつあったことを指摘した[104]。

ベゼクリクの壁画の年代については異説が多い。例外的に古いものと，元代にまで降る新しいものを除いて，一般に「ウィグル風」といわれる中心的な壁画に限定しても，将来者のル＝コックからしてあるものは広く9－12世紀とみ，またあるものについては8－11世紀とか9－10世紀などといっている[105]。次いで中央アジア諸地の壁画のカタログを出したアンドリュースは多くを8－9世紀とし，チベットの影響を受けた（と彼が考える）遅いものでも10－11世紀とみる[106]。他方，アッカンは早いものは7世紀だが中心は9世紀，遅いものでも9－10世紀とみ[107]，またブッサーリやタルボット＝ライスもだいたい8－9世紀と古くみている[108]。そして現在ル＝コック将来の原物に親しく接しているヘルテル以下のベルリン＝グループが出したばかりのカタログでは，ほとんどが9世紀となっている[109]。一方，アムビスの率いたパリの研究グループはほぼ9－10世紀に編年づけており[110]，アンドリュース以下の見解よりやや新しくなった。しかしこれでもまだ我々は十分に納得することが出来ない。なぜなら，古代チュルク民族史に関して世界の中でも最も優れた業績を残した我国の諸先学の研究，及び私がこれまでに発表してきた諸論文や本稿第3節で述べたことなどを総合すると，ウィグルを含む古代チュルク族が初めて直接にトゥルファン盆地を支配するのも，またその地方に直接・間接に関わったチュルク諸族の中で，とくにその支配者階級や富裕層（壁画のある洞窟寺院を造営するには大変な財力が必要）に相当数の仏教信者が生まれてくる

---

102) cf. 熊谷 1962, pp.161－162.

103) 村上（平野） 1961；村上 1981；村上 1984。ただし村上氏の研究は先行のリューダースやユベールの研究を基礎としている（cf. Lüders 1913；Huber 1914）。

104) Gabain 1975. ただし阿羅漢（Arhat, Arhant）を重視すること自体は小乗的特徴であったことに注意せよ。我々の P.t.1292 にも "ar-hrīn (*l.*2) という形でこの語はみえている。尚，ここにガバイン女史が「10世紀」といっているのには何の根拠も示されていないが，以下の本文にみる如く，結果的にはそれはほぼ妥当である。

105) Le Coq 1922－1926, II, pls.14－16, 18, 21－23；III, pl.14；IV, pls.17－20；V, pl.22；Le Coq 1925, figs.89, 107, 125, 128, 146, 152, 161.

106) Andrews 1933, p.viii. また Andrews 1948 の図版 XXVIII への解説（p.100）では，ウィグル貴人を描いたベゼクリク壁画（BEZ. xii. M.）に対して，"It seems to have been a style peculiar to local Uigurs of this period (eighth to ninth century A.D.)." と述べている。

107) Hackin 1936, pp.9, 21.

108) Bussagli 1963a & b, pp.98－100, 102, 103, 106, 107, 109, 110（ただし p.102 と p.109 の二つについては9－10世紀とみている）；Bussagli 1965, pl.26；Talbot Rice 1965, figs.187, 188, 192, 193（ただし fig.192 のみは9－10世紀とする）。

109) Härtel 1982, pls.81－85, 108－110（ただし pl.81 のみは7－8世紀としている）。尚，pl.84 の龍池図については，秋山氏も9世紀としている（秋山 1982, p.199）。

110) Hambis 1977, p.73 (no.12), p.116 (nos.59, 67), p.152 (nos.85, 86), p.175, p.178 (nos. 114, 125, 127), p.232 (no.176).

のも，いずれも西ウィグル王国時代になってからのこととしか考えられないからである。西ウィグル王国は一般的には9世紀中葉に成立したと考えてよいが，最初期にはむしろ焉耆地方に中心があり，また漠北時代以来の伝統で有力者階級の間にははじめマニ教が流布していたと思われる[111]等の諸般の事情を考慮するならば，ベゼクリク造営にウィグル人が関与してくるのは早くて9世紀末，確実になるのは10世紀に入ってからとみなすべきである。

このように考えてくると，既に熊谷宣夫氏がベゼクリク第19号窟の壁画について次のような見解に達していたことがクローズ＝アップされてくる。

「製作の時代については，ル・コックの解説に七，八世紀乃至十一，二世紀として居るが，この僧像に於いて，黒目に輪廓を付し，上唇の中央を鋭く尖らせ，口辺の両端に括りの線を配する等前述の手法が，必ずしもわが仏画史上に顧て古く認め得ず，宋画の特色として取扱はるる処である。おそらくル・コックの汎(ひろ)き時代判定の中その下限に近く位置すべく私(ひそか)に考ふるものである。」[112]

また，マスペロが第9号窟の有名な三人のウィグル貴人像（先頭の一人は "Buγra Šäli Tutuq" の銘を持つ）[113]に対して示した鋭い観察も，今一度思い起こさるべきである。明らかに中国の影響を受けたこのウィグル貴人の服装の起源を，彼は唐代ではなく宋代（即ち10世紀後半以降）に求めていた[114]。

さらに最近になって孟凡人氏はベゼクリクについて専論を発表し，その窟寺と壁画の大部分は西遷後のウィグル人がそれ以前の高昌地方にあった仏教芸術を継承・発展させたもので，それらは9世紀末－10世紀（唐末宋初），10－12世紀（宋遼），12世紀末－13世紀初（宋末元初）の三段階に分けられるという新説を提出した[115]。そして結果的に，西ウィグル王室が仏教に帰依するのは9世紀末から10世紀初頭であろうとの見解に到達している[116]。孟氏の論文は歴史学的考証という点ではもの足りなさが残り[117]，細部には問題も多いが，ベゼク

111）西ウィグル王国前期におけるマニ教信仰が，これまで一般に考えられてきた（とくに王延徳の言に惑わされた結果）よりもずっと広汎であることについては，別に論ずる予定である。

112）熊谷　1942, p.28.　尚，熊谷氏はこの論文を皮切りにベゼクリク壁画に関する論文を次々と発表し（cf.『美術研究』126・138・156・170・178号，1942－1954），最終的に「ベゼクリクは時代としてウイグル人のこの地域占據以後の遺蹟と考定され，年代として最も新しい九～十一世紀の制作であり，その壁画は中国様式のウイグル人による地方化を示すものに他ならない。」（熊谷　1953, p.22）との結論を出すに至った。しかしウィグル人によってベゼクリクの仏教壁画が制作され始める年代を，ウィグルの西遷とからめて単純に「九世紀」とする見解には賛成できない。ついでにいえば，上野女史が「ベゼクリクを中心として，その周辺の遺蹟にも多少の遺品の所在を知られる誓願図という図様は，八世紀の末に侵入したウィグル人の手になる，この地区の寺院に独特のものである。」（上野アキ　1972, p.1）と述べるのも正確さを欠いている。

113）Le Coq　1913, pl.30a ; Le Coq　1928, pl.21 ; ル・コック　1962, p.111 ; Hambis　1977, fig. 85 ; Härtel　1982, pl.108.

114）H. Maspero, compte-rendu de *Seiiki kôko zufu*（西域考古図譜），*BEFEO*　15, p.61.

115）孟凡人　1981, pp.60－61.

116）ほぼ同時期に発表された別の論文でも孟氏は同じ見解をとっている（cf. 孟凡人　1982, p.59）。さらに同論文 p.69 では，主に平野（村上）・熊谷両氏の説に依っただけではあるが，やはり西ウィグル仏教に小乗的影響のあることを指摘している。

リクの年代に関するおおまかな結論だけは我々の考えてきたところとよく一致する。今や我々はベゼクリクの主要部分を10－12世紀と位置づけて大過ないであろう。

結局，西ウィグル仏教は，第3節でみたように，その初期においては小乗的傾向が強かったのが，本節でみたように，ベゼクリク窟寺が盛んに造営された10－12世紀には大小二乗の併行・融合がみられ，そして元代では大乗が大勢を占めたのではあるが教学の基本として小乗的なアビダルマの研究も依然盛んであった，ということになる。即ち，ウィグル仏教においては，たとえ大乗との区別がそれほど截(せつ)然としてはいない有部の系統であったとはいえ，元代までずっと一貫して小乗的要素が持続したとみるべきで[118]，ウィグル仏教を大乗教の一言で片付けてしまうのは大きな誤りである。

しかしながら注意しなければならないのは，初期ウィグル仏教の小乗的傾向が主としてトカラ仏教に依存していたのに対し，元代のアビダルマ論書は多く漢文から訳されたものであったという点である。そして一方，すでに元代以前から元代にかけて漢文から訳された仏典の大部分は大乗系であった。つまりいつからかウィグル仏教は大小二乗とも漢人仏教に新しい血を求めるようになっていたのである。ではウィグル仏教に漢人仏教が大きな影響を与え始めるのは一体いつ頃からであろうか。それが9世紀以前であり得ないことは，本稿のこれまでの論述で既に明らかである。

8.　西ウィグル仏教と漢人仏教

10世紀も終わりに近い981－984年に宋朝の使いとして西ウィグル王国を公式訪問した王延徳は，その『西州程記（高昌行記）』の中で Qočo 高昌について次のように記す。

「佛寺五十餘区，皆唐朝所賜額。寺中有大蔵経・唐韻・玉篇・経音等。」

大蔵経はもちろん漢訳大蔵経である。唐韻は唐の孫愐の手に成る5巻の韻書（漢字音の辞書）であり，玉篇は梁の顧野王が撰した30巻の字書である。経音とは例えば一切経音義のように，経典中の難解な語句や文字の意味や読み方を解説したものであろう[119]。これはいやしくも西ウィグル仏教の歴史に言及した人ならば誰でも引用する有名な記事であるが，また別の箇所には次のようにある。

「又明日游佛寺，曰應運太寧之寺，貞観十四年造。」

これらの記事は，高昌地方の漢人・漢語仏教が唐代あるいはそれ以前より連綿と続いてきたことを我々に教えてくれる。唐朝の西域支配が頓挫し，トゥルファン～北庭（ビシュバリク）

117）先学の研究への言及がほとんど無く，立論の根拠がしばしば曖昧である。

118）仏教学の専門家である百済氏も筆者と同様の見解（ただし一応の見通しとして）を明らかにしている（百済　1982a, p.23）。

119）cf. Julien　1847, pp.58－60. なお高田時雄氏は1984年4月に京都大学・楽友会館で開かれた乾燥アジア史談話会において「西域におこなわれた漢字音の一種について」と題して発表したが，その中でこの経音とは玄応の一切経音義であると明言した。

地方がウィグルの勢力圏に入ってからも，多数の漢人はそのまま居続けたのであるから，これは当然である。ウィグル人が初めは主にトカラ人から仏教を学び，それを吸収したとしても，ウィグルがトゥルファン地方を直接支配するようになれば，必然的に漢人及び漢人仏教との接触は濃密になってくる。ウィグル人の方がすぐさま漢字・漢文を学んだとは思えないが，被支配者たる漢人の方にとって支配者の言語たるウィグル語の習得は日常的に切実であったはずである。即ち西ウィグル王国領内の漢人（もちろん事情はトカラ人にとっても同じである[120]が）のビラング bilingue（二言語併用者）化は急速に進んだことであろう。そしてその時期はかなり早く，第3節で述べたような事情を考慮すれば，遅くとも10世紀初頭には一般化していたと思われる。トゥルファンを中心とする東部天山地方の漢人仏教が，唐代においてもトカラ仏教（これは完全に眼がインドの方を向いていた）とほとんど交流しなかったことは，出土仏典や漢文史料の研究からよく知られている通りであるが，だとすれば，8世紀末の東ウィグル可汗国と吐蕃との北庭争奪戦[121]以後唐本国ばかりか敦煌のある河西方面との連絡も途絶えがちになったこの地方の漢人仏教に，新しい血はもうどこからも流れてこなくなり，徐々に活気を失なっていったであろうことは想像に余りある。こんなところにも，初期ウィグル仏教がトカラ仏教に傾いた一因はあるのかもしれない。しかし10世紀に入ると，これまた第3節で概観したように，西ウィグル王国と敦煌地方の曹氏帰義軍政権との結び付きは急激に深まった。時あたかも敦煌地方では，9世紀中葉に張議潮によって吐蕃の支配を脱却して以来，本国の長安・洛陽・開封などその時々の中心的な仏教界との交流が盛んとなり[122]，千仏洞には莫大な費用を要する大型の壁画を持つ洞窟寺院が次々と造営（含重修）され[123]，漢人仏教界が大変な活況を呈している真っ最中であった。このような敦煌の漢人仏教から直接・間接の刺激を受けて，西ウィグル王国内の漢人仏教は再び盛況に向かったと思われる。そして既にビラング bilingue となった漢人仏教僧は，ウィグル語を使い口頭で漢人仏教の教義を説いたり，漢文仏典をウィグル語に翻訳するなど，積極的に支配者

120）それゆえ，トカラ語からチュルク（ウィグル）語に訳された *Maitrisimit* のチュルク語が立派であることを以って，その訳者 Prtanrakšit (or Prtnayarakšt, Prtaniarakšt, &c.) はトカラ人ではなかろうというテキン氏らの主張の仕方（Tekin 1970, p.130；斯拉菲尔・玉素甫 &c. 1983, p.51）は当たらない。この翻訳者が梵語名あるいはトカラ語名を持ったウィグル人である可能性はもちろんあるが，トカラ人であっても何ら問題はないのである。またテキン氏はこの *Maitrisimit* の翻訳年代を西ウィグル王国時代（とくに10－11世紀）とみる馮氏の説（馮家昇 1962, p.91）を根拠薄弱として斥けるが，実際にはテキン氏の方こそ西ウィグル王国時代の棒杭文書やトヨク碑文を東ウィグル可汗国時代のものとするとんでもない誤りの上に立っているのである（cf. Tekin 1970, pp.131－132；Tekin 1976a；Tekin 1980, pp.8－9；小田(壽) 1983, p.161 & n.4；本稿 前註41)。ただし馮説が，結論はどうあれ，根拠が薄弱なことは確かにテキン氏の言う通りである。本稿はその根拠をいちいち挙げて馮説を立証する意図を初めから含むものでもあった。

121）cf. 森安 1979；Moriyasu 1981.

122）cf. 塚本 1975, pp.356－369；土肥 1980, pp.259－273.

123）cf. 藤枝 1964, pp.45－133；藤枝 1977, p.67；敦煌文物研究所(編)『敦煌莫高窟内容総録』(日本語版＝『中国石窟　敦煌莫高窟』第五巻付篇，東京，平凡社 1982；中国語版＝北京，文物出版社 1982)。

たるウィグル人に働きかけ，漢人仏教の勢力挽回に力を注いでいったにちがいない。965年に西ウィグル可汗から宋朝に派遣された仏僧法淵[124]も恐らくは漢人であったであろう。

そしてこのような環境の中から，ウィグル人のインテリたちの間にも次第に「文化用語」たる漢語と漢人仏教は普及していったのである[125]。983年の日付を持つ棒杭文書は，ウィグルの一王子の一家が仏教に帰依し，現世における繁栄と来世における成仏を願って仏教寺院に寄進を行なったことを記念するために書かれたものであるが，その文章は漢文であり，その中に現われる全てのウィグル人名も漢字で音写されている[126]。983年といえばちょうど王延徳が西ウィグル王国を訪問している時でもあった。

ベゼクリク第9号窟の壁画には9名のトカラ人仏僧と3名の漢人仏僧の等身大肖像が描かれている[127]。このうちとくに漢人の先頭に立つ人物に次のような銘文が付けられていることが注目される（ウィグル文字の方はローマ字で転写する）。

智	都	之	č	t	b	ï	k	b
			i	u	ä	d	ö	u
			t	t	g	u	r	ä
			u	u	n	q	k	r
			ŋ	ŋ	i		i	ü
通	統	像			ŋ			r

"Čituŋ Tutuŋ Bäg-niŋ ïduq körki bu ärür."
「智通　都統　殿　の　聖　像はこれである。」

124）「乾德三年十一月，西州回鶻可汗遣僧法淵獻佛牙・琉璃器・琥珀盞。」（宋史・巻四九〇・高昌伝）

125）漢字を使用し漢語を話せるウィグル人の出現，即ちウィグル人のビラング bilingue 化はおそらくごく一部に限られた現象であったと思う。しかし西ウィグル王国に於けるウィグル人と漢人の不断の接触は，遂には「漢字をウィグル語で訓読する」という文化史的結末を生ぜしめるに至った。このことは既に出土文書から証明された所であるが，11世紀のカラハン朝(西ウィグル王国の隣国)の人カーシュガリーも指摘しているという。cf. 羽田　1931, pp.186－187；羽田　1958c, pp.161－162；庄垣内　1982, pp.105－119（また庄垣内氏は1982年7月の野尻湖クリルタイで「ウィグル語における漢文の訓読について」と題する発表を行なった）；依布拉音・穆提依　1980, p.80.

126）Müller　1915, pp.17－21；岑仲勉　1947；森安　1974。年代については cf. Bazin　1974, pp.333－336.　かつて私はこの漢文棒杭文書の解読を行なった際，そこに小乗的要素が見受けられることに気付いたが，合理的な解釈がつかなかったためにその理由をいうのを保留した（cf. 森安　1974, p.47)。しかし今や我々にはその理由は繰り返す必要もないほど明白である。

127）Le Coq　1913, pl.16 とその解説。ル＝コックは9名（ただし図版は3名分しかない）のインド＝ヨーロッパ系の容貌を持つ僧侶を「インド人」とするが，ガバイン女史は「トカラ人」とする（Gabain　1961, pp.55－57＝ガバイン　1969, pp.53－54)。ここはガバイン女史の方が正しいと思うが，9名の中に「インド人」が混じっていてもおかしくはない（トカラ仏教の祖はインド人である)。一方，3名のアジア系の容貌を持つ僧侶をガバイン女史は「ウィグル人」とするが，私はむしろ「漢人」と考える。その理由は本文を読み進めば自ら明らかとなろう。なお，この *Chotscho* (Le Coq 1913) 出版に先立つ予備的報告の中でル・コックは，この第9窟の壁面の一部には「12人のインド人仏僧」と「12人の漢人仏僧」の肖像があるといっていた（Le Coq　1909, p.316)。数字（人数）の違いは彼の記憶ちがいであったので（cf. Le Coq　1913, pl.16 の解説左段の脚註)，今は問題がないが，この時(1909年）「漢人仏僧」といっていたものを1926年以降は「東アジア人の仏僧」といい，漢人ともウィグル人ともとれるように含みを残している（cf. Le Coq 1926, p.74 & pl.21；Le Coq　1928, p.87 & pl.21；ル・コック　1962, pp.107－108 … ただし原文

はじめは横書きであったといわれるウィグル文字が縦書きに変わったのは漢文の影響と考えられるが，ここではさらに，縦書きで行は左から右へ進むというウィグル文の書き方が漢文に逆影響を与えている。本来の漢文にはたとえ一行に一文字であっても右から左へ行を進めるという強い原則がある。それがここでは全く無視されているのは，西ウィグル王国内の漢人のウィグル化を物語るものでなくて何であろう[128]。

それはさておき，次に智通三蔵という名の現われる極めて興味深い史料（ウィグル仏典のコロフォン）をみてみよう[129]。

T I D 523 (U 2330)

(recto オモテ)

1. 〔……〕 darnïγ nomlamaq atlγ baštïnqu ülüšüg : kavandrm〔i〕
……　陀羅尼　教程　という名の(経典の)　第　一　巻を　Kavandrmi
(伽梵達摩)

2. 〔atlγ　äntkäk〕　ačari　äntkäk　tilintin　tavγač　tilinčä　ävirmiš-dä　kin
〔という名のインドの〕阿闍梨が　インド　語から　漢　語に　翻訳した　後

3. 〔……〕: tavγač čituŋ samtso atlγ ačari bu ikinti
……. 漢人の　智通　三蔵　という名の　阿闍梨は　この(経典の)　第二

4. 〔ülüš〕　üčünč　ülüš　birlä　äntkäk　tilintin　tavγač　tilinčä
〔巻と〕　第三　巻を　いっしょに　インド　語から　漢　語に

5. 〔ävirmiš〕　ol　:　:　anï　üčün　mn　šïŋqo　šäli　tutuŋ
〔翻訳した〕のである．　それ　ゆえに　我　Šïŋqo　Šäli　Tutuŋ は

6. 〔baštïn〕qu　ülüštä　kavandrmi　atlγ　äntkäk　ačari　änt〔käk〕
〔　第一　〕　巻では　Kavandrmi　という名の　インドの　阿闍梨が　インド

7. 〔til ……　ikin〕ti　üčünč　iki　ülüšindä　tavγač　čituŋ
〔語〕〔より訳したものから〕，　第二　・　第三の　両　巻では　漢人の　智通

samtso　〔……〕
三蔵が　〔インド

8. 〔……〕tüm : kinki　bilgälär　iki　öŋki
語より訳したものからウィグル語に重訳〕した．今後の　学者たちは　二人の　先学が

に「東アジア僧」とあるのを木下氏は p.108 の図版説明で勝手に「シナ僧」と訳している)。

128) 李泰玉氏はベゼクリクの西ウィグル時代の壁画にウィグル文・漢文併用銘文がみられる事実を説明して，当時かなりの数の漢人仏僧が中原から西ウィグル王国（李氏の表現では新疆）に入ったと推定するが（李泰玉　1983, p.107)，これは我々の考えとは根本的に異なる。

129) Zieme　1976, pp.769－770. テキストと解釈はほぼツィーメ氏に依っているが，第6行目以下には筆者の新しい解釈が加わっている。とくに第8行目の 'iki öŋki（または öŋi)' を，「二人の先学」と訳し，Kavandrmi と智通三蔵とみなすのは筆者独自の考えである。

nä 〔……〕
如何に ……

9. 〔…… saqïn〕čïn ütig qïlïp bi〔……〕
…… 心から 発願して ……

ツィーメ氏はこのコロフォンの付けられたウィグル仏典の原本がサンスクリット語の *Sahasrākṣa-sahasrabāhv-avalokiteśvara-bodhisattva-dhāraṇi-ṛddhi-mantra-sūtra*, 漢文の『千眼千臂観世音菩薩陀羅尼神呪経』（大正蔵，巻20，No. 1057；Nanjio 目録，No. 318 および Appendix II, No. 134）であることを発見したが[130]，まさにこれをインド語（梵文，サンスクリット）から漢訳した人物がこの智通だったのである。『宋高僧伝』（大正蔵，巻50，No. 2061）巻3には，

「釋智通，姓趙氏，本陝州安邑人也。隋大業中出家受具。（中略）。自幼挺秀，即有遊方之志。因往洛京翻経館，学梵書並語。暁然明解。屬貞観中，有北天竺僧。齎到千臂千眼経梵本。太宗勅捜天下僧中学解者，充翻経館綴文・筆受・證義等。通應其選，與梵僧對，譯成二巻。（後略）。」

とある。もちろん『大正新脩大蔵経』巻20，No. 1057 の方の訳者も唐智通となっている。

samtso は漢語「三蔵」よりの借用で，これは仏僧に与えられる最高の尊称である。tutuŋ も漢語「都統」からの借用であるが，これはウィグルでは高位の仏僧の称号として使われた。tutuŋ は samtso ほど稀（まれ）ではないが，この智通都統は壁画に聖像を描かれる程ウィグル仏教徒の間では尊敬され，かつポピュラーな人物である。従ってこの智通都統と文書（コロフォン）の智通三蔵（Čituŋ Samtso）とが同一人物であったと考えることは許されるのではあるまいか。そしてその智通三蔵の現われる文書に，ウィグル仏教史上に名高い訳経僧たるあのシンコ＝シェリ都統 Šïŋqo Šäli[131] Tutuŋ の名がみえているのである。このビシュバリク（北庭）——当時の西ウィグル王国の首都——出身の高僧が漢文からウィグル語に翻訳した仏典中，これまでに存在が確認されたのは，上述のものも含めて次の四種である。

No. 1: Uig. *Altun öŋlüg yaruq yaltrïqlïγ qopda kötrülmiš nom éligi atlïγ nom bitig*, Skt. *Suvarṇaprabhāsottama-sūtra*, Chin. 金光明最勝王経[132]

---

130) ただし，より正確には，智通訳『千眼千臂……経（二巻）』と伽梵達摩（Uig. Kavandrmi）訳『千手千眼観世音菩薩広大円満無礙大悲心陀羅尼経（一巻）』（大正蔵，巻 20，No. 1060；Nanjio 目録，No. 320 および Appendix II, No. 135）の両方をウィグル訳の原本とみなすべきであろう。ウィグル文のコロフォンと両漢訳本の巻数とを勘案すれば，そうみるのが自然である。敦煌出土のチベット訳本でも複数の漢訳本が原本となっていた事実が改めて思い起こされる。 cf. 上山 1978, pp. 54－57.

131) S'LY/Š'LY を šäli と読んで，これを Chin.「闍梨」の音訳とみるのはハミルトン氏の考えである（Hamilton 1984）。この考えは Tekin 1980, 1. Teil, pp. 260－261 によっても補強されよう。

132) Radlov & Malov 1913－1917；Müller 1908, pp. 10－16；Çagatay 1945；護 1962；Tekin

No. 2: Uig. *Bodistv Tayto samtso ačari-niη yorïγ-ïn uqïtmaq atlïγ Tsi-in-čün tigmä kavi nom bitig*, Chin. 大慈恩寺三蔵法師伝（略称は慈恩伝または玄奘伝）[133]

No. 3: Uig. *Ät'özüg köηülüg körmäk atlïγ nom bitig*.[134]

No. 4: Uig. *Miη közlüg miη äliglig ïduq yarlïqančučï köηül atlïγ darni nom*, Skt. *Sahasrākṣa-sahasrabāhv-avalokiteśvarabodhisattva-dhāraṇy ṛddhi--mantra-sūtra*, Chin. 千眼千臂観世音菩薩陀羅尼神呪経[135]

このうちの No. 2 に洛陽のことを洛京（Uig. laγki）といっている点に着目したガバイン女史は，この洛京なる呼び名は後唐（923－936年）でのみ使用された名称であるから，シンコ＝シェリ都統が玄奘伝を漢文からウィグル語に訳したのは10世紀の第2-四半世紀であるとした[136]。以後，この考えはかなり広く受け入れられているようである[137]。しかし全く同じ史料を用いながら馮家昇は別の考えを打ち出して，ガバイン説に反駁した[138]。即ち馮氏は，洛京が洛陽の正式の名となるのは後唐がここに都を置いた時が最初であるが，後唐が倒れた後もこの名称は生きていたことを実例を挙げて説明する。そしてさらにウィグル文玄奘伝を漢文原本と比較して，ウィグル語の laγki が洛陽の意味だけでなく，むしろ「京師」即ち首都（玄奘伝の時代の首都はいうまでもなく長安である）の意で使われていることを指摘する。このような「誤用」ないし「転用」は洛京が実際に首都であった後唐時代ではありえず，それよりかなり時間が経って，洛京が京師などと同じく首都の美称の一つとなった時代にこそおこり得るものである。馮氏はこれを北宋（960－1126年）時代とした。

シンコ＝シェリ都統の訳文は仏教ウィグル語としてすでにしっかりしたものであり，それでいて相当数の漢語をウィグル語に意訳しないでそのまま音写している[139]。本稿のとくに第3節・第7節そして本節で考察してきたところを踏まえてこのことに思いを致すなら，我々はシンコ＝シェリの活躍年代に関してガバイン説を捨て，馮説を採るべきであろう。しかし単に北宋時代というのでは余りに漠然としている。ところが真に幸いなことに，ウィグル文金光明最勝王経の写本の一断片（T. II Y. 37）に日付の入った序文を持つものがある。この日付は1022年のものであることが確定している[140]。私はこの断片の実物も写真もみておらず，これがシンコ＝シェリ訳の No. 1 のグループに含まれるものかどうか確かめるこ

1971.

133) Gabain 1935; Gabain 1938; 馮家昇 1953; Тугушева 1974; Tezcan 1975; Toalster 1977; 耿世民 1979; Тугушева 1980; 耿世民 1980a.

134) Hazai 1975.

135) Tekin 1966; Zieme 1976. ただし前註130及び Röhrborn 1976 をも参照。

136) Gabain 1935, p. 152.

137) cf. Tekin 1966, p. 30; Hazai 1975, p. 91; Zieme 1976, p. 767.

138) 馮家昇 1953, pp. 8－12.

139) 例えば玄奘伝の中の実例については，cf. Sinor 1939b.

140) Rachmati & Eberhard 1937, pp. 54, 80－81; Bazin 1974, pp. 339－346.

とが出来ないが，ウィグル仏教前期という時代的背景を考えるなら，同じ漢文経典が別々の人によって訳された可能性は薄い。当時はまだ漢文から翻訳されたウィグル仏典の蓄積がそれほど多くない時であるから，そのような「無駄」あるいは「贅沢」は許されなかったであろう。だとすればシンコ＝シェリが No. 1 を訳したのは少なくとも1022年より以前ということになる。

以上より私はシンコ＝シェリ都統の活躍年代を10世紀末－11世紀初頭とみる。先にベゼクリク壁画の主要部分の年代は10－12世紀とみてよかろうと述べたが，第9号窟に智通都統の肖像が描かれるに至るのはシンコ＝シェリが No. 4 を翻訳した後にちがいないから，少なくとも第9号窟の壁画の年代はさらに狭く11－12世紀に限定されてこよう。

ところでこのシンコ＝シェリ都統を従来ほとんどの人はウィグル人と考えてきた。もちろん西ウィグル王国の国籍を持っていたという面からはそれは正しい。しかしツィーメ氏の指摘するように，折本型式の印刷仏典である No. 3 には，紙縫にあたる部分に漢字で葉番号と一緒に「勝光法師」の名が印刷されている[141]。同氏はこの「勝光」を Šïŋqu/Šïŋqo の対音とみた[142]。これだけではシンコ＝シェリ都統すなわち勝光法師が，漢語を解するウィグル（チュルク）人であったか，ウィグル語に精通した漢人であったかを決定できないが，恐らく後者であったのではなかろうか[143]。先に私は，西ウィグル王国に於てビラング bilingue となった漢人仏教僧が漢文仏典をウィグル語に翻訳し，積極的に支配者たるウィグル人に働きかけていったという状況が10世紀とくにその後半に現出したと述べておいたが，まさしくそのような状況の代表者としてこのシンコ＝シェリ都統をみるわけである。仏典の翻訳もさることながら，とくに玄奘伝のウィグル訳は，中央アジアやインドに関する地理書であり歴史書であり，且つ読み物としても大いに楽しめるものとして，ウィグル人の喝采をあびたことであろう[144]。

こうしたシンコ＝シェリのような人物の努力によって，初期にはトカラ仏教より多大の影響を受けたウィグル仏教は益々漢人仏教への傾斜の度合を深めていったものと思われる。11世紀も中葉の1068年，西ウィグル国王は宋朝に使者を送り，『金字大般若経』の下賜ではなく購入を願い出ているが[145]，このことは東西貿易で繁栄する西ウィグル王国の実力と，そ

141）cf. Gabain 1967, pl. 9.

142）Zieme 1976, pp. 768, 771.

143）1983年の第31回 CISHAAN におけるハミルトン氏の発表の席上，この問題に関するやりとりが同氏と私との間で行なわれたが，それは議事録（Hamilton 1984）では無視され削除されてしまった。しかしこの問題は，漢語・トカラ語・ソグド語・コータン語・チベット語その他多種多様の言語を話していた中央アジア在住の諸民族のチュルク化（まずチュルク語化，次いでチュルク人化）――いわゆる中央アジアのトルキスタン Turkestan 化――の進行過程を地域別・時代順に具体的に追っていく上で重要なポイントになるものである。

144）cf. 京都大学人文科学研究所発行『人文』29, 1984, p. 25.

145）「神宗熙寧元年七月二十九日，回鶻國可汗遣使來貢方物，且言乞賣金字大般若經。詔特賜墨字大般若經一部。」（宋会要輯稿・蕃夷四）

の支配者層が国内の漢人仏教だけでなく，中国本土の漢人仏教にも眼を向け始めたことを物語っているのではなかろうか。実際には宋朝からは『金字大般若経』ではなく『墨字大般若経』が贈られたが[145]，その他にもトゥルファン盆地からは北宋の勅版大蔵経の断簡や契丹版大蔵経・金刻大蔵経の残葉（以上いずれも漢文）などが出土している[146]。

結局，漢人及び漢語仏教が西ウィグル仏教の中で大きな役割を果たし始めるのは10世紀後半からであり，11世紀以降はほぼ完全にその主導権を握ったということができる。

それゆえ我々は，Vap-xua-ki＝法華経，Vi-bä-ki＝維摩経，Tay-pa-ša-ki＝大般若経，Kim-ko-ki＝金剛経，Qa-yim-ki＝華厳経，A-bi-ta-ki＝阿弥陀経など漢字音を直接音写したタイトルを持つ主要なウィグル仏典のかなりの部分が漢文から重訳されたのも，また当時敦煌で流行していた金光明経・千手千眼陀羅尼経（千眼千臂……経）・仏頂尊勝陀羅尼経などのいわゆる雑密（ぞうみつ）経典が漢文からウィグル訳されたのも，この10－11世紀を中心とする時代であったと推定してよいであろう[147]。

また同じ理由から，トゥルファン出土のウィグル仏教の遺品（ただし翻訳仏典は除く）[148]の中に六道を示すものや，あからさまに漢人からの影響を示しているものがある場合は，それらを10世紀後半以降に編年づけて大過ないであろう。例えば松本栄一・ガバイン・ディトリッヒ等によって紹介された地蔵図や，ウィグル文十王経の挿絵（ミニアチュール）などはその典型である[149]。この十王経の挿絵の画風は，本稿第2節でみた敦煌の地蔵・十王図のそれと酷似しており，唐末の偽作である『十王経』の思想そのものと共に，10世紀に敦煌地方より伝えられたことは疑いない。とくにガバイン女史の紹介する一断簡には，上から人道・阿修羅道・畜生道・餓鬼道の四つが残っているから，もとは六道が描かれていたにちがいない[150]。またベゼクリクの壁画の中にも，たった一つだけであるが六道図（ふつうは地

146）cf. 小川　1956, pp.32－37.

147）もちろんこれはあくまで歴史学的方面からの大雑把な推定であり，一つ一つについてはこれから言語学的および仏教学的検証が要求されよう。また雑密のウィグル伝入はアジア仏教史全体の流れの中で考え直すべき大問題である。なお，いわでもがなのことながら，タントリズムとも呼ばれるチベット密教（吐蕃王国時代のチベット仏教とはかなり異なる）のウィグル流入は元代になってからのことである。

148）第2節でも述べたように，正式の仏典の場合は，それが使用されていた当時のその地域の仏教社会の意識や通念を直接に反映するものでないことに注意する必要がある。しかし，それにもかかわらず，私のこれまでの調査では，ウィグル文翻訳仏典のうち，原語・翻訳者・用語の特徴・書体・コロフォンなどを総合的に勘案して比較的古い時代に位置づけられるものには「五道（béš ažun, 時々 béš yol)」が，新しい時代に位置づけられるものには「六道（altï yol, ごくまれに altï ažun)」が多くみられる，という結果が出ている。また金光明経のように‘béš ažun altï yol’と熟して使われる例もみられる(cf. Bang & Gabain　1930c, pp.194, 201；Tekin　1961, p.190)。ただし私のこの調査には，諸外国に散在する原文書にじかに触れていないという致命的欠陥があるので，詳細の発表は他日を期さねばならない。一方，ウィグル人の間には仏教より早く普及したマニ教が六道ではなく五道（五趣）といっていたことについては前註42をみよ。

149）松本榮一　1937,（図像篇）pp.368－416；（附図）一〇五～一一八；Gabain　1973a；Dittrich 1972, pp.187－188, fig.1.

150）Gabain　1973a, pp.61－62, fig.77.

獄図と称されている）が知られている[151]。

では最後にもう一度 P.t.1292 文書にたち戻ってみよう。その成立年代について我々は既に第1節において，古文書学的および言語学的見地から「10世紀前後」というややおおまかではあるがその限りにおいてはかなり確度の高い結論を得ていた。次いで第2－3節において本文書の出身母胎が西ウィグル仏教社会であることをつきとめ，その後の数節では能う限り広い方面に手がかりを求めつつ，西ウィグル仏教史の再構成を行なってきた。今ここに至って我々は第1節の結論を再確認できたと断言してはばからない。ただ遺憾ながらそれだけでは早くにペリオが到達していた水準を一歩も越えてはいない。しかしこれまでの歴史学的考察を踏まえるならば，P.t. 1292 が出現し得る時代は自から10世紀前半～中葉へと絞られてくるのではないだろうか。読者の中には，これだけではあまりに貧弱な結論と思われる方があるかもしれないが，もちろんそれだけが本稿の結論ではない。各節において設定した問題提起とそれに対する私なりの解答にも同等の重みを置くものである。それらを通じて，従来極めて不用意に使われてきた「ウィグル仏教」という曖昧な表現が多くの誤解を生み出した元凶であり，今後は「古代チュルク仏教」と「西ウィグル仏教」という二つの截然とした概念規定をもった用語を使うべきであると賢察いただけたなら，第二部の最大の目的は達せられたのである。

151）Le Coq 1922－1926, IV, pl.19；松本榮一 1937,（図像篇）pp.415－416, fig.108；Gabain 1971, p.32.

おわりに

テキスト註や言語学的研究を付さずに本稿を発表したのは，他でもない，P.t.1292 を一日も早く学界の共有財産にしたいとの願いからである。またこのたった一枚の文書を手がかりに，西ウィグル王国仏教史の解明という大問題にまで挑んだのは，従来のように歴史学・美術史学・言語学・仏教学の専家が分野別の研究をし，部分的・散発的な発言を繰り返すだけでは，いつまでたっても埒があかないと考えたからである。解読の誤りや論証の甘い所が多々あることは本人が一番よく自覚している。しかし難しいからといっていつまでも放っておいては，P.t.1292 の存在もその価値も一般には知られず，暗黒の西ウィグル仏教史にも光はさしてこないであろう。数百年にわたる西ウィグル仏教史の解明なくしては，当時の中央アジアの仏教史，ひいては中央アジアの歴史全体の流れが把握できないばかりか，その後のアジア史に重大な役割を演じたあのモンゴル族の仏教の本質も分からないのである。また単なる誤解ないし無知から，ウィグル史を専門としない各方面の研究者が，「ウィグル仏教」にかかわる文書・仏典・絵画・銘文・碑文などは全て9世紀前半以前にまで遡り得ると単純に考えて論を立ててきた悲しむべき状況も打破されない。敢えて本稿を発表する微意を諒とせられたい。

（1982年秋　金沢）

（補：1984年夏　大阪）

〔付記〕 本稿脱稿後，D. Maue & K. Röhrborn, Ein „buddhistischer Katechismus“ in alttürkischer Sprache und tibetischer Schrift (Teil I), *ZDMG* 134, 1984, pp.286－313 が公刊された。これは P.t.1292 の言語学的研究であるが，まだ前半が出ただけでその全貌は明らかになっていない。一方，数年前に私よりテキスト原稿をお渡しした庄垣内正弘氏も既にウィグル音韻論の方面からの研究を完成させ，私の論文の出版を待って発表する予定であるし，またハンガリーのアルタイ言語学者 A. Róna-Tas 氏も別個に研究を進めていると聞く。さらに本稿の校正ゲラを御覧いただいたチベット言語学者で友人の武内紹人氏からは，早くも第二部第5・6節に対する厳しい批判をいただいた。即ち，Tur. Tib. はともかく P.t.1292 の転写組織だけを虚心に眺めるならば，これはやはりチベット語を母語とする人が恐らく耳で聞いたままを書き取ったものとしか考えられないというものである。詳細は活字にされるという。

これらの素早い反応は筆者の最も歓迎する所であり，あと仏教学者・美術史学者からの御批判を是非とも賜りたい。「はじめに」で予告した私の次稿は，これらの批判や新研究が一応出揃うのを待ち，歴史学的に改めて考え直した上で発表することとしたい。

参考文献目録

Andrews, F. H.

1933 *Catalogue of Wall-Paintings from Ancient Shrines in Central Asia and Sistan recovered by Sir Aurel Stein.* Delhi.

1948 *Wall-Paintings from Ancient Shrines in Central Asia recovered by Sir Aurel Stein.* 2 vols., London.

Asmussen, J. P.

1965 *Xuāstvānīft. Studies in Manichaeism.* Copenhagen.

Bailey, H. W.

1968 *Saka Documents. Text Volume.* London.

Bang, W. & A. von Gabain.

1930a Türkische Turfan-Texte, III. Der grosse Hymnus auf Mani. *SPAW* 1930, pp. 183–211, +2 pls.

1930b Türkische Turfan-Texte, IV. Ein neues uigurisches Sündenbekenntnis. *SPAW* 1930, pp. 432–450.

1930c Uigurische Studien. *Ungarische Jahrbücher* 10, pp. 193–210.

Bazin, L.

1974 *Les calendriers turcs anciens et médiévaux.* Univérsité de Lille.

1975 Turcs et Sogdiens: Les enseignements de l'inscription de Bugut (Mongolie). In *Mélanges linguistiques offerts à Emile Benveniste*, Paris, pp. 37–45.

Beal, S.

1869 *The Travels of Fa Hian and Sung Yun.* London.

1884 *Si-Yu-Ki. Buddhist Records of the Western World, tr. from the Chinese of Hiuen Tsiang.* London. (Repr. Delhi 1981).

1911 *The Life of Hiuen-tsiang.* London. (Repr. Delhi 1973).

Benveniste, E.

1964 Le vocabulaire chrétien dans les langues d'Asie Centrale. In *Atti del convegno internaz. sul tema: L'Oriente cristiano nella storia della civiltà*, Rome, pp. 85–91. (Incl. in E. Benveniste, *Etudes sogdiennes*, Wiesbaden 1979).

Boyce, M.

1960 *A Catalogue of the Iranian Manuscripts in Manichean Script in the German Turfan Collection.* Berlin.

BPTH

1974–1976 *Bannières et peintures de Touen-houang conservées au Musée Guimet,* Catalogue descriptif et Planches. (*Mission Paul Pelliot* XIV et XV) Paris.

Bussagli, M.

1963a *La peinture de l'Asie Centrale.* tr. by I. Robinet. Genève. (Repr. 1978).

1963b *Painting of Central Asia.* tr. by L. Small. Geneva.

1965 *La pittura dell'Asia Centrale.* Firenze.

Çagatay, S. S.

1945 *Altun Yaruk'tan Iki Parça.* Ankara.

Chavannes, E. & P. Pelliot

1911–1913 Un traité manichéen retrouvé en Chine. *JA* 1911 nov.-déc., pp. 499–617 & 1913 jan.-fév., pp. 99–199 & mar.-avr., pp. 261–394, +2 pls.

Clauson, G.

1959 The hP'ags-pa Alphabet. *BSOAS* 22, pp. 300–323.

1962 *Turkish and Mongolian Studies.* London.

1963 The Diffusion of Writing in the Altaic World. In D. Sinor (ed.), *Aspects of Altaic Civilization,* Bloomington & The Hague, pp. 139–144.

Dittrich, E.

1972 Drei Malereien aus Turfan im Museum für Indische Kunst, Berlin. *Oriens Extremus* 19, pp. 185–192, +2 pls.

Drège, J.-P.

1981 Papiers de Dunhuang. Essai d'analyse morphologique des manuscrits chinois datés. *TP* 67, pp. 305–360.

Dresden, M.

1983 Sogdian Language and Literature. In E. Yarshater (ed.), *The Cambridge History of Iran, Vol. 3(2): The Seleucid, Parthian and Sasanian Periods,* Cambridge &c., pp. 1216–1229.

Dzo Ching-chuan

1981 Un fragment du Fo Chouo Cheng King. Le manuscrit P. 2965. In M. Soymié (ed.), *Nouvelles contributions aux études de Touen-houang,* Genève, pp. 129–136, +3 pls.

Erdal, M.

1979 The Chronological Classification of Old Turkish Texts. *CAJ* 23, pp. 151–175.

Esin, E.

1980 *A History of Pre-Islamic and Early-Islamic Turkish Culture.* Istanbul.

Francke, A. H.

1924 Tibetische Handschriftenfunde aus Turfan. *SPAW* 1924, pp. 5–20.

Franke, H.

1978 A Sino-Uighur Family Portrait: Notes on a Woodcut from Turfan. *The Canada-Mongolia Review* 4, pp. 33–40, +2 pls.

Fuchs, W.

1938 Huei-ch'ao's Pilgerreise durch Nordwest-Indien und Zentral-Asien um 726. *SPAW* 1938, pp. 426–469.

Fujieda, A.

1966–1969 The Tunhuang Manuscripts. A General Description. *Zinbun* 9, pp. 1–32 & 10, pp. 17–39, 25 figs.

Gabain, A. von

1935 Die uigurische Übersetzung der Biographie Hüen-tsangs. *SPAW* 1935, pp. 151–180.

1938 Briefe der uigurischen Hüen-tsang-Biographie. *SPAW* 1938, pp. 371–415, –1 pl.

1950 Alt-türkisches Schrifttum. *SDAW* 1948–3, 24p.

1954a Buddhistische Türkenmission. In *Asiatica. Festschrift-F. Weller*, Leipzig, pp. 161–173.

1954b Türkische Turfan-Texte, VIII. Texte in Brāhmīschrift. *ADAW* 1952–7, 105p., +2 pls.

1961 Das uigurische Königreich von Chotscho 850–1250. *SDAW* 1961–5, 81p., 42 figs.

1964a Die Schreiber der alt-türkischen Brāhmī-Texte. *Studia Orientalia* 28–5, 11p.

1964b Alttürkische Schreibkultur und Druckerei. In L. Bazin &c. (ed.), *Philologiae Turcicae Fundamenta II*, Wiesbaden, pp. 171–191.

1967 Die Drucke der Turfan-Sammlung. *SDAW* 1967–1, 40p., +14 pls.

1970 Historisches aus den Turfan-Handschriften. *AO* 32, pp. 115–124, +2 pls.

1971 The Purgatory of the Buddhist Uighurs. Book Illustrations from Turfan. In *Mahayanist Art after A. D. 900. Colloquies on Art and Archaeology in Asia, No. 2*, London, pp. 25–35.

1973a Kṣitigarbha-Kult in Zentralasien, Buchillustrationen aus den Turfan-Funden. In H. Härtel &c. (ed.), *Indologen-Tagung 1971. Verhandlungen der Indologischen Arbeitstagung im Museum für Indische Kunst (Berlin) 7.–9. Oktober 1971*, Wiesbaden, pp. 47–71, many figs.

1973b *Das Leben im uigurischen Königreich von Qočo (850–1250)*. 2 vols., Wiesbaden.

1974a Die Qočo-Uiguren und die nationalen Minderheiten. In G. Hazai &c. (ed.), *Sprache, Geschichte und Kultur der Altaischen Völker (Protokollband der XII. Tagung der PIAC. 1969 in Berlin)*, Berlin, pp. 241–249, +4 pls.

1974b *Alttürkische Grammatik*, 3. ed. Wiesbaden.

1975 Types of Arhats on a Series of Wall Paintings from Turfan. *MRDTB* 33, pp. 161–169, +3 pls.

1976a Alt-türkische Texte in sogdischer Schrift. In *Hungaro-Turcica. Studies in Honour of Julius Németh*, Budapest, pp. 69–77, –2 pls.

1976b Ein chinesisch-uigurischer Blockdruck. In *Tractata Altaica. Denis Sinor, Sexagenario Optime de Rebus Altaicis Merito Dedicata*, Wiesbaden, pp. 203–210, –3 pls.

1977 Iranische Elemente im Zentral- und Ostasiatischen Volksglauben. In *Studia Orientalia* 47 *(Pentti Aalto, Sexagenario Dedicata)*, Helsinki, pp. 57–70.

1983 Von Ötükän nach Idiqut-šähri. Studie zur Akkulturation der Alt-Türken. *AOH* 36 (1982), pp. 183–196.

Gabain, A. von & H. Scheel

1957 *Maitrisimit. Faksimile der alttürkischen Version eines Werkes der buddhistischen Vaibhāṣika-Schule, (I)*. Wiesbaden.

Gabain, A. von & R. Hartmann

1961 *Maitrisimit, II*. Berlin.

Gabain, A. von & W. Winter

1958 Türkische Turfan-Texte, IX. Ein Hymnus an den Vater Mani auf "Tocharisch" B mit alttürkischer Übersetzung. *ADAW* 1956–2, 44p., +2 pls.

Geng Shimin

1980 Qädimqi Uygurcä Iptidayi Drama Piyesasi "Maitrisimit" (Hami Nushasi) ning 2-Pärdäsi Häqqidiki Tätqiqat. *Journal of Turkish Studies* 4, pp. 101 −156.

Gernet, J.

1966 Location de chameaux pour des voyages, à Touen-houang. In *Mélanges de Sinologie offerts à M. Paul Demiéville, I*, Paris, pp. 41−51, +4 pls.

Giles, L.

1957 *Descriptive Catalogue of the Chinese Manuscripts from Tunhuang in British Museum.* London.

Гумилев, Л. Н.

1963 По поводу интерпретации Уланкомской Надписи. *Советская Археология* 1963−1, pp. 295−298.

Hackin, J.

1936 *Recherches archéologiques en Asie Centrale (1931).* Paris.

Hambis, L. (ed.)

1977 *L'Asie Centrale. Histoire et civilisation.* Paris.

Hamilton, J. (R.)

1971 *Le conte bouddhique du Bon et Mauvais Prince en version ouïgoure. (Mission Paul Pelliot* III) Paris.

1975 Le colophon de l'irq bitig. *Turcica* 7, pp. 7−19, +1 pl.

1977a Le pays des Tchong-yun, Čungul, ou Cumuḍa au Xe siècle. *JA* 1977, pp. 351−379, +1 map.

1977b Nasales instables en turc khotanais du Xe siècle. *BSOAS* 40, pp. 508−521.

1981 Les manuscrits turcs anciens de la grotte murée de Touen-houang. *JA* 1981, pp. 15−17.

1984 A propos de S/Š'LY en ouïgoure. In T. Yamamoto (ed.), *Proceedings of the Thirty-First International Congress of Human Sciences in Asia and North Africa, I*, Tokyo, pp. 338−339.

Hamilton, J. & L. Bazin

1972 Un manuscrit chinois et turc runiforme de Touen-houang, *British Museum Or. 8212 (78) et (79).* *Turcica* 4, pp. 25−42, +2 pls.

Hazai, G.

1975 Fragmente eines uigurischen Blockdruck-Faltbuches. *Altorientalische Forschungen* 3, pp. 91–108, +9 pls.

Härtel, H. (intro. & catalogue)

1982 *Along the Ancient Silk Routes. Central Asian Art from the West Berlin State Museums.* New York.

Huber, E.

1914 Etudes bouddhiques, 1. Les fresques inscrites de Turfan. *BEFEO* 14, pp. 9–14.

Julien, S.

1847 Les Oïgours. *JA* 1847 jan., pp. 50–66.

Кляшторный, С. Г.

1961 К историографической оценке Уланкомской Надписи. *Эпиграфика Востока* 14, pp. 26–28.

1963 По поводу интерпретации Уланкомской Надписи. *Советская Археология* 1963–4, pp. 292–293.

Kljaštornyj, S. G. & V. A. Livšic

1972 The Sogdian Inscription of Bugut Revised. *AOH* 26, pp. 69–102, –8 pls.

Krause, W. & W. Thomas

1960–1964 *Tocharisches Elementarbuch.* 2 vols., Heidelberg.

Kudara, K.

1981 A Fragment of an Uigur Version of the *Abhidharmakośakārikā.* *JA* 1981, pp. 325–346, –1 pl.

Kudara, K. & P. Zieme

1983 Uigurische *Āgama*-Fragmente (1). *Altorientalische Forschungen* 10, pp. 269–318, –10 pls.

Lalou, M.

1961 *Inventaire des manuscrits tibétains de Touen-houang conservés à la Bibliothèque Nationale, III.* Paris.

Le Coq, A. von

1909 A Short Account of the Origin, Journey, and Results of the First Royal Prussian (Second German) Expedition to Turfan in Chinese Turkistan. *JRAS* 1909, pp. 299–322.

1912–1922 Türkische Manichaica aus Chotscho, I–III. *APAW* 1911–6, 61p.,

+4 pls. & 1919−3, 15p., +2 pls. & 1922−2, 49p., +3 pls.

1913 *Chotscho. Facsimile-Wiedergaben der wichtigeren Funde der Ersten Königlich Preussischen Expedition nach Turfan in Ost-Turkistan.* Berlin. (Repr. Graz 1979).

1922−1926 *Die buddhistische Spätantike in Mittelasien. Ergebnisse der Kgl. Preussischen Turfan Expeditionen, I−V.* Berlin. (Repr. Graz 1973−1974).

1925 *Bilderatlas zur Kunst und Kulturgeschichte Mittel-Asiens.* Berlin. (Repr. Graz 1977).

1926 *Auf Hellas Spuren in Ostturkistan. Berichte und Abenteuer der II. und III. Deutschen Turfan-Expedition.* Leipzig. (Repr. Graz 1974).

1928 *Buried Treasures of Chinese Turkestan. An Account of the Activities and Adventures of the Second and Third German Turfan Expeditions.* tr. by A. Barwell. London.

Ligeti, L.

1961 Trois notes sur l'écriture 'Phags-pa. *AOH* 13, pp. 201−237.

Lüders, H.

1913 Die Praṇidhibilder im neunten Tempel von Bäzäklik. *SPAW* 1913, pp. 864−884. (Incl. in H. Lüders, *Philologica Indica*, Göttingen 1940).

Marazzi, U.

1979 Alcuni problemi relativi alla diffusione del manicheismo presso i Turchi nei secoli VIII−IX. *Annali. Istituto Orientale di Napoli* 39, pp. 239−252.

Maue, D. & K. Röhrborn

1976 Ein zweisprachiges Fragment aus Turfan. *CAJ* 20, pp. 208−221, +1 pl.

1978 Neue Einsichten zum "Zweisprachigen Fragment aus Turfan". *CAJ* 22, pp. 134−135.

Меньшиков, Л. Н.

1963 *Бяньвэнь о Вэймоцзе. Бяньвэнь «Десять благих знамений»*. Москва.

Moerloose, E.

1979 The Way of Vision (Darśanamārga) in the Tocharian and Old Turkish Versions of the Maitreyasamitināṭaka. *CAJ* 23, pp. 240−249.

1980 Sanskrit Loan Words in Uighur. *Journal of Turkish Studies* 4, pp. 61−78.

Moriyasu, T.

1981 Qui des Ouigours ou des Tibétains ont gagné en 789−792 à Beš-balïq?

JA 1981, pp. 193–205, –1 map.

Moses, L. W.

1973 A Survey of Turco-Mongol Buddhism prior to the Thirteenth Century. *Asian Pacific Quarterly of Cultural and Social Affairs* 5, pp. 40–52.

Müller, F. W. K.

1904 Handschriften-Reste in Estrangelo-Schrift aus Turfan, Chinesisch-Turkistan. II. Teil. *APAW* 1904 Anhang, 117p., +2 pls.

1908 Uigurica, (I). *APAW* 1908–2, 60p., +2 pls.

1913 Soghdische Texte, I. *APAW* 1912, 111p., +2 pls.

1915 Zwei Pfahlinschriften aus den Turfanfunden. *APAW* 1915–3, 38p., +1 pl.

Müller, F. W. K. & W. Lentz

1934 Soghdische Texte, II. *SPAW* 1934–21, pp. 504–607.

Müller, F. W. K. & E. Sieg

1916 Maitrisimit und "Tocharisch". *SPAW* 1916, pp. 395–417, +1 pl.

Nanjio, B.

1883 *A Catalogue of the Chinese Translation of the Buddhist Tripiṭaka. The Sacred Canon of the Buddhists in China and Japan.* Oxford. (Repr. San Francisco 1975).

Pelliot, P.

1913 Sur quelques mots d'Asie Centrale attestés dans les textes chinois. *JA* 1913 mar.-avr., pp. 451–469.

1921 (un catéchisme bouddhique ouïgour en écriture tibétaine). *JA* 1921 juil.-sept., pp. 135–136.

1927 (l'origine de l'alphabet dit 'phags-pa). *JA* 1927 avr.-juin, p. 372.

Pigoulewsky, N.

1938 Fragments syriaques et syro-turcs de Hara-Hoto et de Tourfan. Paris. (Extr.: *Revue de l'Orient Chrétien* 30–1/2, 1935–1936, pp. 3–46.)

Poucha, P.

1955 *Institutiones Linguae Tocharicae, I.* Praha.

Rachmati, G. R. & W. Eberhard

1937 Türkische Turfan-Texte, VII. *APAW* 1936–12, 124p., +6 pls.

Radloff, W.

1930 *Suvarṇaprabhāsa aus dem Uigurischen ins Deutsche übersetzt.* Leningrad.

Radlov, V. V. & S. E. Malov

1913–1917 *Suvarṇaprabhāsa, I–VIII. (Bibliotheca Buddhica* 17 & 27) St.-Petersburg.

Rinčen, Y.

1959 Mélanges archéologiques. *CAJ* 4, pp. 289–299, –6 pls.

Röhrborn, K.

1976 Fragmente der uigurischen Version des "*Dhāraṇī-Sūtra*s der grossen Barmherzigkeit". *ZDMG* 126, pp. 87–100, +4 pls.

Sachau, E.

1905 Litteratur-Bruchstücke aus Chinesisch-Turkistan. *SPAW* 1905, pp. 964–978, +1 pl.

Schmitt, G. & Th. Thilo

1975 *Katalog chinesischer buddhistischer Textfragmente, I.* (*BTT* VI) Berlin.

Sieg, E & W. Siegling

1921 *Tocharische Sprachreste, I. Die Texte.* Berlin & Leipzig.

Sims-Williams, N.

1981 The Sogdian Sound-System and the Origins of the Uyghur Script. *JA* 1981, pp. 347–360, 1 fig.

1983 Indian Elements in Parthian and Sogdian. In K. Röhrborn &c. (ed.), *Sprachen des Buddhismus in Zentralasien,* Wiesbaden, pp. 132–141.

Sinor, D.

1939a A középázsiai török buddhizmusról. *Kőrösi Csoma-Archivum. Supplementary Volume I (1935–1939),* Budapest 1939, pp. 353–390.

1939b A propos de la biographie ouigoure de Hiuan-tsang. *JA* 1939 oct.-déc., pp. 543–590.

Spanien, A. & Y. Imaeda

1979 *Choix de documents tibétains conservés à la Bibliothèque Nationale, II.* Paris.

Stein, A.

1921a *Serindia. Detailed Report of Explorations in Central Asia and Westernmost China.* 5 vols., Oxford.

1921b *The Thousand Buddhas. Ancient Buddhist Paintings from the Cave-Temples of Tun-huang on the Western Frontier of China.* London. (Repr. Kyoto

1978).

Sundermann, W.

1974–1981 Nachlese zu F. W. K. Müller's "Soghdischen Texten I", 1–3. *Altorientalische Forschungen* 1, pp. 217–255, –4 pls. & 3, pp. 55–90, +4 pls. & 8, pp. 169–225, +13 pls.

Щербак, А. М.

1961 Надпись на древнеуйгурском языке из Монголии. *Эпиграфика Востока* 14, pp. 23–25.

Talbot Rice, T.

1965 *Ancient Arts of Central Asia.* London.

Tekin, Ş.

1961 Über die buddhistische Trinitätslehre in der uigurischen Version des Goldglanz-Sutra. *UAJ* 33, pp. 187–192.

1966 Uygur Bilgini Siṅgḳu Seli Tutuṅg'un Bilinmeyen Yeni Bir Çevirisi üzerine. *Türk Dili Araştırmaları Yıllığı Belleten* 1965, pp. 29–33.

1970 Zur Frage der Datierung des uigurischen Maitrisimit. Über die neu entdeckte Abschrift des Textes aus Hami. *Mitteilungen des Instituts für Orientforschung* 16, pp. 129–132.

1971 *Die Kapitel über die Bewusstseinslehre im uigurischen Goldglanzsūtra (IX. und X.).* Wiesbaden.

1976a Die uigurische Weihinschrift eines buddhistischen Klosters aus den Jahren 767–780 in Tuyoq. *UAJ* 48, pp. 225–230, +1 pl. (Incl. in *Eurasia Nostratica. Festschrift für Karl Heinrich Menges,* Wiesbaden 1977).

1976b *Uygurca Metinler, II: Maitrisimit.* Ankara.

1980 *Maitrisimit Nom Bitig. Die uigurische Übersetzung eines Werkes der buddhistischen Vaibhāṣika-Schule.* (*BTT* IX) 2 vols., Berlin.

Tezcan, S.

1975 *Eski Uygurca Hsüan Tsang Biyografisi X. Bölüm.* Ankara.

Thomas, F. W.

1954 Brāhmī Script in Central-Asian Sanscrit Manuscripts. In *Asiatica. Festschrift-F. Weller,* Leipzig, pp. 667–700.

Thomas, F. W. & G. L. M. Clauson

1926 A Chinese Buddhist Text in Tibetan Writing. *JRAS* 1926, pp. 508–526.

1927 A Second Chinese Buddhist Text in Tibetan Characters. *JRAS* 1927, pp. 281–306.

Thomas, F. W. & S. Konow

1929 Two Medieval Documents from Tun-huang. *Oslo Etnografiske Museums Skrifter* 3, pp. 121–160, –7 pls.

Thomas, F. W. & S. Miyamoto & G. L. M. Clauson

1929 A Chinese Mahāyāna Catechism in Tibetan and Chinese Characters. *JRAS* 1929, pp. 37–76, +1 pl.

Thomsen, V.

1912 Dr. M. A. Stein's Manuscripts in Turkish "Runic" Script from Miran and Tun-huang. *JRAS* 1912, pp. 181–227, +3 pls.

Toalster, J. P. C.

1977 *Die uigurische Xuan-zang Biographie 4. Kapitel mit Übersetzung und Kommentar.* Giessen.

Tongerloo, A. van

1982 La structure de la communauté manichéenne dans le Turkestan Chinois à la lumière des emprunts moyen-iraniens en ouigour. *CAJ* 26, pp. 262–288.

Тугушева, Д. Ю.

1974 Уйгурская версия биографии Сюань-Цзана (фрагменты из гл. X). *Письменные Памятники Востока 1971*, Москва, pp. 253–296, +14 pls.

1980 *Фрагменты уйгурской версии биографии Сюань-Цзана.* Москва.

Uray, G.

1981 L'emploi du tibétain dans les chancelleries des Etats du Kan-sou et de Khotan postérieurs à la domination tibétaine. *JA* 1981, pp. 81–90.

Winter, W.

1963 Tocharians and Turks. In D. Sinor (ed.), *Aspects of Altaic Civilization*, Bloomington & The Hague, pp. 239–251.

Zieme, P.

1974 Zu den nestorianisch-türkischen Turfantexten. In G. Hazai (ed.), *Sprache, Geschichte und Kultur der Altaischen Völker*, Berlin, pp. 661–668, +4 pls.

1975 *Manichäisch-türkische Texte.* (*BTT* V) Berlin.

1976 Sïngqu Säli Tutung----Übersetzer buddhistischer Schriften ins Uigurische. In *Tractata Altaica*, Wiesbaden, pp. 767–775, –2 pls.

秋山　光和

1982　「唐代敦煌壁画にあらわれた山水表現」　敦煌文物研究所編『中国石窟　敦煌莫高窟　五』　東京，平凡社，pp. 190－204.

安部　健夫

1955　『西ウィグル国史の研究』　京都，彙文堂書店.

池田　　温

1982　「中国における吐魯番文書整理研究の進展——唐長孺教授講演の紹介を中心に——」『史学雑誌』91－3，pp. 59－85.

井上(百濟)　康義

1972　「トカラ語仏典 Udānālaṃkāra におけるアビダルマ的註解」『仏教学研究』29, pp. 37－62.

井ノ口　泰淳

1958　「トカラ語仏典の性格（一)」『印度学仏教学研究』6－1，pp. 178－181.

1961　「トカラ語及びウラン語の仏典』　西域文化研究会編『西域文化研究』第四（別冊）　京都，法蔵館，pp. 317－388.

1975　「出土仏典の種々相」『アジア仏教史　中国編Ⅴ　シルクロードの宗教』　東京，佼成出版社，pp. 199－274.

井ノ口　泰淳　&　百濟　康義

1974　「西域における経典流通の諸問題：トカラ語Bによるアビダルマ論書関係の断片について」『仏教文化研究所紀要（龍谷大学)』13，pp. 21－36.

依布拉音・穆提依

1980　「中亜地区的三個重要民族及其語言」『新疆歴史論文続集』　烏魯木斉，新疆人民出版社，pp. 63－84.

ウィットフィールド (R. Whitfield)

1982　『西域美術（大英博物館スタイン・コレクション）1・2　敦煌絵画　Ⅰ・Ⅱ』2巻　上野アキ訳　東京，講談社.

上野　アキ

1972　「エルミタージュ博物館所蔵　ベゼクリク壁画誓願図について」『美術研究』279，pp. 1－8，＋2 pls.

上野　照夫

1962　「西域の彫塑」　西域文化研究会編『西域文化研究』第五　京都，法蔵館，pp. 213－238.

上山　大峻

1975　「敦煌仏教の盛衰」『アジア仏教史　中国編Ⅴ　シルクロードの宗教』　東京，佼成出版社，pp. 151－198.

1978　「大蕃国大徳三蔵法師沙門法成の研究」　流沙海西奨学会編『アジア文化史論叢1』　東京，山川出版社，pp. 1－179.（原載：『東方学報（京都）』38&39，1967&1968）.

梅村　　坦

1980　「住民の種族構成――敦煌をめぐる諸民族の動向――」　池田温編『講座敦煌3　敦煌の社会』　東京，大東出版社，pp. 197－223.

1983　「大谷探検隊将来ウイグル銘文木片」　護雅夫編『内陸アジア・西アジアの社会と文化』　東京，山川出版社，pp. 133－159，－3 pls.

王　　重民

1984　「敦煌変文研究」『敦煌遺書論文集』北京，中華書局，pp. 175－227.（原載：『中華文史論叢』1981－2）.

王　　重民，等（編）

1957　『敦煌変文集』（上・下）北京，人民文学出版社。（Repr.『敦煌変文』（上・下）台湾，世界書局，1973）

大谷　勝眞

1936　「高昌麴氏王統考」『京城帝国大学創立十周年記念論文集　史学篇』（京城帝国大学文学会論纂　第五輯）pp. 3－44.

小笠原　宣秀

1966a　「吐魯番仏教史研究」『仏教文化研究所紀要（龍谷大学）』5，pp. 26－38.

1966b　「唐代西域の僧尼衆団」『印度学仏教学研究』14－2，pp. 79－84.

小笠原　宣秀　&　小田　義久

1980　『要説・西域仏教史』　京都，百華苑.

小川　貫弌

1956　「吐魯蕃出土の印刷仏典」『印度学仏教学研究』4－1，pp. 28－37.

小田　壽典

1983　「龍谷大学図書館蔵ウィグル文八陽経の断片拾遺」　護雅夫編『内陸アジア・西アジアの社会と文化』　東京，山川出版社，pp. 161－184，－7 pls.

小田　義久

1976　「五道大神攷」『東方宗教』48，pp. 14－29.

卡哈尔・巴拉提

1982　「多羅郭徳回鶻文碑的初歩研究」『新疆大学学報（哲学社会科学版）』1982－4

(総28), pp. 76－77.

香川　黙識（編）

1915　『西域考古図譜・下』　東京，国華社.

金岡　照光

1971　『敦煌出土文学文献分類目録　附解説』　東京，東洋文庫.

1972　『敦煌の民衆――その生活と思想――』　東京，評論社.

1975　「タクラマカンを越えて」『アジア仏教史　中国編Ⅴ　シルクロードの宗教』東京，佼正出版社，pp. 95－150.

1981　『敦煌の絵物語』　東京，東方書店.

ガバイン（A. von Gabain）

1965－1970　「『高昌のウイグル王国』（850－1250）について」　鷲見東観訳　『愛知教育大学研究報告（人文科学編）』14（1965）pp. 25－41 & 16（1969）pp. 35－55 & 19（1970）pp. 35－52.

木村　泰賢　&　高楠　順次郎

1935　『小乗仏教思想論』　東京.

百濟　康義

1978　「五十二心所を説くウイグル訳アビダルマ論書断片」『印度学仏教学研究』26－2，pp. 1003－1000（pp. 81－84).

1980a　「ウイグル訳『倶舎論頌註』一葉」『印度学仏教学研究』28－2，pp. 944－940（pp. 44－48).

1980b　「入阿毘達磨論の註釈書について」『印度学仏教学研究』29－1，pp. 411－406（pp. 72－77).

1982a　「ウイグル訳『阿毘達磨順正理論』抄本」『仏教学研究』38，pp. 1－27, +2 pls.

1982b　「倶舎論註『金花抄』について」『印度学仏教学研究』30－2，pp. 994－989（pp. 48－53).

1982c　「ウイグル訳アビダルマ論書に見える論師・論書の梵名」『印度学仏教学研究』31－1，pp. 374－371（pp. 112－115).

熊谷　宣夫

1942　「ベゼクリク第十九号窟寺将来の壁画」『美術研究』122，pp. 22－28, +3 pls.

1953　「東トルキスタンと大谷探検隊」『仏教芸術』19，pp. 3－23, 4 figs., 4 maps.

1962　「西域の美術」　西域文化研究会編『西域文化研究』第五　京都，法蔵館，pp. 31－170, many figs.

熊本　　裕

1984 「イラン学の現段階——古・中期イラン語研究案内」『四天王寺国際仏教大学文学部紀要』16, pp. 27－102.

黄 永武（主編）

1981－ 『敦煌宝蔵』 台北，新文豊出版公司.

黄 文弼

1954 『吐魯番考古記』（中国科学院考古研究所編輯 考古学特刊 第三号）中国科学院.

耿 世民

1979 「回鶻文《玄奘伝》第七巻研究」『民族語文』1979－4，pp. 249－262.

1980a 「回鶻文《玄奘伝》第七巻研究（二）」『中央民族学院学術論文（民族語文）』3，pp. 267－304.

1980b 「古代新疆和突厥・回鶻人中的仏教」『世界宗教研究』2，pp. 73－81.

1981a 「回鶻文《土都木薩里修寺碑》考釈」『世界宗教研究』3（1981－1），pp. 77－83.

1981b 「古代維吾尔語仏教原始劇本《弥勒会見記》（哈密写本）研究」『文史』12, pp. 211－226.

1983 『維吾尔族古代文化和文献概論』 烏魯木斉，新疆人民出版社.

庫尔班・外力

1981 「吐魯番出土公元五世紀的古突厥語木牌」『文物』1981－1，pp. 63－64.

佐口 透

1973 「ウイグリスタン仏教史論」『アジア文化』9－3，pp. 2－12.

定方 晟

1971 「『慧超往五天竺国伝』和訳」『東海大学文学部紀要』16, pp. 2－30.

佐藤 圭四郎

1961 「西アジアにおける仏教流伝の痕跡（下）」『文化（東北大学文学部）』25－4，pp. 116－139.

静谷 正雄

1978 『小乗仏教史の研究』 京都，百華苑.

謝 稚柳

1955 『敦煌芸術叙録』 上海.

宿 白

1980 「調査新疆仏教遺迹応予注意的幾個問題」『新疆史学』1980－1，pp. 29－33.

庄垣内 正弘

1976 「ウイグル語写本・大英博物館蔵 Or. 8212－108について」『東洋学報』57－1・2，pp. 017－035.

1978 「'古代ウイグル語' におけるインド来源借用語彙の導入経路について」『アジア・アフリカ言語文化研究』15，pp. 79－110.

1980a 「ウイグル語文献・『阿含経』抜粋仏典について」『神戸外大論叢』31－1，pp. 1－22, +9 pls.

1980b 「ウイグル語仏典について」 樋口隆康編『続・シルクロードと仏教文化』 東京，東洋哲学研究所，pp. 249－282.

1982 『ウイグル語・ウイグル語文献の研究 I 「観音経に相応しい三篇の Avadāna」及び「阿含経」について』 神戸，神戸市外国語大学外国学研究所.

白須 淨眞

1978－1981 「高昌墓塼考釈（一）（二）（三）」〔（一）（二）は萩 信雄との共著〕『書論』13 (1978), pp. 177－198, +1 pl. & 14 (1979), pp. 168－192, +1 pl. & 19 (1981), pp. 155－173.

1983 「随葬衣物疏付加文言（死人移書）の書式とその源流」『仏教史学研究』25－2，pp. 72－99.

白土 セツ子

1975 「美術史から見た西域仏教の一考察」『仏教史学研究』17－2，pp. 20－34.

斯拉菲尔・玉素甫 & 多魯坤・闊白尔

1983 「哈密本回鶻文《弥勒会見記》第三品（1－5葉）研究」『民族語文』1983－1，pp. 50－64, +1 pl.

岑 仲勉

1947 「吐魯番木柱刻文略釈」『中央研究院・歴史語言研究所集刊』12, pp. 117－119.（再録：岑仲勉『金石論叢』1981，上海古籍出版社，pp. 453－456).

蘇 晋仁 & 蕭 鍊子（校証）

1981 『《冊府元亀》吐蕃史料校証』 成都，四川民族出版社.

孫 秉根 & 孟 凡人 & 陳 戈

1983 「新疆吉木薩尔高昌回鶻仏寺遺址」『考古』1983－7，pp. 618－623, +3 pls.

高田 時雄

1981 「チベット文字で書かれた寒食詩の断片」『均社論叢』10, pp. 66－86.

1983 「雑抄と九九表――敦煌におけるチベット文字使用の一面――」『均社論叢』14, pp. 1－4.

竺沙（ちくさ） 雅章

1982　『中国仏教社会史研究』　京都，同朋舎出版.

陳　祚龍

1982　『敦煌学要籥』　台北，新文豊出版公司.

塚本　善隆

1974　『魏書釈老志の研究』（『塚本善隆著作集』第一巻）　東京，大東出版社.

1975　「敦煌仏教史概説」『中国中世仏教史論攷』（『塚本善隆著作集』第三巻）　東京，大東出版社，pp. 317－370.（原載：『西域文化研究』第一，1958).

禿氏（とくし）　祐祥　&　小川　貫弌

1962　「十王生七経讃図巻の構造」　西域文化研究会編『西域文化研究』第五　京都，法蔵館，pp. 255－296, －8 pls.

土肥　義和

1980　「帰義軍（唐後期・五代・宋初）時代」　榎一雄編『講座敦煌　2　敦煌の歴史』東京，大東出版社，pp. 233－296.

『敦煌遺書總目索引』

1962　北京，商務印書館.（Repr. 北京，中華書局　1983).

中村　元

1970　『原始仏教の思想（上)』（『中村元選集』第13巻）　東京.

長沢　和俊（訳註）

1965　『玄奘法師西域紀行』（東西交渉旅行記全集　Ⅵ）　東京，桃源社.

1971　『法顕伝・宋雲行紀』（東洋文庫　194）　東京，平凡社.

那波（なば）　利貞

1974　『唐代社会文化史研究』　東京，創文社.

羽溪（はたに）　了諦

1914　『西域之仏教』　京都，法林館.

1942　「印欧語族民衆と仏教」『宗教研究』第四年，第２・３輯，pp. 296－313.

1971　「西域仏教文化概論序説」『羽溪了諦博士米寿祝賀記念　仏教論説選集』　東京，大東出版社，pp. 641－666.

羽田　亨

1931　『西域文明史概論』　京都，弘文堂書房.

1948　『西域文化史』　東京，座右宝刊行会.

1957　「唐代回鶻史の研究」『羽田博士史学論文集　上巻　歴史篇』　京都，東洋史研究会，pp. 157－324.

1958　a「回鶻文字考」，b「回鶻文の仏典に就て」，c「回鶻訳本安慧の倶舎論実義

疏」，d「蕃漢対音千字文の断簡」，e「トルコ族と仏教」『羽田博士史学論文集 下巻　言語・宗教篇』　京都，東洋史研究会，(a) pp. 1－38, (b) pp. 49－63, (c) pp. 148－182, ＋2 pls., (d) pp. 396－419, ＋1 pl., (e) pp. 490－512.

馬　世長

1978　「関于敦煌蔵経洞的幾個問題」『文物』1978－12, pp. 21－33, 7 figs.

平川　彰

1974　『インド仏教史　上巻』東京，春秋社.

馮　家昇

1953　『回鶻本写本“菩薩大唐三蔵法師伝”研究報告』（中国科学院考古研究所編輯 考古学専刊　丙種第一号）　中国科学院。

1962　「1959年哈密新発現的回鶻文仏経」『文物』1962－７・８，pp. 90－97, －2 pls.

馮　承鈞

1967　「高車之西徙与車師鄯善国人之分散」『西域南海史地考證論著彙輯』　香港，中華書局，pp. 36－47.（原載：『輔仁学誌』11・12）

藤枝　晃

1941－1943　「沙州帰義軍節度使始末(一～四・完)」『東方学報(京都)』（一）12－3 (1941), pp. 58－98 &（二）12－4（1942), pp. 42－75 &（三）13－1（1942), pp. 63－94 &（四・完）13－2（1942), pp. 46－98.

1961　「吐蕃支配期の敦煌」『東方学報（京都)』31, pp. 199－292.

1964　「敦煌千仏洞の中興」『東方学報（京都)』35, pp. 9－139, many figs.

1972　「敦煌写本の編年研究」『学術月報』309, pp. 7－11, 3 figs.

1977　「敦煌オアシスと千仏洞」　毎日グラフ別冊『敦煌・シルクロード』　東京，毎日新聞社，pp. 63－67.

牧田　諦亮

1976　『疑経研究』　京都，京都大学人文科学研究所.

松本　榮一

1937　『燉煌画の研究』２巻（図像篇，附図）　東京，東方文化学院東京研究所.

松本　文三郎

1914　『仏典の研究』　東京，丙午出版社.

水谷　真成（訳註）

1971　『大唐西域記』（中国古典文学大系　22）　東京，平凡社.

壬生（みぶ）　台舜

1983　「六道説に関する二，三の問題について」　高野山大学仏教学研究室編『中川善

教先生頌徳記念論集　仏教と文化』　京都，pp. 539－551.

宮治　昭

1982　「キジール石窟における涅槃の図像構成」『オリエント』25－1，pp. 111－129, 2 figs., ＋2 pls.

宮本　正尊

1929　「燉煌出土大乗中宗見解及びその研究」『宗教研究』新6－4，pp. 103－128.

村上(平野)　真完

1961　「ベゼクリク第九号窟寺銘文による誓願画の考察」『美術研究』218，pp. 27－44.

1981　「ベゼクリクの誓願画とその仏陀観」『宗教研究』54－3，pp. 298－299.

1984　『西域の仏教　ベゼクリク誓願画考』　東京，第三文明社.

孟　凡人

1981　「新疆柏孜克里克(ベゼクリク)窟寺流失域外壁画述略」『考古与文物』1981－4，pp. 43－61, 15 figs.

1982　「略論高昌回鶻的仏教」『新疆社会科学』1982－1，pp. 58－73.

1984　「論別失八里」『新疆社会科学』1984－1，pp. 117－129, 2 figs.

護(もり)　雅夫

1962　「ウィグル語訳金光明最勝王経」『史学雑誌』71－9，pp. 66－81.

1972　「突厥帝国内部におけるソグド人の役割に関する一資料――ブグト碑文――」『史学雑誌』81－2，pp. 77－86.

1974　「モンゴリア出土五銖銭の突厥文字銘文考」『考古学ジャーナル』92，pp. 2－5, 1 fig.

1975　「いわゆるチュルギシュの銅銭の銘文について」『三笠宮殿下還暦記念オリエント学論集』　東京，講談社，pp. 322－329.

1976a　「突厥碑文劄記――突厥第二可汗国における‘ナショナリズム’」『東洋史研究』34－4，pp. 1－31.

1976b　『古代遊牧帝国』（中公新書　437）　東京，中央公論社.

1977　「古代トルコ民族と仏教」『現代思想』5－14（12月号），pp. 114－124.

1978　「シルクロードの言語」　月刊『言語』7－7，pp. 2－13.

森安　孝夫

1974　「ウィグル仏教史史料としての棒杭文書」『史学雑誌』83－4，pp. 38－54.

1977　「ウィグルの西遷について」『東洋学報』59－1・2，pp. 105－130.

1979　「増補：ウィグルと吐蕃の北庭争奪戦及びその後の西域情勢について」　流沙海西奨学会編『アジア文化史論叢　3』　東京，山川出版社，pp. 199－238.

1980a 「ウイグルと敦煌」 榎一雄編『講座敦煌 2 敦煌の歴史』東京，大東出版社，pp. 297－338.

1980b 「イスラム化以前の中央アジア史研究の現況について」『史学雑誌』89－10, pp. 50－71.

1985 「(敦煌出土) ウイグル語文献」 山口瑞鳳編『講座敦煌 6 敦煌胡語文献』東京，大東出版社，(印刷中).

矢吹 慶輝

1933 『鳴沙餘韻解説』 東京，岩波書店，12＋26＋(第一部) 316＋(第二部) 560＋28 pages.

山田 信夫

1971 「中央アジアの新しい役割」 山田信夫編『ペルシアと唐』(東西文明の交流 2) 東京，平凡社，pp. 432－449, 5 figs.

頼富(よりとみ) 本宏

1978 「ラダック地方に見られる二つの壁画について」『密教学研究』10, pp. 1－16, 3 figs.

李 経緯

1982 「哈密本回鶻文《弥勒三弥底経》第二巻研究」『民族語文研究文集』 西寧，青海民族出版社，pp. 673－704, ＋2 pls.

李 泰玉

1983 「新疆仏教由盛転衰和伊斯蘭教興起的歴史根源」『新疆社会科学』1983－1, pp. 105－116.

リトビンスキー (B. A. Litvinsky)

1972 「西トルキスタンの仏教」 水谷幸正訳 佐藤密雄博士古稀記念論文集刊行会編『佐藤博士古稀記念 仏教思想論叢』 東京，山喜房仏書林，pp. 1076－989 (pp. 45－132), 2 figs., ＋1 map.

ル・コック (A. von Le Coq)

1962 『中央アジア秘宝発掘記』(角川文庫 2167) 木下龍也訳 東京，角川書店.

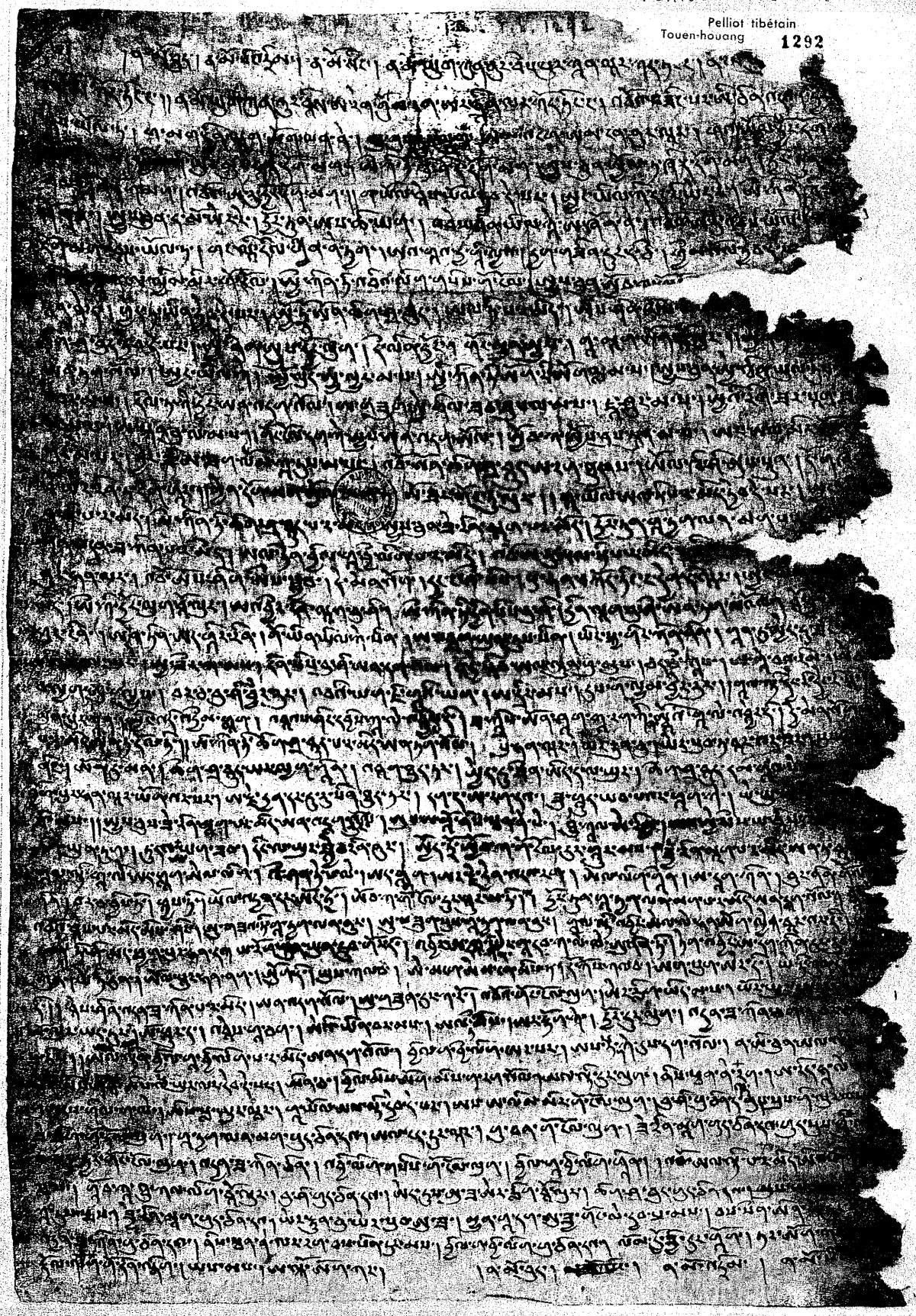
略 号 表 ABBREVIATIONS

AD	B. Karlgren, *Analytic Dictionary of Chinese and Sino-Japanese.* Paris 1923.
ADAW	*Abhandlungen der Deutschen Akademie der Wissenschaften zu Berlin,* Klasse für Sprachen, Literatur und Kunst.
AO	*Acta Orientalia,* Copenhagen.
AOH	*Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae,* Budapest.
APAW	*Abhandlungen der Preussischen Akademie der Wissenschaften,* Phil.-hist. Klasse, Berlin.
BEFEO	*Bulletin de l'Ecole Française d'Extrême Orient.*
BSOAS	*Bulletin of the School of Oriental and African Studies.*
BTT	*Berliner Turfantexte,* East Berlin.
CAJ	*Central Asiatic Journal.*
Caus.	Causative form of Verb.
Chin.	Chinese.
ED	G. Clauson, *An Etymological Dictionary of Pre-Thirteenth-Century Turkish.* Oxford 1972.
fig(s).	figure(s).
GSR	B. Karlgren, *Grammata Serica Recensa.* Stockholm 1972.
Hend.	Hendiaduoin, two words combined to give one meaning.
JA	*Journal Asiatique.*
JRAS	*Journal of the Royal Asiatic Society.*
l., ll.	line, lines.
MRDTB	*Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko,* Tokyo.
n.	note.
no(s)., No(s).	number(s).
p., pp.	page, pages.
$P_{(.)}$	(Fonds) Pelliot.
P. c.	Pelliot chinois.
pl(s).	plate(s).
P. t.	Pelliot tibétain.

Refl.	Reflexive form of Verb.
SDAW	*Sitzungsberichte der Deutschen Akademie der Wissenschaften zu Berlin,* Klasse für Sprachen, Literatur und Kunst.
Skt.	Sanskrit.
Sogd.	Sogdian.
Soothill	W. E. Soothill & L. Hodous, *A Dictionary of Chinese Buddhist Terms with Sanskrit and English Equivalents.* London 1937.
SPAW	*Sitzungsberichte der Preussischen Akademie der Wissenschaften,* Phil.-hist. Klasse, Berlin.
Tib.	Tibetan.
Tokh.	Tokharian.
TP	*T'oung Pao.*
TTT	Türkische Turfan-Texte.
Türk.	(Old or Middle) Turkic.
UAJ	*Ural-Altaische Jahrbücher.*
Uig.	Uigur (uyγur).
UW	K. Röhrborn, *Uigurisches Wörterbuch. Sprachmaterial der vorislamischen türkischen Texte aus Zentralasien.* Wiesbaden 1977–
ZDMG	*Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft.*
+	ページに含まれないもの（図版，地図，その他）
−	ページに含まれるもの（同上）

Pl. 608

Pelliot tibétain 1292



A. Spanien & Y. Imaeda (éd.) *Choix de documents tibétains, Tome II* (Paris 1979) より転載。